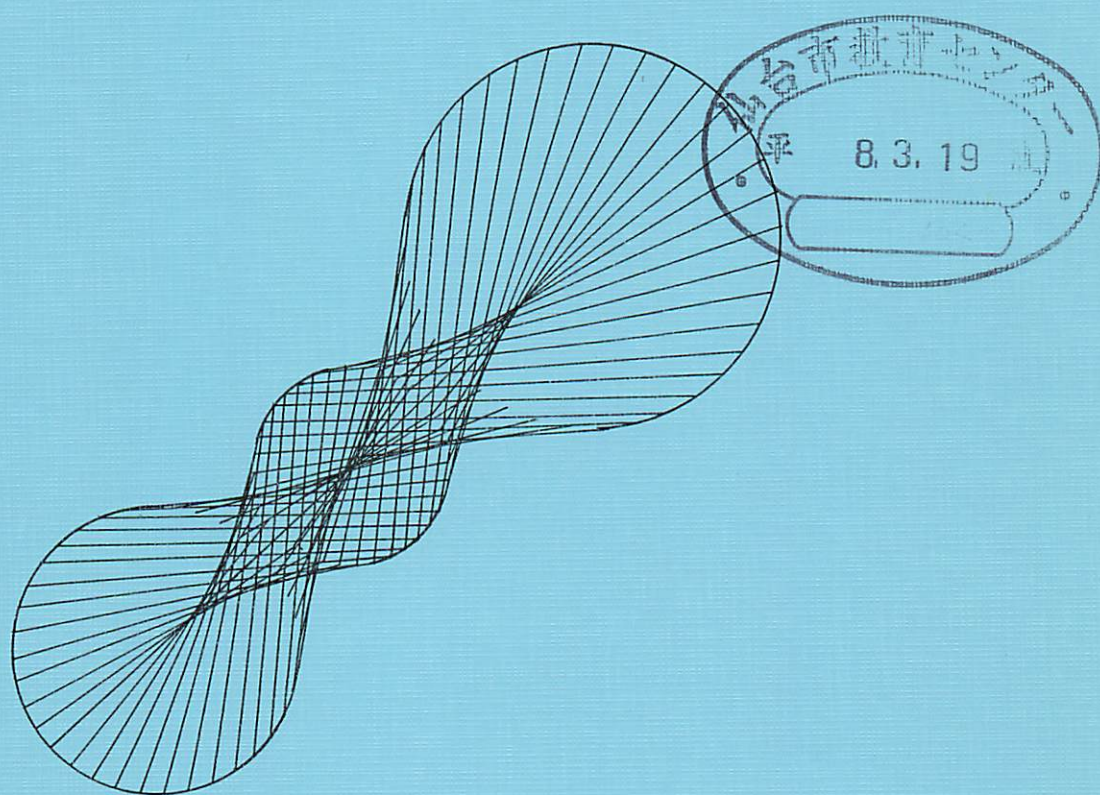


教育はいま

第3号



仙台市教育センター

は　じ　め　に

平成5年4月に仙台市における教育の充実と振興を目的として開所いたしました教育センターですが、先生方の温かいご理解とご支援により各事業を順調に進めさせていただいております。教職員の研修事業をはじめとして、様々な教育課題に対処するための調査研究事業、教育についての情報の収集及び提供に関する事業、教育相談に関する事業などいずれも本市教育の充実・振興を図る上で不可欠の事業としてその拡充・整備に日々取り組んでおります。まだまだ不備、不十分のところも決して少なくありませんが、研修・研究の中核機関として、あるいは情報、教育相談の拠点として今後さらに前進していきたいと意を新たにしております。

さて、このたび調査研究事業における成果として教育研究紀要『教育はいま』（第3号）発刊の運びとなりました。この紀要は、昨年5月に委嘱研究員として協力をお願いいたしました学識経験者、学校教育現場の先生方（21名）による共同研究の結果をまとめたものです。今年度は教科・領域に関するもの（専門研究）として国語と社会、今日的教育課題に関するもの（課題研究）として国際理解教育の三分野について調査研究委員会を設け調査研究を行いました。各委員会の研究主題は次のとおりです。

○国語科……………「読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方」

—計画的、継続的な読書活動への支援を通して—

○社会科……………「子供たちが意欲を持ち主体的に取り組む社会科学習の在り方」

—地域教材の活用と支援の工夫を通して—

○国際理解教育……………「学級における相互理解を図るための国際理解教育」

—外国人児童との触れ合い体験を通して—

いずれの調査研究委員会でも日々の教育活動の改善に具体的に役立つような実践的な方策について様々な角度、観点からそれを探って参りました。これらの研究成果が各教育現場において大いに活用され生かされることを切に願っております。社会の著しい変化は教育に新たな対応を迫っています。授業改善やこれからの教育の在り方など教育はいま多くの課題を抱えていますが、本研究紀要『教育はいま』がこれら諸課題解決の糸口になれば誠に幸いでありうれしく思います。

終わりに、調査研究を進めるに当たり懇切丁寧にご指導ご助言くださいました宮城教育大学の宮川健郎先生、田中武雄先生、宮城学院女子大学の山形孝夫先生に厚く御礼申し上げるとともに、貴重な実践や体験に基づきご協力いただきました委嘱研究員の先生方に心からの感謝と敬意を表します。

平成8年3月

仙台市教育センター

所長 長 澤 靖 彦

総 目 次

■読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方	5
—— 計画的，継続的な読書活動への支援を通して ——	
■子供たちが意欲を持ち主体的に取り組む社会科学習の在り方	39
—— 地域教材の活用と支援の工夫を通して ——	
■学級における相互理解を図るための国際理解教育	69
—— 外国人児童との触れ合い体験を通して ——	

読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方

—— 計画的，継続的な読書活動への支援を通して ——

■要 約

この研究は，国語科及び読書生活における読書活動への支援を通して読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方を探ろうとしたものである。

指導学級での児童の実態を踏まえ，授業実践と事例研究を行った。

その結果，児童の読書実態を共感的に受け止めること，読み聞かせなどを通して本との出会いの場を意図的・計画的に設けること，読書活動を通じた児童間の交流を図ることなどの手だてが有効であることが認められた。

■キー・ワード

☐国語科読書指導

☐読書生活の指導

☐読書活動への支援

☐読書意欲

☐事例研究

目 次

I	主題設定の理由	
1	読書の意義	7
2	読書離れの実態	7
3	読書指導の必要性	7
II	研究の基本的な考え方	
1	国語科での計画的な読書指導の在り方を探る	7
2	学級での読書生活の指導の在り方を探る	8
3	個に応じた継続的な指導の工夫を図る	8
III	研究の目標	8
IV	研究の仮説	8
V	研究の内容と方法	
1	児童の読書傾向の実態把握	8
2	国語科における読書指導計画の作成	8
3	国語科における読書指導の実践	8
4	読書生活の指導の実践	8
VI	研究の実際	
1	授業実践	9
2	事例研究	22
VII	研究のまとめ	
1	授業実践から	30
2	事例研究から	30
VIII	研究の反省と今後の課題	
1	研究の反省	31
2	今後の課題	31
◇	参考文献	31
◇	委嘱研究員	31
◇	資 料	
	・読書指導計画	32
	・読書指導の手引き	35

I 主題設定の理由

■ 1 読書の意義

読書は、児童の知的活動を増進し、人間形成や情操を培う上で、学校教育上重要な役割を担っている。また今日、社会の情報化の急速な進展に伴い、児童自らが必要な情報を収集、選択、活用する能力の育成が必要とされている。さまざまなマス・メディアによって多くの情報が飛び交う現代においても、文字情報の一つである図書が重要な情報源であることに変わりはない。

■ 2 読書離れの実態

全国学校図書館協議会と毎日新聞社とが共同で毎年行っている「学校読書調査」によれば、1994年の「不読者」（5月という時点での一か月に本を一冊も読まなかった者）は、小学生で13.5%（過去最高のデータ）、中学生で49.9%となっており深刻な読書離れの傾向が認められる。この調査から総じて言える現代の子供の読書の特徴は、「教養の読書」から「娯楽の読書」への一層の変化である。とりわけ象徴的な変化は、女子の十代恋愛小説と男子のゲームファンタジー小説への傾倒である。また、これまでよく読まれてきた特定の名作や伝記が漸減していることも特徴的である。

つまり、今の子供たちは読書を「教養や修養の糧」とみなすことはなく、「遊びや楽しみ」の一つとしてとらえているのである。これまでの読書指導が、個々の子供の実態に合わせた「適書」より、大人の選んだ「良書」を重視してきた経緯があり、そうした指導が現代の子供の実態に即しているとは言い難い。子供の側に立った指導が求められるゆえんである。

■ 3 読書指導の必要性

読書離れの児童の多くは、十分な読書体験を持たないために、読書の楽しさを味わうことなく、手軽に楽しめるテレビや漫画などの映像文化に

浸っていると考えられる。いわゆる、読書の「食わず嫌い」である。

このような児童に対しては、読書が他の映像メディアとは異なる質的な違いとよさを持つことを体験的に理解させた上で、主体的に図書を選択し読書を楽しむ態度を育てることが大切と考える。

また、読書はしているものの、偏った読書や娯楽のみの読書に陥っている児童も見受けられる。こうした児童の多くは、論理的に物事を考えたり自己のものの見方や考え方を広げたりすることが不得手である場合が少なくない。さらに、読む能力はあるのに読書に興味・関心を示さない児童の存在も見逃せない。

そこで、このような児童の実態に対応するために、読書環境の整備、読書意欲の喚起、読書体験の拡充などの支援の手だてが今、学校教育に求められている。

以上のことを踏まえ、学校とりわけ学級における読書指導の在り方を探り、読書を楽しむ児童を育てることを目指した研究を進めることは、今日的な意義があると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 国語科での計画的な読書指導の在り方を探る

読書指導の場は、教育課程全般にわたっており国語科や図書館教育に限らない。しかし、指導時間の確保及び読解指導との関連並びに系統的な読書への誘いが可能な国語科の役割は、図書館教育と共に強調されてよいと考える。

国語科教育の当面する課題として、読解偏重の指導や教科書中心主義が挙げられているが、読書指導の不振は、このような課題と無縁ではない。こうした現状を打開するためには、国語科の学習指導計画の中に読書指導や学校図書館の利用を計画的に位置付け、計画的、継続的な指導・支援を行う必要がある。

本研究ではこのような考え方にに基づき、国語科における読書指導の可能性、とりわけ読書指導の授業の在り方を探りたいと考えた。

2 学級での読書生活の指導の在り方を探る

読書活動は学校教育の教科指導に限らず、道徳や特別活動においても行われる。家庭における読書活動も、読書習慣を形成する一つの重要な場である。このように見ると、児童の読書生活は極めて広範な場を持っており、日常における読書生活の指導の必要性和重要性が浮き彫りになる。

学校教育における読書活動の指導のかなめは学級である。とりわけ、学級担任制をとる小学校においては、学校生活の様々な場における学級担任による指導の適否が、読書活動に対する児童の関心・意欲を左右すると考えられる。

そこで本研究においては、長期間にわたる学級集団に対する読書指導を行う一方、ある特徴的な傾向をもった児童（着目児童）を対象とした読書生活の指導を進め、事例研究を通してよりよい児童の変容を目指す読書生活の指導の在り方を探りたいと考えた。

3 個に応じた継続的な指導の工夫を図る

もとより読書は個人的・主体的なものである。画一的に読むことを強制された環境のもとでは、進んで本を読もうという意欲は生まれない。一人一人の読書力や興味・関心が基本的に異なっていることを前提とした、個々の児童に対する適切な読書への誘いが必要である。

しかし、読書習慣の形成や読書意欲の喚起は、一朝一夕に成るものではない。これらは、児童の主体的な意志のもとに、図書との自然なかかわりを通して醸成されるものだけに、長い期間と粘り強い指導・支援が求められる。また、個々の児童の読書実態に寄り添う教師の柔軟な感性や場に応じた適切な支援も不可欠である。

そこで、一斉指導時において児童間の読書情報

の交流の場を設けるとともに、読書生活の場においても個に応じた継続的な指導を進め、読書体験の拡充を図りたいと考えた。

Ⅲ 研究の目標

読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方を、国語科及び読書生活における支援を通して実践的に究明する。

Ⅳ 研究の仮説

国語科及び読書生活の指導において、読書指導（一斉指導、個に応じた指導）を計画的、継続的に進める過程で、読書への興味・関心を高め、豊かな読書体験を与えるならば、児童は読書を楽しむようになるであろう。

Ⅴ 研究の内容と方法

1 児童の読書傾向の実態把握

- (1) 学級集団の実態把握
- (2) 個々の児童の実態把握（着目児童）

2 国語科における読書指導計画の作成

- (1) 国語科単元構成に準拠した読書指導計画の作成
- (2) 国語科単元に対応した読書教材の位置付け

3 国語科における読書指導の実践

- (1) 国語科読解指導との関連指導の拡充
- (2) 読書意欲を高めるための指導の工夫

4 読書生活の指導の実践

- (1) 着目児童にかかわる事例研究
 - ①読めない児童
 - ②読書傾向に偏りがある児童
 - ③読む力があるのに読まない児童
- (2) 読書習慣の形成を目指す指導
 - ①学級の読書環境の整備
 - ②読書意欲の喚起を図る手だての工夫

Ⅵ 研究の実際

1 授業実践

■ 授業実践1 仙台市立南吉成小学校 1年

(1) 単元名 (そうごう) おはなし大すき

—おはなしげきじょうをひらこう—

(2) 単元の趣旨

本単元は、お話を聞いたり読んだりすることを中心とした総合活動を通して、本を読むことの楽しさを知り、積極的な読書への姿勢を育てていくことをねらいとしている。

この時期のほとんどの児童は、自分で文字を追って読む、いわゆる読書の習慣を持っていない。そこで、まずいろいろな本と出会い、読むことの楽しさを十分味わえるようにしていきたいと考える。読書は本来個人的なものであるので、学級での活動としては、読んだ本を紹介したり感想を話し合ったりすることなどが考えられる。

本実践では、自分が読んでおもしろかった本を紹介し合い、読書体験を共有する一つの方法として「お話劇場」を取り上げる。話を聞き合うことは、楽しい活動となるであろう。また、友達の発表を聞いて「今度は自分で読んでみよう」という主体的で活発な読書への取り組みを期待したい。

(3) 児童の実態(男子17名、女子14名、計31名)

5月の調査では、ほぼ全員が「本が好き」と答えており、毎晩母親が読み聞かせをしている児童も少数だがいた。大部分の児童は、習い事や遊びで忙しく読書の習慣はない。一番好きな本を挙げる問いでは、記入のない児童が4名、月刊誌を挙げた児童が2名いた。「どの本を読ませたらよいか分からない」という保護者の声と併せて、心踊るような本との出会いをまだ経験していない児童が多いのではないかと考えられる。

(4) 児童の言語活動としての「お話劇場」

「お話劇場」では、次の三つの方法を選んだ。これは、国語科における、音読と話すという音声言語活動を重視したためである。

・「お話劇場」の三つの活動に対する考え方

—〈リーダーズシアター〉(朗読劇)—

本を持って読むことで、児童は安心して取り組みられると思われる。簡単な動作や小道具によって、劇的雰囲気を作り上げたい。

—〈パネルシアター〉(貼り絵人形劇)—

絵人形を作ることが負担となるが、一方では、その自分の作った絵人形を用いて話すことが大きな楽しみとなるであろう。

—〈ストーリーテリング〉(素話)—

話を一度自分の中で消化して、何も見ないで表現する必要があり一番難しいと言える。聞き手の温かい雰囲気を特に大事にしたい。

(5) 学習指導の展開の工夫

① 読書生活への意欲を高める。

本単元の指導に当たっては、「お話劇場」を開くことを話しておき、児童一人一人が「自分はこの本がいいな」という、心の中での何冊かのブックリストを持っているようにする。そのためには日常的な実践の積み重ねを大事にし、朝の会で好きな本を順番に紹介し合う活動を取り入れたり、教師が読み聞かせ、ストーリーテリング、パネルシアター、ブックトークなどをして見せたりし、読書への興味を高めていくようにする。

② 段階を踏まえた指導を行う。

リーダーズシアター、パネルシアター、ストーリーテリングの三つの活動については、次のような段階を踏まえた指導を試みる。

〈ステップ1〉教科書教材の発展として、三つの活動を全員が体験する。

〈ステップ2〉「お話劇場」で、三つの活動の一本単元—自分の好きな方法を選ぶ。

〈ステップ3〉学級活動として、三つの活動を含む自分の好きな活動に取り組む。

③ 聞くことの指導を重視する。

楽しんで、しかも主体的に聞く指導をする。友達の発表の良い点を発見しながら聞き、相互評価カードを書くことを授業の中で取り上げたい。

(6) 単元の指導の経過(12時間扱い)

Cは児童のつぶやきや発言

次	時	ねらいと評価の観点	主な学習活動	指導・支援の工夫	児童の反応
第一 次	1	○学習の見通しを持つ。 〈関心・意欲・態度〉 ・うなずいたり笑ったり 声を出したりしながら 喜んで聞く。	1 学習の見通しを持つ。 2 教師のブックトークと読 み聞かせを聞く。 【学習の見通しを持つ】	1 単元の流れを表にして示す。 2 テーマは「どの本選ぼうか な」とする。三つの活動に 適した本を2～3冊紹介し その中で1冊読み聞かせを する。	・『こぶとりじい』の読 み聞かせを喜んで聞く。 C 私は、リーダーズシア ターがいいな。 C 短い話がいいんだね。
第 二 次	2・3	○「お話劇場」で紹介 したい本を選び読む。 〈理解〉 ・発表のために本を読 む。	1 既に読んだ本を読み返し たり、友達や教師と相談 したりして、紹介したい 本を選ぶ。 2 どの方法が適しているか 考える。 【発表のための読書】	1 文章が絵から自立してい ない作品(絵で語っている もの)は適さないことを話 す。 2 発表のための読書である ので、この時間に必ずしも 最後まで読み通さなくても よいことを話しておく。	・文章が自立しているか どうかは、児童には判 断が難しい。 C 登場人物が多いからパ ネルシアターにいいね。 C この本おもしろいから これやりたいな。
	4	○どの本をどの発表方 法で紹介するか決め る。 〈理解〉 ・自分の紹介したい本 と発表方法を決める。	1 リーダーズシアター、パ ネルシアター、ストー リーテリングの三グループ に分かれ、紹介する本を 決める。 2 役割分担をする。 【発表のための話し合い】	1 自分が紹介したい本を持 ち寄り、どの本にするか話 し合う。 2 自分のやりたい役ができ るだけ実現するように配慮 する。	・自分のやりたいグルー プに行き、本を選んだ。 C ぼくは、ナレーターを やりたい。 C だれがどこを話すか順 番を決めようね。
	5・6 八二時間連続	○発表のために、進ん で話す。 〈表現〉 ・自分の役に取り組み 進んで話す。 ※アンダーラインは、 主として、教師と共 にする活動。	・三グループに分かれて練 習する。【発表の練習Ⅰ】	・始めに全員を集め、学習 の見通しを持つ。	〈リーダーズシアター〉 ・自分のせりふがないと 登場しなかったが、例 えば、「甘おじいさん が」とナレーターが言 った時に、登場できる ようになった。 〈パネルシアター〉 ・絵をはった後、前を向 き話せるようになった。 〈ストーリーテリング〉 ・自主的に読みを分担し 繰り返して話している。
	7・8 八二時間連続	○グループの友達と聞 き合い、励まし合う。 〈理解〉 ・グループの友達の良 い点を発見しながら 聞く。 ※ アンダーラインは 主として、教師と共 にする活動。	・グループの中で友達と聞 き合う。【発表の練習Ⅱ】	・友達の良い点を発見し、話 し合うようにする。	〈リーダーズシアター〉 ・ナレーター以外は、せ りふを暗記できた。 〈パネルシアター〉 ・話と絵が合っていない こともあった。 〈ストーリーテリング〉 ・とても自信にあふれ、 大きい声で話している C 早くお話劇場したいな あ。
	9・10 (本時)	○大きい声で発表し、 楽しんで聞く。 〈表現〉〈言語〉 ・大きい声ではっきり と話す。 〈理解〉 ・うなずいたり、友達 の良い点を発見した りしながら聞く。	1 プログラムにしたがって 一グループずつ発表をす る。 2 友達の発表の良い点を発 見しながら聞き、「よか ったよカード」を書く。 【お話劇場】	1 発表者の動きは次のとお りとする。 ①教師の発表前の助言を聞く。 ②発表する。 ③教師の発表後の称賛を聞く。 ④友達から「よかったよカー ド」を受け取る。 2 「よかったよカード」は、 短い言葉でよいこととする。	・出番を楽しみにして大 きい声で発表している。 ・違うグループの発表を 聞くのは初めてであり、 じっと聞いている。時 時笑いもあるが、あま り言葉を発した児童は いない。 ・「よかったよカード」 は抵抗なく書いている。
第三 次	11・12	○テーマに沿った本を 選び、楽しんで読む。 〈関心・意欲・態度〉 〈理解〉 ・テーマに沿った本を 選び、読む。	1 教師のブックトークと読 み聞かせを聞く。 2 テーマに沿った本を選ん で読む。 【テーマ読書 一昔話を読もう一】	1 「お話劇場」で紹介され た本を並べ、「昔」で始ま っていることに気付くよ うにする。日本と外国の 昔話を2～3冊紹介し、 そのうち1冊読み聞かせ をする。 2 学年文庫には何冊ある か探して読む。	・どの本も「昔」で始 まっていることに気付 いた時は、拍手をして うれしそうだった。 ・とても喜んで昔話の 本を探して読んでい る。 C もう10冊も見つけたよ。

(7) 指導の実際と結果

ー「おはなしげきじょう」を中心にー

① リーダーズシアター

- ・『ふるやのもり』（ほるぷ） 9名

リーダーズシアターでは、地の文の量が多いため、ナレーターを3名とした。動作やお面をつけたことは、見る楽しみを増した一方で話のイメージを限定することにもなったと考えられる。

― 事後の感想より（O・M男児） ―

ぼくのやくは、ナレーターでした。じぶんできめたやくでした。みんながんばっていてすこしまちがえたり、おくれたところもあったけど、がんばったからよかったです。

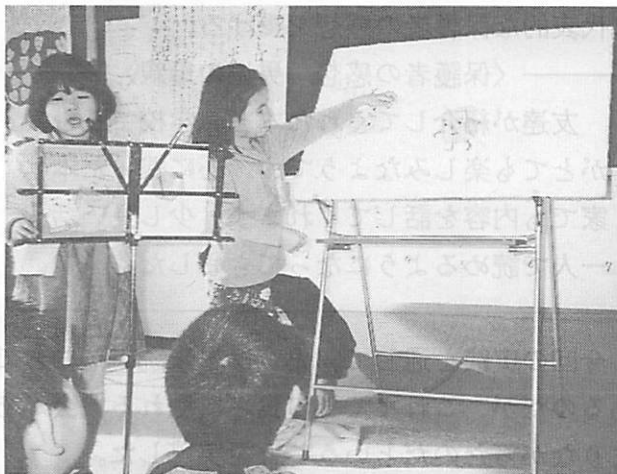
② パネルシアター

- ・『たまごのあかちゃん』（福音館） 5名
- ・『かたあしのひよこ』（ほるぷ） 6名
- ・『おとうふさんとこんにゃくさん』（童心社） 3名

事後の児童の感想で、一番人気の高かったのが『おとうふさんとこんにゃくさん』だった。単純な話で節をつけて話したことがその理由であろう。

― 事後の感想より（T・S女児） ―

リズムをつけて「ごにゅういん」というところがむずかしかったです。だけど、がんばりました。じょうずにできたかなとしんぱいでした。じょうずだったとおもいました。



パネルシアターの発表

③ ストーリーテリング

- ・『にんじんさんがあかいわけ』（童心社） 2名
- ・『きつねとたぬきのばけくらべ』（童心社） 3名
- ・『やまんじいとたろう』（童心社） 2名

ストーリーテリングでは、言葉のみから想像を広げるといふ読書に一番近い形での感受ができた。どれも短い話だが、一人で話し通すのは難しく、一つの話の何人かで分担して発表した。

― 事後の感想より（T・M女児） ―

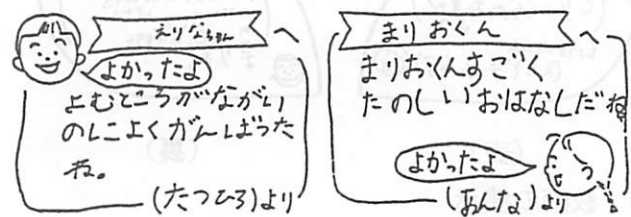
『にんじんさんがあかいわけ』という本はとてもおもしろいです。こんどまたやりたいなとおもいました。なんのおはなしをやるかはやくきめたいなとおもいました。

④ 相互評価の工夫

発表が終わるごとに「よかったよカード」を書く時間を取った。児童は、友達に何をほめてもらえるか、とても楽しみにしており、ほとんどの児童が、事後の感想でカードのことに触れていた。

― 事後の感想より（S・T女児） ―

よかったよカードは4まいもらったよ。わたしは、なんまいもらえるかたのしみにしていました。せんせいのをあわせて5まいです。



⑤ 考察

ア 「お話劇場」を取り上げた意義

読書が書かれた情報を受け取るのに対して「お話劇場」では、児童一人一人が情報の発信者となることができた。この点で、発表した児童はその本と深く出会ったと言える。また、紹介された本を読んだり、発表の中に気に入った言葉をつぶやいたりしている姿が見られ、聞き手の児童におい

ても読書への意欲が高まったと言えよう。

イ 「お話劇場」から幅広い読書へ

「お話劇場」で発表した7冊のうち6冊が昔話であった。そこで、「昔話を読もう」をテーマに教師がブックトークを行った。その後児童は、大変喜んで昔話の本を探し読んでいた。このような方向性を示した読書が児童の意欲を高めることに驚かされた。

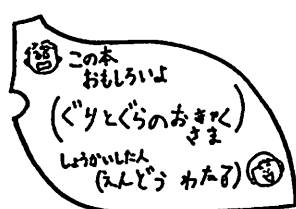
ウ 一層楽しい活動とするために

「お話劇場」では、TT方式を取り入れ、舞台の準備と児童への励ましを分担して指導に当たれば、もっと効率的できめの細かい指導ができたと思われる。また、ほかの学年の児童や保護者など学級以外の人に見てもらえば、児童の発表意欲も一層高まっていくことであろう。

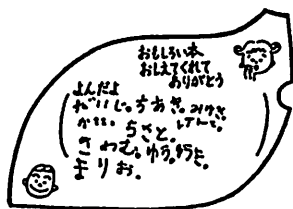
(8) 読書生活の指導

① 「この本おもしろいよ」(本の紹介)

朝の会で一人1冊ずつ自分の好きな本を紹介し合い、1週間程度教室に置いて読み合った。葉の形のカードを用意し、読んだ児童はカードに名前を書いて教室の「おはなしの木」に掲示した。



(表)



(裏)

② 教師の演示

教師が日常的に読み聞かせやストーリーテリングなどを行ったことは、児童の読書に対する興味を高めた。しない日があると「今日はどうして読んでくれないの」という声が聞かれた。

(9) 指導を終えて

① 教室での様子の変化

1学期と比較すると、1冊の本に集中しないで次々に本を取り替える児童が大幅に減少した。文字に抵抗がある児童が、一文字一文字指で押さ

つぶやきながら読んでいる姿も見られる。「みんなの本コーナー」(朝の会で紹介した本が並べてある)で、本を読む児童が日常的に多く見られるが、一方「先生、このごろみんな外で遊ばなくなったね」という児童の声もあり、考えさせられた。

また、日記に読書について書いてくる児童が増えてきた。次に、実態調査では読書量や読書時間が少なかった児童の11月の日記を掲げる。二人とも読書が身近なものになったことがうかがえる。

——〈不読児K・T男児〉——

きょう、いずみとしょかにいきました。一人5さつだから5さつかりました。すこしあつい本をかりました。はやくよみたいです。

——〈読書時間の短かったT・A女児〉——

きょう、「まほうつかいのカリンさん」の本をよみました。せんせいもあつたらよんでみてね。とってもたのしかったよ。がっこうのみんなにもみせたいなとおもいました。

② 読書量の比較(1か月に読んだ冊数)

	男子	女子	平均	不読児
5月	3.0	6.3	4.5	2名
11月	5.4	16.1	10.4	0名

1年生の場合短いものが多く、数字だけでは

判断できない面もあるが、保護者からは家でも読むようになったという声が数多く聞かれた。次に代表的な保護者の感想を掲げる。

——〈保護者の感想 男児の母親〉——

友達が紹介してくれた本を、学校で読むのがとても楽しみなようです。心に残った本は家でも内容を話してくれます。少し長い話も一人で読めるようになってきました。

今回の実践を通して、児童は本来読書が好きであるのだが、これまでその良さに触れる機会があまりなかったのだということを実感した。

今後も計画的、継続的な指導を続けていきたい。

■ 授業実践2 仙台市立八木山小学校 3年

(1) 単元名 きつねのお話を読もう

(中心教材：手ぶくろを買いに)

(2) 単元の趣旨

本単元は、「手ぶくろを買いに」を中心教材としながら、きつねの登場する本に対する興味・関心を持たせることにより読書活動を活発にし、さらに読解指導を読書指導につなげたいという意図のもとに設定したものである。

発展的な読書活動を行う場合の指導の観点として、文学教材の場合は、教科書教材以外の作者による他の作品を補って読ませるという読書活動を活発にするための配慮事項がある。「手ぶくろを買いに」の作者である新美南吉の作品は全集などに数多く収められ、児童が同一作者の作品を手にする機会も多い。さらに「きつね」の話は2年生までの教科書にも登場し、低学年向きの絵本や物語にも「きつね」を主人公として扱ったものがたくさんあるので、児童はきつねをより身近なものにとらえ、興味をもって学習に取り組むだろうと思われる。

(3) 児童の実態(男子14名、女子16名、計30名)

本学級の児童は、大多数が「読書は好き」と答えている。しかし、5月の調査では1か月間の読書冊数の平均が男子は1.3冊と低く、不読児も4名見られた。女子に比べて男子の読書に対する関心の乏しさが目立っている。

よく本を読んでいる児童でも、特定の種類の本に集中するなど、読書傾向にも偏りが見られる。これは、これまでにいろいろな本との出会いを通して読書の楽しさを知る読書体験が乏しかったためではないかと考えられる。

(4) 学習指導の展開の工夫

これまでの文学教材の読解指導は、文や言葉を丁寧に取り扱い教材文を精読し過ぎるあまり、児童から学習に対する興味や新鮮な感動を奪ってきたような気がする。文学教材の学習をすることによって本当に本を読む楽しさを学ばせたいと考え

る。

そこで、別々のものとして存在すると考えられていた読解指導と読書指導を、読解指導から読書指導に発展させる、読書指導から読解指導につなげる、というように一体のものにとらえ、二つの指導の融合を図るひとつの試みとして、次のような単元の指導段階を考えてみた。

① 単元の導入の段階

きつねの登場する作品は、児童にとって読んだ体験が多いものと思われる。単元の導入段階で、「きつね」の登場する読書体験を話し合い、「きつね」の登場する本探し、「きつねの本」の読み聞かせをすることによって、中心教材「手ぶくろを買いに」の学習への意欲を持たせるきっかけとしたい。

② 単元の展開の段階

中心教材の読解指導では、児童の興味・関心を大事にししながら、学習のめあてを決め、手がかりになる言葉やワークシートなどを活用して指導内容の精選を図る。そして、新美南吉の作品をもっと読んでみたい、きつねの登場する作品をもっと読もうという発展的な読書活動につながっていくような読解指導を行っていききたい。

③ 単元のまとめの段階

単元のまとめの段階で「きつね」の登場する作品を読んだ感想を発表する場を設ける。個人の読書体験が学級全体へと広がり、積極的な読書活動につながっていくことを願っている。また、新たな読書活動に発展していくことを願って、新美南吉をテーマにしたブックトークも行う。



導入での『きつねとかわうそ』の読み聞かせ

(5) 単元の指導の経過(12時間扱い)

Cは児童のつぶやきや発言

次	時	ねらいと評価の観点	主な学習活動	指導・支援の工夫	児童の反応
第一次	1 (本時)	○きつねの登場する本を 読もうという意欲を持 つ。 〈関心・意欲・態度〉 ・きつねの登場する本を 探し出そうとする。	1 きつねの登場する本を 読んだ体験を話す。 2 きつねの登場する本を 図書館から見つける。 3 教師の読み聞かせを聞 く。	1 2年生までに学習した教科書に もきつねが登場した話があつた ことを思い出すようにする。 2 きつねの登場する本探しをする。 きつねのことが書いてあればど んな本でもよい。【読み聞かせ】	・楽しんできつねの本 探しをした。読みたい 本に名前シールを はる。 ・喜んで読み聞かせを 聞いていた。
	2	○きつねの登場する本を 読む。 〈関心・意欲・態度〉 ・きつねの本を楽しんで 読もうとしている。	1 きつねの登場する本を 読む。 2 自分の読んだ「きつね」 の話について話す。	1 図書館を活用しいろいろなきつ ねの話を読む。 2 「手ぶくろを買いに」の学習に 意欲をもって取り組めるように 配慮する。【テーマ読書】	・「手ぶくろを買いに」 を約半数の児童が進 んで読んでいた。 ・お互いに交換しなが ら何冊も読んでいた。
第二次	3	○あらすじをとらえる。 〈関心・意欲・態度〉 ・自分の読んだきつねの 話と比べながらあらす じをとらえようとして いる。	1 「手ぶくろを買いに」 を読む。 2 「きつねとかわうそ」 と「手ぶくろを買いに」 の違う点をノートにま とめる。	1 「きつねとかわうそ」と「手ぶ くろを買いに」の話を比べる。 2 比べる観点を明示しまとめ易く する。 ①登場する動物 ②あらすじ ③どんなきつねか	C「手ぶくろを買いに」 のきつねは優しい。 ・いろいろなきつねの 登場に驚いている。
	4	○初発の感想を発表する。 〈表現〉 ・一番に残った場面に ついて感想を話そうと している。	1 一番に残った場面に ついて感想を話す。 2 学習のめあてを決める。	1 自分なりの感想が持てるように する。 2 感想の多かった場面を中心に学 習を進めていく。	・子ぎつねが帽子屋さ んにきつねの方の手 を差し出した場面の 感想が多かった。 Cときどきして読んだ。
	5	○雪の朝、手ぶくろを 買いに行くようになる までを読み取る。 〈理解〉 ・子ぎつねの気持ちや母 さんぎつねの優しさが 分かる。	1 子ぎつねが雪に驚き喜 ぶ気持ちと母ぎつねの 愛情を読み取る。 2 手ぶくろを買いに行く ことになったいきさつ を読み取る。	1 子ぎつねにとって「初めての雪」 だということが分かる言葉を集 めてみる。 2 なぜ手ぶくろを買いに行くこと になったのかを考える。	・「買ってやろうと思 いました」から、手 ぶくろを買いに行く ようになるまでの経 過を考える。 C子ぎつねは初めて雪 を見て驚いたんだ。
	6	○子ぎつねだけを買い に行かせる母さんぎつ ねの気持ちを読み取る。 〈理解〉〈表現〉 ・母さんぎつねの心の葛 藤をワークシートに整 理する。	1 手ぶくろを買ってやり たいが足が進まない母 さんぎつねの心の葛藤 を想像する。 2 子ぎつねの無邪気さ を読み取る。	1 ワークシートに母さんぎつねの 気持ちを整理する。 ・手ぶくろを買ってやりたい ・人間が怖い 2 ワークシートをもとに母さんぎ つねの気持ちについて話し合う。	・母さんぎつねの心の 葛藤を想像しながら 読んでいた。 C子ぎつねだけをなぜ 行かせたんだろう？ C本当に母さんぎつね は優しいのか？
	7	○一人で町へ行って手 ぶくろを買い子ぎつね の気持ちを読み取る。 〈理解〉 ・子ぎつねが手ぶくろを 買うまでに、思ったり 考えたりしたことを想 像する。	1 町の様子や町へ行く子 ぎつねの気持ちを読み 取る。 2 帽子屋さんの気持ちの 移り変わりとその時の 子ぎつねの気持ちを読 み取る。	1 子ぎつねになったつもりで、手 ぶくろを買いに思ったこと を想像するようにする。 ・途中の気持ち ・町への期待、不安 ・手ぶくろを早く買いたい 2 帽子屋さんと子ぎつねの気持ち を一緒に考えていくようにする。	・子ぎつねになったつ もりで読み取りをし ていた。 C町はどんな所だろう。 C帽子屋さんは手ぶく ろを売ってくれるか なあ。心配だ。
	8	○帰りの道の子ぎつねの 気持ちと母さんぎつね の気持ちを読み取る。 〈理解〉 ・子ぎつねを待つ母さん ぎつねの気持ちを想像 する。	1 子ぎつねが人間に対す る思いを深めていく過 程を読み取る。 2 無事に再会できた母さ んぎつねと子ぎつねの 気持ちを読み取る。	1 母さんぎつねになったつもりで 子ぎつねを待っている間に思っ たことを想像するようにする。 2 母さんぎつねの気持ちが分かる 言葉を見つけ、うれしい気持ち を考える手がかりにする。	C子ぎつねが帰って くるまで心配だった。 ・子ぎつねの無事を心 配する母ぎつねの気 持ちは考えようとし ていた。
	9	○きつねの親子の人間 観の違いを読み取る。 〈理解〉 ・母さんぎつねと子ぎ つねの人間観の違いを 考える。	1 母さんぎつねと子ぎ つねが人間観を形成し ていった過程を振り返 りそれぞれの人間観の 違いを読み取る。	1 人間に対する違いが分かる言葉 や文を手がかりにする。 2 母ぎつね、子ぎつねの2グル ープに分かれてそれぞれの人間 観について話し合い、違いを明確 にする。	Cもし母さんぎつねが 帽子屋さんのような 人になっていたら、 あんなに人間を怖い ものと思わなかった かもしれない。
第三次	10・ 11	○きつねの本を読んだ 発表会をする。 〈理解〉 〈関心・意欲・態度〉 ・自分の読んだきつね の本のおもしろさを伝 えるように発表する。	1 発表メモを簡単に書く。 2 発表メモをもとにグル ープ内で発表の練習を する。 3 発表メモをもとにき つねの本の紹介をする。	1 読んだきつねの本について話 すことができるように簡単な発表 メモを作るようにする。 2 「手ぶくろを買いに」について 発表してもいいこととする。 【発表会】	・いろいろな「きつね」 の話の紹介があつた。 ・同じ作品を読んでい る子も多いので共感 して聞いていた。 ・「手ぶくろを買いに」 の発表もあった。
	12	○新美南吉の作品を知る。 〈関心・意欲・態度〉 ・新美南吉の他の作品に も関心を持とうとする。	1 新美南吉をテーマにし たブックトークを聞く。 2 教師の読み聞かせを聞 く。	1 新美南吉についても触れなが ら作品の紹介するようにする。 【ブックトーク】 2 教師の周りに集まって読み聞 かせを聞くようにする。	・作品の多さに驚いて いた。 ・紹介した作品をすぐ に借りていった。

④ 結果と考察

「きつねの本を早く読みたい」という声があり教室にまとめて置いておいた。2/12時間目には、互いにおもしろかった本の情報交換をしながら何冊も読んでいる姿が見られた。休み時間なども時間を見つけてはきつねの本を読んでいる。中心教材「手ぶくろを買いに」も、教科書で扱う作品としてよりも、きつねの話のひとつとして楽しんで読んでいる様子が見られた。

多くのきつねの本を読んだ結果、「きつねにもずる賢いきつねやあわてもののきつねがいるよ」

「まぬけなきつねも出てきた」「手ぶくろを買いに」の話に出てくるきつねは優しいね」と読解指導に入る前から、児童は「手ぶくろを買いに」の学習に興味を示し進んで教材文を読んでいた。

また、自分の読んだ本に登場するきつねと、「手ぶくろを買いに」のきつねとを重ね合わせることによって、「手ぶくろを買いに」に登場する母ぎつねや子ぎつねの気持ちの読み取りがより深まったようである。以前に取り扱った文学教材に比べて、一層物語の世界に入り込み、母さんぎつねや子ぎつねに感情を移入して読んでいる児童が多かったように思われる。

(7) 読書生活の指導

① 読書環境づくり

児童にとって、読書を身近なものにするために読書環境づくりを行ってきた。

・読み聞かせ

給食の時間、朝や帰りの会などの時間を利用して読み聞かせを継続してきた。児童は本を読んでもらうのが大好きである。

・ブックトーク

テーマを設けて本の紹介を行ってきた。理科や社会、道徳など、教科学習と読書とを関連付けるようにした。

・本の紹介

児童同士でおもしろかった本の紹介をする。教師も、新しい本や児童がなかなか目を向けようと

しない分野の本の紹介を行った。

・読書記録の累積

自分の読んだ本について読書記録カードに簡単な記録を残す。読書記録カードが増えていくことも読書への励みになった。

(8) 指導を終えて

5月に比べて男女とも下表のように読書量が増えている。「毎日のように図書館に行く、いつも読みかけの本が机の中に入っている、おもしろかった本のことが話題になる」、このような児童の姿〈読書量の変容〉(冊) が日常の学校生活の中

	男子	女子	平均	不読児
5月	1.4	8.3	5.1	4人
11月	21.5	31.3	27.1	0人

で当たり前のように見られる。懇談会の場合でも、このごろよく本を読むようになったので喜んでいる、という保護者からの声も多く聞かれた。

——児童の日記から(A・Y男児)——

ぼくは3年生になった時とくらべて、読書をするようになりました。どういう本がすきかというとおもしろい本とかがすきです。先生はたくさん本を読んでもくれます。『島ひきおに』はぼくだけ特別前にすわって聞きました。けっこう泣けました。11月もっと読もうと思います。目標は20冊です。

児童の日記からのA・Y児は、5月に読書実態調査をした時の不読児の一人で、「本を読むのが面倒だ、読書よりもテレビゲームの方がおもしろい、おもしろかった本はない」と答えた児童である。

今回の実践では、国語科を中心に日常の指導や支援を通じて、本との触れ合い、本との出会いの場を設けるように努めてきた。短時間でも本を広げている児童の姿が多く見られるようになった現在、児童は本来「本好き」であると感じる。今後、計画的・継続的に読書指導を行っていきたい。

■ 授業実践3 仙台市立桂小学校 6年

(1) 単元名 心がひかれた人物を紹介しよう

(作文、話す・聞く)

(2) 単元の趣旨

本単元は、新たな読書意欲を喚起するために、作文教材「心がひかれた人物の紹介を書こう」と話す・聞く教材「計画を立てて話そう」とを関連的に扱ったものである。

「作文は苦手だが読書は好き」というのが本学級の児童に多くみられる傾向だが、読書紹介ができる教材を積極的に取り入れ、自分の考えを適切に表現する力を伸ばしたいと考えた。

さらに、書くための読書に留まらず、発表会を通して新たな読書意欲を喚起し、読書の深化・拡大にもつなげていきたい。そこで、「推薦図書ポスター作り」と「読書発表会」という目的を持たせることにした。

児童一人一人が課題意識を持ち主体的に学習を展開することによって、生きてはたらく読書の力へと高めていきたいと考え、日常の読書指導と並行して、本単元を計画的に実践した。

(3) 児童の実態(男子18名、女子19名、計37名)

5月に行った調査の結果、1か月に読んだ本の数は、男子が平均6.1冊(全国平均4.5冊)、女子が6.1冊(5.4冊)で、いずれも全国平均を上回っていた(1995年毎日新聞社・全国SLA学校読書調査)。家庭においても本が身近にあり、親がよく読書をしていることから、読書が生活の中に取り入れられていることが分かった。

しかし、読書の内容を見てみると慣れ親しんでいるシリーズや分野のものを繰り返し読んでいる傾向が見られた。また、活字の小さいものや長編ものは敬遠しがちで、同じ物語でも中学年程度の簡単な文章で表されたものを選んで読んでいた。テレビに関係した本や漫画的な軽い内容のものも好んで読んでおり、名作や文学作品といわれるものはあまり読まれていなかった。

以上のことから、本学級の児童は読書力が未熟

で、読書領域に広がりはないが、ある程度の読書習慣は身に付いており、計画的・継続的に指導をすれば読書生活の深化・拡大が図れると考えた。

(4) 学習指導の展開の工夫

① 単元構成の工夫

導入で伝記とビデオを同時に取り上げ、伝記に対する興味を引き出す。単元の最後に発表会をすることを目標に、情報収集のための読書をし、紹介文を書き、ポスター作りをする。

互いの文章を読み合ったり、資料として使った本を紹介し合ったりすることによって、考えを深め、新たに読書をするきっかけとしたい。

② 個々の読書体験を生かす工夫

取り上げる人物の選択は、児童の興味・関心の多様性に応じ、領域別のコースを設定し、読書意欲を高めるようにする。

コース設定に際しては、次の点に留意する。

- ・児童の思いや願いに即したコースを設定する。
- ・児童の発達段階や興味・関心を考慮して紹介する本を選択する。
- ・コース内でも幅広く本が選択できるようにする。

③ 中心点をはっきりとさせて書く工夫

紹介文の構想を練るためにイメージマップを書き、事実や情報と、自分の意見や感想を区別しながらイメージを広げる。

ポスターには、紹介したい人物のキャッチコピーなども書くこととし、作文の中心点をより明確にする補助的な手段としても活用する。

④ 評価の工夫

発表を聞いて、感想を言う、読みたいと思った本の紹介ポスターにシールをはるなど、相互評価の工夫をする。また、“読書の態度化”(読書習慣の定着、日常化)という観点から、評価の段階を三段階で行う。一段階は、単元終了直後に「読んでみたいと思う本を見つけることができたか」を、二段階は2週間後、三段階は1か月後に「選んだ本を読んだか」を評価する。加えて、関連図書の紹介や感想文の紹介などの支援を継続する。

(5) 単元の指導の経過

◎は読書指導に関するねらい

次 時	ねらいと評価の観点	主 な 学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 の 工 夫	児 童 の 反 応
第 一 次	1・見通す ○ビデオと伝記の紹介を通して学習に意欲と見通しを持つ。 《関心・意欲・態度》 ・興味を持った人物について深く知ろうとする意欲を持つ。	1 単元名について話し合う。 2 ビデオ『エジソン』を見る 3 学習計画を知る。 4 コースを選択する。 5 読んでみたい本のリストを作る。	1 ビデオを見る前後に人物について話し合うようにする。 2 情報収集の方法の話し合いをもつ。 3 学習計画を掲示する。 4 ブックトークをしながら、ブックリストを掲示していく。 【ブックリスト】【ブックトーク】 【読んでみたい本のリスト】	・知っているつもりでも、生い立ちや業績などは知らないことに驚いた。 ・本から情報を得ることに気付いた。 ・熱心にブックリストや本を見てコースを選択していた。
第 二 次	個人・読む ◎それぞれのコースに合った本を読む。 《関心・意欲・態度》 ・選択した本を読み通す。	1 ブックリストを参考にしながら、本を選択して読む。 2 できるだけ多くの情報を収集する。(事典なども活用する。)	1 読む期間として10日程度とる。 2 ブックリストに名札をはり、友達が読んでいる本が分かるようにする。 【テーマ読書】 【ブックリストの活用】	・常に本を持っていて、時間を見つけて読んでいた。 ・市民図書館も活用していた。 ・なかなか読まない児童もいて、声がけをした。
	2・知る ○教材文を読み文章の組み立てを理解する。 《理解》 ・事実と感想や意見の関係を考えながら文章を読み、構成の仕方を理解する。	1 教材文「福沢諭吉」を読み文章の組み立てを調べる。 2 表現の工夫の仕方を知る。 3 文字・語句を理解する。	1 書き込みをさせながら、文章構成が理解できるようにする。構成図を示す。 2 作文や発表会では、自分の考えを明らかにすることが大事であることを押さえる。	・事実の段落と、意見や感想の段落が区別できた。 ・自分が作文を書く時に構成図を参考にしたいという声があった。
	3・構想を練る ○中心点を明らかにし効果的な文章表現を工夫する。 《理解》 ・事実を基に、自分なりの人物像を持つ。	1 自分なりにとらえた人物像をサブタイトルに表す。 2 集めた情報をイメージマップに書き込む。 3 自分の意見や感想を書く。 4 効果的な構成を考え段落番号を書き込む。	1 イメージ(構想や考え)をマップ(地図)に作ることを説明する。 2 人物像がとらえられない場合は、周辺部分から書くことを認める。 3 事実、私見、疑問、情報を色分けし足りない部分を書き込むようにする。 4 友達との情報交換を促す。	・作文を書くような抵抗はなく、表現力がやや劣る児童でも書くことができた。 ・事実を羅列していた児童も色分けやポスター作りを通して、自分なりの人物像を持つことができた。
	個人・深める ◎新たな問題解決のために読み深める。 《関心・意欲・態度》 ・同じ本を読み返したり、他の本を読んだりする。	1 必要な資料を探して読む。 2 イメージマップに書き加えイメージを膨らませる。	1 最初にイメージマップを書いてから作文を書くまでの間に読み深める期間を設ける。 2 朝自習の時間などを利用する。 【テーマ読書】	・毎日少しずつリストに書き加えていた。 ・目的を持って読書をする姿が見られた。 ・友達同士で本を交換して読んでいた。
	4・5・書く ○イメージマップに従い作文を書く。 《表現》 ・事実を明らかにしながら、自分の感想や意見が書ける。 《言語》 ・漢字や仮名遣い、指示語や接続詞の使い方に気を付ける。	1 イメージマップを基に構成を考えながら紹介文を書く。 2 国語辞典を使い、語句や漢字に気を付けて書く。 3 推敲をする。	1 情報を整理し、必要な箇所を選んで書くようにする。 2 書きながら考えや構成を変えてもよいことを告げる。 3 参考になるように構成図を掲示する。	・「簡単だ」「速く書けた」という声が多かった。 ・本を読み直したり、図を見たりしながら書いていた。 ・構成を変えたり、考えを付け足したりする児童もいた。 ・国語辞典の利用は習慣化してきており、自然に使っていた。
	図工・描く ○自分が選んだ人物に自分なりの思いを持ってポスターに描く。 《表現》 ・効果的な表現ができる。	1 伝えたい人物像が表れるようなキャッチコピーを考える。 2 発表会で使うことを考慮しながら描く。	1 サブタイトルに使った言葉や、好きな一文の抜き書きなどで、自分がとらえた人物像を表現する。 2 発表会の持ち方を知らせ友達のを引き付けるような表現の工夫を促す。 【推薦図書のポスター】	・中心となる自分なりにとらえた人物像が明確になった。 ・引用する文を探すために本を読み返していた。 ・人物のとらえ方について友達と意見交換していた。

次	時	ねらいと評価の観点	主 な 学 習 活 動	指 導 ・ 支 援 の 工 夫	児 童 の 反 応
第三 次	6・7・広げる(本時7時)	◎紹介文を読み合わせ 意見や感想を持つ。 《理解》 ・友達の作品から効果的な表現方法について理解を深める。	1 コース内で発表会をする。 2 友達の作品のよさに気づき話し合う。 3 代表の作品を選び、発表会の持ち方を相談する。	1 発表会の進め方を示す。 ①黙読し合う。 ②司会を決めて感想を発表し合う。 ③代表の作品を決める。 ④全体発表会の発表方法を話し合う。 2 発表の方法例を助言する。	・友達の作品を真剣に読み、気づいたことを書き込んでいた。 ・友達の作品のよいところをはめていた。 ・④の段階に時間を要した。
		◎発表を聞いたり、ポスターを見たりして読んでみたい本を見つける。 《関心・意欲・態度》 ・読書への意欲を高める。	1 代表の作品を中心とする発表会をする。 2 質問や意見、感想を言う。 3 友達のポスターで心がひかれたものにシールを貼る。 4 読んでみたい本のリストを作る。	1 グループ内で司会や発表などの役割分担する。 2 友達の発表を聞いて、共感できる所や、質問したい所を見つけながら聞くようにする。 3 人物像のとらえ方については、個々の考えを尊重する。 4 児童の質問で解決できないものがあったとしても、詳しい助言は避け、本を読むように促す。 5 読みたい本が見つけれない児童には、読書の好みや読みの力に合った本を紹介する。 【推薦図書のパスター】【読書発表会】 【読んでみたい本のリスト】	・代表の作品を中心に作文を朗読する者、人物像を一言だけ言う者というように、発表内容に軽重をつけて全員が発表した。 ・一言の発表に対して質問が集中し、「本を読まないといけない」という意見を出した児童がいた。 ・全員が複数の本を選びシールをはったり、リストアップしたりする活動を喜々としてやっていた。 ・シールをはる活動では、友達に認められたことを喜んでいた。
単元終了後	個人・読み広げる	◎リストアップした本や関連図書を読む。 《関心・意欲・態度》 ・発表会で得た情報を基に読書する。	1 紹介された伝記を読む。 2 同一のテーマ、同一作者の作品など関連図書を読む。	1 7時間目の活動では貼ったシールの上に、実際に読んだシールを貼る。 2 リストアップした本すべてを読まなくてもよいから1冊でも読むように助言する。 3 関連図書の紹介をする。 4 学級通信で、読書活動の様子を紹介する。 【自由読書】 【関連図書の紹介】	・伝記を複数読むことは困難な様子であった。 ・関連図書を紹介すると喜んで読んでいた。 ・発表会では取り上げなかった人物の伝記を読む児童もいた。 ・2週間後の調査では、37人中、35人が発表会に関する本を読んでいた。

《歴史コース》『諸葛孔明』(S・J男児)

諸葛孔明は、中国の三国時代(日本では女王卑弥呼が治めていたころ)に、蜀の国の丞相だった人です。諸葛孔明に、ぼくは、皇帝の遺言を守り、蜀の国を一生けん命強い国にしようとしたところにひかれました。

諸葛孔明について強く思ったことは、約束を守る人ということですね。

劉備皇帝が死ぬ時、諸葛孔明は泣きました。「私は、あくまで臣下として忠節を尽くします。命をかけて漢王室を守って参ります。」と、忠節を誓ったそうです。

また、魏を征伐するための「北伐」「天下統一」も皇帝の遺言で、成功はできなかったものの、死ぬまで約束を守りました。ぼくは、(えらいなあ。約束を守るって、大変なのに)と思いました。

諸葛孔明

約束を守る人



6年1組 知ってるつもり発表会

(6) 指導の実際

① 個々の読書体験を生かしたコース選定

ビデオで『エジソン』を見た後、「知らないことがたくさんあった」「情報を集めるには本を読まなければ」という感想が発表された。

以下の10のコースについて、簡単なブックトークをしながら説明をした。児童は、迷いながらも楽しそうにブックリストや本を見て、自分のコースを選定した。

《文 学》『シャーロックホームズ』
 《歴 史》『福沢諭吉』『諸葛孔明』他
 《夢と冒険》『ライト兄弟』
 《芸 術》『ショパン』
 《人物探求》『ディズニー』『ヘレンケラー』他
 《スポーツ》『長島茂雄』
 《作 家》『宮沢賢治』
 《戦争と平和》『マザー・テレサ』
 『ガンジー』『アンネ・フランク』
 《発明・発見》『パスツール物語』『エジソン』
 《自然探索》『ムツゴロウの青春記』

教師が紹介した本以外からも自由に本を選ばせブックリストに加えていった。児童は、教室に常時置いてある本はもちろん、公共図書館へも通って本を選んでいった。読み調べる過程で、コースを変更する児童もいた。

また、コース決定後は、ブックリストの横に児童の名前を書いた名札を添えて掲示し、情報交換ができるようにした。作文の構想を練る段階では補助資料としての事典類も活用した。

読んでみたい本リスト

記入日 7月18日 5年A・Y女児

No.	分類	書 名	著 者	ある場所	実際に読んだ日
1		ゆうれい塾は人バニフ	杉山 隆一	学級図書室	7月10日
2		ガラスのエレベーター 宇宙へとびだす	ロアルド・ダール	学級	7月10日
3		ナポレオン戦争のひみつ	ロアルド・ダール	..	7月10日
4	913	わらいねこ	今江 祥智	図書室	7月10日
5		ファープル(人物紹介)	小林 清之介	学級	7月10日
6		ルドロフにもバグダッド	斎藤 洋	学級	7月10日
7		シャーロックホームズ	コナン・ドイル		
8		アンネ・フランク	?	図書室	7月10日

② 発表の仕方の工夫

児童は、作文の朗読だけでなく様々な手法を組み合わせてることによって、聞き手の心を引き付けるように工夫していた。

- ・劇化と朗読…テレビレポーターが、その人物の研究家に取材をするという劇中に朗読を入れた。
- ・人生の選択クイズと朗読…生き方についてクイズを出し、聞き手が答えていた。
- ・本の紹介と朗読…コースのメンバー全員が一言ずつ本の紹介をし、代表者が作文を読んだ。
- ・一言人物紹介と朗読…メンバー全員が一言ずつ自分なりの人物像を発表し、代表者が朗読した。

③ 相互評価の工夫

発表後に、質問や感想を言う時間を設け、発表者と聞き手の交流を図った。教師の助言は極力少なくし、疑問点は後で本で調べさせるようにした。最後に、友達が紹介した本の中から読んでみたい本を探しリストに書き込み、ポスターの個票に名前シールをはる活動を取り入れた。

ポスターの個票

(個票)	紹介者名	場所	書名
			著者
	奈穂	図書室	ディズニー 三浦清史

シール (緑) (のぞみ)

④ 自由読書への発展

発表を聞いて興味を持った本を「読んでみたい本のリスト」にメモするようにした。

リストアップした本は読むのも自由、いつ読むのかも自由である。教師の押し付けではなく、読み手である児童に「次はこの本を読みたい」と意識させるねらいがある。

⑤ 結果と考察

ポスターや劇など様々な手法を組み合わせたことによって、楽しい発表会ができた。

教師が発表のつたなさを補ったり、疑問に対して答えたりしないことも「自分で読んで調べよう」という意識を引き出す結果となった。

シールをはる、感想を言い合うなどの交流では友達に認められた喜びを味わっていたようだった。

さらに、「読んでみたい本のリスト」への記入は、自由読書という次のステップにつながるよい方法であったようだ。発表会終了後、全員が平均5～6冊の本を読んでみたい本として選んでおり、2週間後の調査では37名中35名が、実際に読んでいたことが分かった。「読んでみたい」という興味を「読んでみた」という態度化につなげるには事後の支援も不可欠であり、日常の指導との連携が大切であることを強く感じた。

(7) 読書生活の指導

教師と友達からの刺激による読書意欲の増進と継続、読書領域の拡大と深化を図るために、日常的に次のような実践を行った。

- ・魅力ある図書を身近に置くこと…教師が実際に読んだ本の紹介、学級文庫の活用
- ・学級通信「かわらばん」の活用…感想文や読書記録、読書に関する調査結果の掲載など
- ・自分の読書傾向を意識させる…読書量や内容のグラフ化、「読んでみたい本のリスト」の累積
- ・図書室を活用した授業展開…理科や社会での調べ学習、道徳の時間の読み聞かせ
- ・読みの時間の保障…調べ読みのための期間の保障、朝自習の時間の利用など

(8) 指導を終えて

① 読書量と読書傾向の変容

《読書量の比較》

	男子	女子	平均	不読児
5月	6.1 (3.4)	6.1 (1.4)	6.1 (2.4)	2名
11月	8.8 (1.0)	14.2 (0.4)	11.6 (0.7)	0名

注) () は学習漫画の冊数

読書量の増加以上に、本の内容に注目すべき変化が見られた。学習漫画や軽い内容のものが減り伝記や長編物、文学作品なども読むようになった。

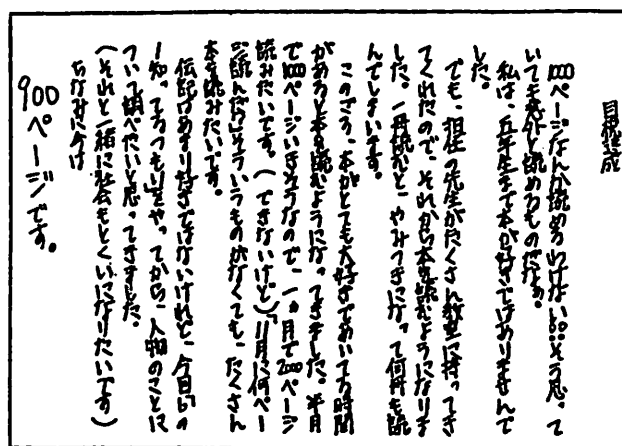
例えば、K・T男児は、『ズッコケシリーズ』と学習漫画ばかりを読んでいたのが、11月の調査では、『宮沢賢治』『ガンジー』などの伝記や、『名探偵ホームズ』などを読んでいた。

5月に「読書はきらい」と答えたK・M女児は「なぜ、もっと前から本を読まなかったのかと後悔している」「友達に推薦できる本を見つけたい」「読むのが速くなってきたから、たくさん読みたい」というように、意識が変化した。

また、以前は途中で読むのをやめてしまうことが多かったS・N女児は、自分の好きな領域を見つけ、長編物を通読できるようになった。

自分で読書記録をつけたり、日記などに感想を書いたりする児童も多くなった。

児童の日記より (K・A女児)



② 読書環境の改善と児童の変容

読書を自然に行える雰囲気がい、本を常に手元に置いている児童が増え、給食の待ち時間など少しの時間を見つけて読書をするようになった。また、本のことが話題になり、本を交換して読む姿も見られるようになった。

学級通信は、児童の刺激になるだけでなく、家庭への啓発にもなり親から子への働きかけや会話のきっかけにもなったようだ。学校と家庭の連携によって読書生活をより豊かにしていきたい。

2 事例研究

〈読書実態〉

〈着目した理由〉

〈指導の方針〉

読めない児童

2年男児

本を読むことが少なく、図書室で本をほとんど借りたことがない。文章を読む力の不足が一番の原因と考えられるが、読めないで読まない、読まないで読む力が育たないという悪循環を繰り返している。これを断ち切り、生活の中で楽しんで本を読んでいけるようにしたいと考えた。

文章を読む力、読書体験の不足を考慮し、まずは絵本の紹介と読み聞かせを中心に、日常的に本に接する機会を設ける。

その中で読むことの楽しさを実感させることによって、自分で本を選び自分で本を読んでいこうとする気持ちを育てたい。

読書傾向に偏りがある児童

3年女児

読書傾向に偏りがあり、怖い話を好んで読んでいる。なぜ、怖い話を選んで読みたがるのかを着目児童の実感のレベルでとらえ、その子の心の状況に即しながら読書領域を広げさせたい。そして、読書の楽しさを味わわせたいと考えた。

「おすすめ」の本と一緒に読むことから始め、読書内容を共感的に理解していく。その上で着目児の興味・関心を生かした本の紹介をしたい。

また、児童間の交流ができるような活動を行い、楽しく読書領域を広げていけるようにしたい。

読む力があるのに読まない児童

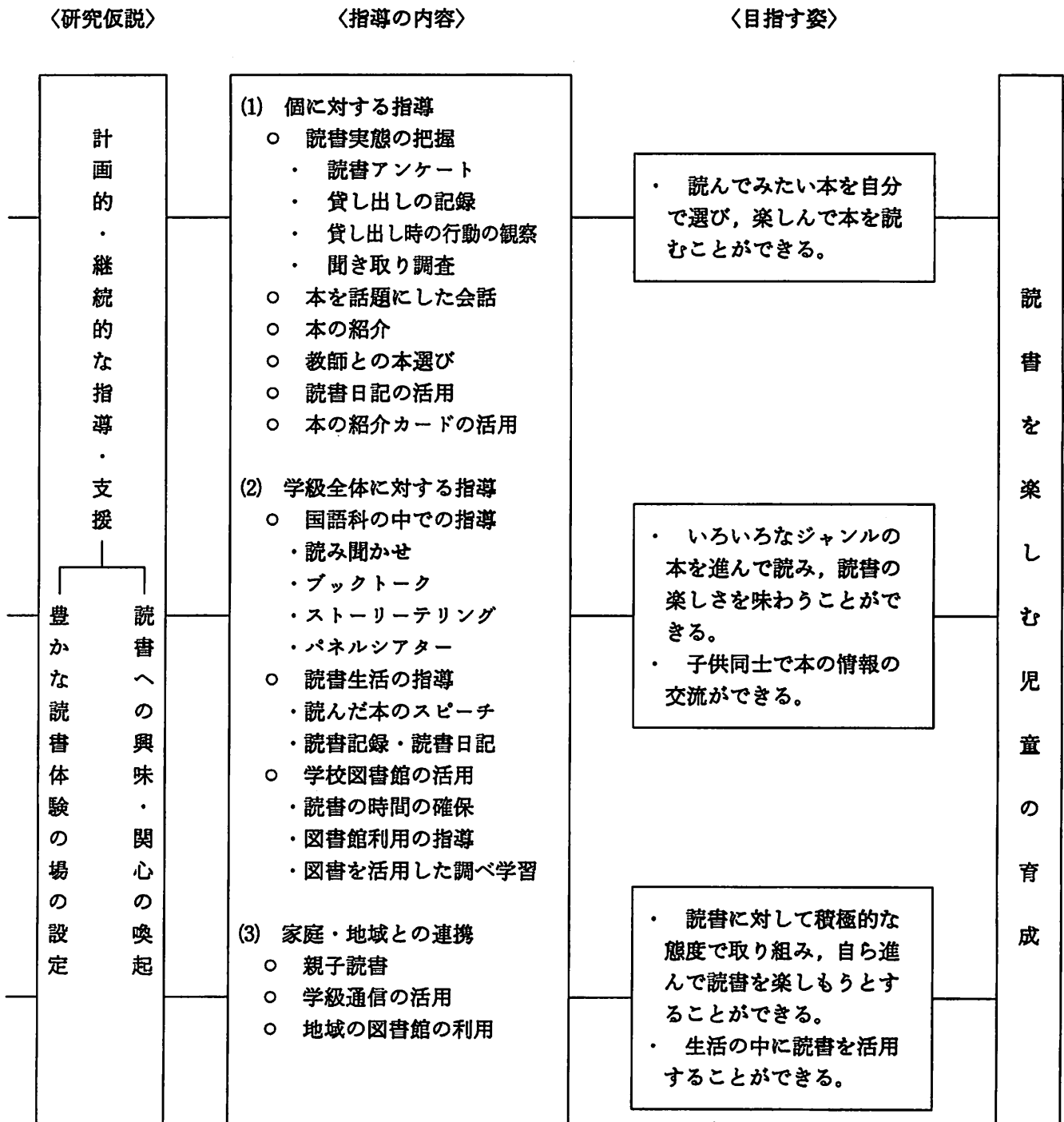
5年男児

国語で、内容を読み取る力や心情を想像する力を持っているが、読書に対しては消極的な面が見られる。

どのような働きかけを行えば、進んで本を手にするようになり、読書の楽しさを感じ取れるようになるのかを考えていきたい。

読書に対して興味・関心を持たない児童の実態を生活全体から把握し、読書の楽しさを味わわせたい。まず、学級全体や着目児童に対して、本の紹介や読み聞かせをしながら本に親しみを持たせていきたい。

事例研究



の 構 想 図

事例研究1 仙台市立長町南小学校 2年

読めない児童への指導

—読み聞かせを中心にした
読書体験の積み重ねを通して—

(1) 着目児童の実態

《着目児童 Y・K男児》

本を読むことが少なく、1年生のときから図書室でほとんど本を借りたことがない。図書室で本を読む時間を設けても書架の前でぶらぶらしていたり、図鑑や迷路などの本を取り出してちょっと見てはすぐに戻したり、ということを繰り返して1時間を過ごしている。

その原因としては、読む力と読書体験の不足による、読むことへの抵抗感や本への関心の乏しさが考えられる。

これに対して、話すことには積極的で、放課後や休みの日に友達と虫を捕まえたこと、燕の巣を見つけたことなど、実際に自分で見たり触れたりした生き物のことなどについて友達や教師に話しかけてくる姿が見られる。

(2) 指導に当たって

着目児童の読む力と読書体験の不足を考慮し、読み聞かせを中心に、日常的に本に接する機会を設ける中で、読むことの楽しさを実感させたい。

次の二つの視点から指導を具体化する。

※()内は活動場面

① 読むことへの抵抗感を取り除く

〈読書活動への支援〉

・児童と一緒に本を探す。

(図書室利用の時間、放課後)

・家族に読み聞かせをしてもらう。(家庭)

② 本への興味・関心を高める

〈本との出会いの場の工夫〉

・児童の生活経験につながる本を取り上げる。

(日常の会話、図書室利用の時間)

・継続して読み聞かせを行う。

(朝の会、図書室利用の時間)

(3) 着目児童への働きかけと反応・変容

月	働 き か け	着目児童の反応と変容
六月	・燕の巣を見つけたことを教えてくれたので、一緒に燕の図鑑を探して読んだ。	・図鑑の中に自分が見つけたのと同じ巣を見つけ、写真を示しながらいろいろ説明してくれた。
七月	・夏休みの貸し出し図書を借りて、子供たちを誘い図書室に行った。 ・夏休みに読んだ本についてはがきで知らせるという課題を出した。	・自分でも選べず、教師が薦めた本でも借りなかったのに、友達が「ねずみくんシリーズおもしろいよ」と言ったのに興味を示し2冊ともその中から選んだ。 ・7/28はがきが届いた。図書室で借りた「コップをわったねずみくん」について、あらすじ、好きな所、ねずみくんの絵がかかれていた。
八月	・「ウスバカゲロウの幼虫ってアリジゴクだよ」と言うので、確かめようと『カゲロウのけっこんしき』を見つけて一緒に読んだ。	・友達が見に来たので「一緒に見よう」と声をかけていた。ページをめくるときに、自分が見たものや知っていることを得意そうに友達や教師に話していた。その中で「僕が見たのには、こんなしっぽなかったよ」と疑問を投げかけることもあった。
九月	・読み聞かせをした本を見つけたという友達の声を聞いて、「これも前読んだよ」と『てがみをください』を抜き出して来たので、「これ借りてみる」と聞いてみた。 ・『てがみをください』を借りて帰るとき「お母さんに読んでもらいたいよ」と声をかけた。 ・教師が紹介しなくても『いそがしいよ』という本を自分で選んだので、「おもしろそうだね、どんなお話だったか、読んだら聞かせてね」と声をかけた。 ・『キャベツくん』を読んでいると、何人かの子供たちと一緒にのそきに来たので、その場で読み聞かせをした。	○それまで、いろいろ紹介してみても「どうしようかな、今日はやめようかな」と言っていたのが、すぐに「うん」という返事が返ってきた。 ・翌日「かえるの本どうだった」と聞くと、「お母さん帰って来るのが遅かったから、読んでもらえなかったけど、今朝、おじいちゃん読んでくれたんだよ」とうれしそうに話していた。 ○本を返すとき本をめくりながら絵に合わせてあらすじを話してくれた。その日も自分で『なになにかな』という本を選んで、「土曜日に持って来るね」とうれしそうに借りて行った。 ○喜んで聞いていた。読み終わりに「読んでほしい本ある？」と聞くと『なになにかな』と同じ作者の本を取り出し、「これがい」とよこした。一緒に聞く友達が増えてうれしそうであった。

月	働 き か け	着目児童の反応と変容
十月	・『くいしんぼうねずみ チョロとガリ』を返却したのを受け取って、ページをめくってみた。 ・朝の読み聞かせの時間に『くいしんぼうねずみ チョロとガリ』を読んだ。	○「先生、これ、家を作る話だよ」「最初ね、こう作って…」といろいろ話してくれた。最後に「こややって食べている」と表紙を見せながら言って、「全部食べちゃって無くなっちゃうんだよ」と、得意そうに表紙紙をひっくり返して見せてくれた。 ●その後、友達にも紹介していたが借りてもらえなくてがっかりした様子であった。 ○教師の脇の方に立ち、みんなの反応を気にかける様子で聞いていた。みんながおもしろがっていたのを見てうれしそうであった。
十一月	・図書室に入るとすぐに「『キャベツくん』ないかな」と探し始めたので、一緒に探した。この後、子供の一人が「先生、本読んで」と言うので、読んでほしい本を探しに行かせた。 ・「図書室に行こう」と帰りに待っていたので一緒に図書室に行った。 ・何人かの友達と一緒に「先生、読んで」と椅子を運んで来た。今日は教師が最初の1ページを読み、その後を子供たちが順番に読んでいくようにした。 ・「先生、今日ちょっと用事があるから、一人で借りに行ってみて」と声をかけてみた。	○友達と本を探しに行き、着目児童はさっき借りた『キャベツくん』友達に『どろんこハリー』を持って来て、読んでもらう順番を決めていた。読んでいる途中で友達が増えたのを見てうれしそうであった。読み終わると「先生、次これ」と、今度は着目児童が「ハリー」シリーズの別の本を持って来たが時間が来て終わりになった。友達が「先生、来週も読んでね」と言ったのを聞いて「うん」とうなずいていた。 ・「今日は何を借りようかな」と見ていたが、前日、図書室で読んでもらえなかった『あだなはかっぱかっぱ』を見つけると「これ借りる」とすぐに決めた。 ○翌日『あだなはかっぱかっぱ』を持って来て、「先生この本途中で読んだんだよ」とうれしそうに話してくれた。読書カード1枚目が終わった。 ・着目児童も自分の順番が来た時には、小さな声でどりたどりではあるが、読むことができた。読み終わった時、「自分で読むのもおもしろいね」と話していた。用意して読んでいなかった『はっぱとミー』を借りて行った。 ・次の日「今日も全部一人で読んできたよ」と話してくれた。 ●翌日聞いてみると、前に借りて母親に読んでもらったことのあるシリーズの本『もぐらとずぼん』を借りたと言う。しかし、全体の文字の分量が多いためか結局、読み通すことができずに次の本を借りた。

(4) 結果と考察

① 読むことへの抵抗感を取り除く

教師と一緒に本を探すことは楽しかったようで、放課後「図書室に行こう」と児童から声をかけてくる姿が見られるようになった。しかし、教師が紹介した本をそのまま借りることは少なかった。教師が選んだ本を押し付けるのではなく、児童が読んでみたいと思える本が見つかるまで、見守りながら一緒に探すことの大切さを知った。

家族に読み聞かせをしてもらうことによって、本を読むことを児童の生活に位置付けることができた。また、自分が紹介できる本を持てたことがうれしらしく、読後、教師にその本にどんなことが書いているか話してくれたり、図書室で友達に紹介したりする姿も見られるようになった。

二学期後半になると、自分で見つけた本を一人で読むことにも挑戦し、そのことを得意そうに話してくれたが、読み通すことができないこともあった。急ぐことなく「読みの一人立ち」を目指していくことが大切であると考えた。

② 本への興味・関心を高める

燕の図鑑やウスバカゲロウの絵本など、児童の生活経験につながる本を取り上げると、そこに出て来ることにかかわらせて、自分が体験したことや知っていることを得意そうに話してくれた。

毎朝、継続して読み聞かせを行うことで、話に聞き浸ることができるようになってきた。読み聞かせをした本を借りて読む姿も見られ、読んでみたい本を増やすことにも役立った。

これとは別に子供たちからの要望で、図書室で読み聞かせを始めた。本を読んでもらいたい子供が教師の周りに椅子を運び、それぞれが選んだ本を読んでもらうというものである。この中で着目児童は友達に自分が見つけた本を紹介できるのがうれしらしく、意欲的に本を選んでいった。また友達が紹介した本やそのシリーズを選んで借りる姿も見られた。友達との交流によって読書活動は更に活発になっていくものと考えた。

■ 事例研究2 仙台市立田子小学校 3年

——読書傾向に偏りがある児童への指導——
——読書内容への共感的な理解を通して——

(1) 着目児童の実態

《着目児童 H・O 女児》

貸し出しの記録によると、2年生の時に図書室から借りた25冊の本のうち、18冊が怖い話であった。その傾向は3年生になっても続き、『放課後のトイレはおばけでいっぱい』といった本は好んで借りるが、他の物語や違うジャンルの本を選ぶことはほとんどない。

また、アンケート調査では「読書は好きでも嫌いでもない」とし、その理由として「字を読むのが面倒だから」と答えている。怖い話の本を借りる時も漢字に振り仮名がついたものを選んでいく。

国語の学習では、読み取ったことを言葉や文章で表現するのはあまり得意ではないが、音読は上手で、「カラオケで歌う時のように、出てくる人の気持ちを考えながら読むと、うまく読めるんだよ」と教えてくれるなど、内面には豊かなものを持っている児童である。

(2) 指導に当たって

文字への抵抗がありながらも、怖い話なら好んで読むという実態を良い方向に受け止め、H・O 児の読書への興味・関心を生かしながら「読み広げ」ができるよう、支援をしていきたい。

① 読書内容の共感的理解

- ・貸し出し時に本と一緒に選ぶ
- ・着目児童の「おすすめ」の本と一緒に読む
- ・本の感想や読書についての話題を交わす
- ・実態や興味・関心を生かした本の紹介をする

② 児童間の交流を通した読書領域の拡大

- ・カードを用いて本を紹介し合う
- ・好きな本を交換して読む
- ・1冊の本についての話し合い活動を行う
- ・授業との関連（昔話を伝え合う会等）を図る

(3) 着目児童への働きかけと反応・変容

月	働 き か け	着目児童の反応と変容
六月	・読書調査。 読書についての意識やどのような本を好んで読んでいるか等を知る。 ・図書の時間に一緒に本を選ぶ。 ・読み聞かせを何度か行う。 『窓ぎわのトットちゃん』『じごくのそうべえ』『八郎』 など	●読書は「好きでも嫌いでもない」理由「字を読むのが面倒だし、漢字に振り仮名がないと読めないんだもん。でも、お化けの話はおもしろいから好きだよ」 ●他の物語を薦めてみたが「お化けの本の方がおもしろいからいいよ」と自分で選んだ本を借りた。 ・教卓に置いてある本を「読みたい読んでくれるの?」と聞き、ページをめくっていた。 『そうべえ』の続編を早く読んでほしいとせがみ、「わたしもみんなの前で読んでみたいな」と話した。
七月	・『妖怪図鑑』を購入した時に、「学校に持って来て、みんなに紹介してくれないかな。きっと喜ぶよ」と声かけをした。 ・夏休み中の貸し出し。一緒に本を探す。 怖い話はほとんど貸し出し中で『茂吉のねこ』を「この本怖いから読んでみない」と薦めてみる。	・「明日持って来るから」と言っ、次の日、みんなの前でページをめくりながら紹介した。子供たちから「見せて見せて」とせがまれてうれしかったのか「家にいっぱい本があるから今度持って来るね」と話した。 ・おもしろそうな題名の本を手にとって、ページをめくってみるが、なかなか決まらない。薦めた本を「本当に怖い?じゃあ、借りてみる」と言っ借りた。今まで借りていた本とは少し性格が違うので、とまどった様子である。
九月	・『ふしぎなかぎばあさん』の読み聞かせ（団地住まいでかぎっ子という主人公の設定や、ユーモラスでちょっと不思議が残る内容はH・O児にぴったりではないか） ・『魔女のたまご』を薦める。 （怖い話をテレビで見るのが大好きで、本当は友達がいなくて寂しがり屋。そんなアガサに親近感をもつのではないか。）	○途中で読んで本を教卓に置いていたところ自分の席に持って行き、あっという間に読み、「もう全部読んじゃったよ。かぎばあさんと広一と一緒に変な歌を歌うところがおもしろかったよ」と教えに来る。 その後、かぎばあさんのシリーズを6冊読む。 ・一気に読み「アガサとマジョドリのどちらが好き?」と聞くと「ううん、マジョドリかな。二人で人間をおどかすところが好きだよ」と答える。 紹介した本をめくってH・O児の周りに子供たちが集まり、内容について話し合う姿が見られるようになった。

月	働 き か け	着目児童の反応と変容
九月	・怖い話が好きになったのはいつからか聞いてみる。 ・読書の時間、各自のお薦めの本を紹介するカードを書く指導。友達の薦める本を読んだら、カードに名前を書いたシールを貼り、意欲付けとした。気軽に本を紹介し合う雰囲気が出てきた。 ・朝自習でお薦めの本を交換して読むよう勧める。読書賞受賞。	・「4才位の時、家族で行ったお化け屋敷がとっても怖くて楽しかったんだよ。怖い話のビデオもいっぱいあるんだ。」と生き生きとした表情で語った。 ○『ゆめからゆめんぼ』を紹介する。 ふだんなら書くことへの抵抗が大きい、この時は、短時間で書き上げた。隣の席の男児と『はれときどきぶた』シリーズを読んだり、掲示しているカードを見て、今度借りる本を探したりしていた。 ・20冊読み、初めて読書賞をもらう。 喜んで賞状を持ち帰った。
十月	・国語「相手の話を受けて」で、友達と同じ本を読み、楽しく会話ができるよう支援した。	○隣の男児と『はれときどきぶた』について楽しそうに話し合う。 「J君はどこが良かった？この本のシリーズがたくさんあるから、読んでみようね」と、ページをめくりながら話していた。
十一月	・国語「石ごえ三年」の発展として他の昔話を自分で選んだ方法で伝えるよう指導・支援をした。 ・読書についてのアンケート	・得意の音読を生かし『三年ねたろう』の読み聞かせを選ぶ。テープに録音して練習し、堂々と読み聞かせた。 ○読書が「前より好きになった」理由「いろいろ本を読んでみたら、おもしろかったから。（前はお化けの本くらいしか読んでいなかったから）」 ・自分で購入した戦争に関する本を学校に持って来て紹介した。
十二月	・家庭学習として読書について聞く。 昔話の学習後、昔話を作ったというので、是非見せて欲しいと声がけする。「三つの昔話を合わせて作るなんてすごいね。家の人にも聞かせたの？」とほめる。	○家庭学習のノートに、最近うれしかったことの一つとして「先生が『かぎばあさん』をかしてくれたこと」と書き、好きな本ベスト5で『魔女学校の1年生』『かぎばあさん』などをあげていた。 昔話を作った時、父親に「おもしろいからもう少し続きを作ってみたら」と言われたのが満足につながったようである。自分から情報を発信する子供になりつつあるので、励ましている。

(4) 結果と考察

① 読書内容の共感的理解

ジャンルを広げさせようと一方的に本を薦めたことは効果がなかった。なぜ怖い話を…と思っていたが、その本のどこにひかれているのか、同じ目の高さで共感的にとらえていなかったのである。

「おすすめ」の本と一緒に読み、おもしろかった箇所について語り合ったり、本の情報を交換したりするうちに、家族で行ったお化け屋敷の楽しい思い出が、怖い話を読む一つのきっかけになったことも分かってきた。その時のときどきするような楽しさを本に求めているのではと考え、延長として楽しく読めるような『ふしぎなかぎばあさん』『魔女のたまご』を紹介した。するとあっという間に読み終え、感想を話しに來たり、シリーズを図書室で探して読んだりするようになった。

読書を読んだ冊数やジャンルだけで判断するのではなく、どんな本をどのように読んでいるのか、その子の実感のレベルでとらえ、一緒に読書を楽しむながら支援していくことの大切さを痛感した。

② 児童間の交流を通じた読書領域の拡大

自分の紹介した本を友達が読んでくれたり、同じ本について語り合ったり、得意の音読を生かした読書活動をしたり、という中で自分の思いを友達が受け止め、認めてくれるということが意欲につながったと考える。男の子に薦められた恐竜の本や理科の本を借りて読む姿も見られるようになった。

③ 今後の課題

二学期後半のアンケートでは「いろいろな本を読んでもみたらおもしろかったから、前より読書が好きになった」と答えた。家庭学習で「好きな本ベスト5」を書いて來たり、自分でお話を作るなど、情報の発信者としても意欲がふくらみつつある。今後は紹介する本のジャンルを広げ、より幅広い読書をしたり、「こんな本を読みたい」という自分なりのブックリストを持って主体的に読んだりできるよう、指導・支援をしていきたい。

■ 事例研究3 仙台市立古城小学校 5年

読む力があるのに読まない児童への指導
—本との出会いの場の工夫を通して—

(1) 着目児童の実態

《着目児童 R・M男児》

国語に対する取り組みは意欲的で、読解力もあり登場人物の心情や様子をまとめたり読み取ったりすることができる。しかし、読書に対しては、ほとんど興味を示さない。読書の時間には漫画を選ぶことが多く、それ以外の本を手にするのは少ない。また、読書の時間を通して集中することができないようである。

読書実態調査では「本を読むことは嫌い」と答えており、読書量も1か月に2冊と少ない。本を手にするのは、読書の時間だけである。その理由については、「外で遊ぶ方がおもしろいから」と答えている。

(2) 指導に当たって

着目児童の実態を生活全体から共感的に把握する。また、進んで読書に取り組むことができるように、着目児童への指導を以下の観点に立って行っていく。

① 読書への動機付けを図る。

- ・担任による本の紹介を行う。
(教材・季節などに関連付けて)
- ・児童が心に残った本を紹介する活動を取り入れる。

② 読書体験の場を設ける。

- ・着目児童と読んでいる本について話をしたり、同じ内容の本を紹介したりする。
- ・読み聞かせ(冒頭部分や山場など)の機会を設ける。
- ・読書の時間を確保する。

③ 他の教師との連携を図る。

- ・図書委員会の担当教師から情報を得る。

(3) 着目児童への働きかけと反応・変容

月	働 き か け	着目児童の反応と変容
五月	・どのような本を好んで読んでいるかを調査した。	●特に声かけを行わないと、学習漫画やなぜなにシリーズなどの本を選んで読んでいる。
六月	・クラス全体に読書の仕方や担任の読書歴についての話をした。 ・また、読書全般についてのアンケート調査も行った。	●休み時間には、別の子から、「私も松谷みよさんの本を読んでいるのよ」とか「先生が小学校の時にはどんな本を読んだの」などの話が聞かれたが、特にR・M児からは、目立った反応は見られなかった。
七月	・夏休みに読みたい本を選ばせた。 ・興味を持った本1冊と今まであまり読んだことのなかったジャンルの本を1冊選ばせた。 ・担任も時間を見つけて夏休み中に本をたくさん読むことを話した。	●学習漫画や図鑑などを選んで読もうとしていたので、「物語を読んでは」と話したが、関心を示さずにおぼけの本を選んだ。
八月	・担任が夏休みに新たに読んだ本や、以前に読んで、心に残っている作品を全員に紹介した。	○紹介した本の中で、「読みたい本があるか」とR・M児に聞いたが、特に反応はなかった。しかし、次の読書の時には、『あゝ無情』を読んでいた。途中の感想は、「何でパンをとっただけで、あんなに刑務所に入らなければならないの」と話していた。
九月	・今までの読書の様子を着目児童も含め2, 3人に聞いた。 ・1年生から4年生まで本を進んで読んでいましたか。 ・それはなぜですか。 ・5年生になって読書について、変わったことはありますか。 ・時間を決めて読書をしていますか。	・前時に引き続いて、読書の時間には『あゝ無情』を読んでいる。 ・本をあまり読まなかった。 ・読むのはつまらなかった。 ・最初は学習漫画を読んでいたけれど、物語の本を読むようになった。最初は、先生におこられるから、学習漫画などを読まなかったけれど、先生が紹介してくれた本を読んでは面白かったから、このごろは、学習漫画や図鑑より物語を読むようになった。 ・5年の最初のころは、読書の時間だけだったけれどもこのごろは少しだけ家でも読むようになった。

月	働 き か け	着目児童の反応と変容
十月	・本の紹介カードを記入させた。 ・後期の図書委員会の役員を決めた。 ・校内の生活目標が「進んで本を読みましょう」ということで、学年・学級で具体目標を話し合わせた。 ・11月に行われる読書まつりの係分担を委員会で話し合った。 ・話の内容が分かるように作るよう話し、挿し絵以外にも楽しい場面を取り入れるようにさせた。 ・『大造じいさんとがん』を学習して、椋鳩十の作品を紹介し、関連して、動物と人間のふれあいをテーマにブックトークを行った。	・自分から進んで副委員長になった。 ・話し合い活動に積極的に参加し、「心に残る本をさがしてみよう」という意見を発表した。 ・自分で読んだ本を紙芝居にして紹介する係になったが悩んでいたため、低学年にも分かるようあらすじのポイントを考えて読むように話した。 ○読書まつりでは『ぼこちゃんだいすき』の紙芝居を場面を工夫して作り、発表した。担当の先生に「協力してすばらしいものができました」と褒められ、うれしそうにしていた。 ・『消えたきつね』を選んで読み始める。 ・「動物と人間を扱った作品の中で心に残っているのは、教科書で読んだ『手ぶくろを買いに』かな」と答える。
十一月	・図書室に行き、本を紹介した。紹介した本を読む傾向が見られるようになったが、まだ一部の児童は種類に偏りが見られるため、その児童には個別に聞き取りをしながら本を紹介した。 ・『孤島の野犬』を読み終えての感想を聞いた。 ・読書に対する変容を調査した。 ・4月と比べて読書をどのように思いますか。かの理由も教えてください。 ・読書をする時に前の様子と変わったことは何ですか。 ・読書をする時、してほしいことがあったら教えてください。 ・読書の時間の様子を観察した。	○「椋鳩十の作品がおもしろかったからもっと読んでみようと思うんだけど、何がいいかな」と相談に来たので、『孤島の野犬』を薦めた。すると、「じゃあ読んでみよう」と読み始めた。 ・「仲間の犬に裏切られて、群れから離れる場面が心に残っている」と答えた。 ○好きになった。 ○読んでいて想像できるので楽しくなった。 ・前は学習漫画ばかり読んでいたが、このごろは物語が多くなった。 ・時間がもっとほしい。 ・本を紹介してほしい。 ○読書の時間には自分で本を選び集中して読んでいる。

(4) 結果と考察

① 読書への動機付けを図る

着目児童との本に関する会話の中で分かったことは、「本が多過ぎて、選ぶのが大変だから嫌い」ということであった。読書の時間に学級全体に対して本を紹介したが、着目児童はそれまでと同じ種類の本を読むことが多かった。そこで本の話をしてしながら薦めると、その中から本を選び、集中して読む姿が見られるようになった。読書に対して抵抗なく取り組めるように、教師が本を薦めたことは効果的であった。

また、本の紹介を続けていくうちに、同じような本を見つけて読むようになったり、社会科や理科の調べ学習などで本を活用したりする姿も見られるようになった。いろいろな本を紹介したり、本的话题を取り上げたりするためにも、教師は常に読書の幅を広げることが大切であると感じた。

児童間の読書交流を図るために「読んでみませんかカード」を使って、本の紹介や読んだ後の感想を交換させた。読んだ本が増えるにしたがって、自分から本の紹介をするようになった。

自分が選んだ本の話を取り上げてもらおうと、とてもうれしそうにしていた。

② 読書体験の場を設ける

機会を見つけて読み聞かせをしたが、思いのほか真剣に聞いていた。高学年の児童にも話の冒頭部分だけを読む、あらすじを簡単に話すなどの工夫をすれば、読み聞かせは効果的であることが分かった。また、読書に興味を持っていない着目児童が、より多く本と触れ合うことができるように意図的に読書の時間を確保することも必要であった。

③ 他の教師との連携を図る

図書委員である着目児童に委員会担当の教師との連携を図りながら、「読書まつり」等で活躍の場を与えたことは有効であった。

今後は着目児童の生活に読書が定着するように継続的に支援を行っていきたい。

Ⅶ 研究のまとめ

■ 1 授業実践から

(1) 音声言語活動と読書指導 (授業実践 1)

本実践では、音声言語活動を通して本の世界に読み浸りながら読書への意欲を高めていくことを目指した。

その結果、「お話劇場」で発表するという目的に基づいて本を選んだり、発表された本と親しんだり、テーマ読書へと発展したりする姿が見られるようになった。しかし、グループで発表するという制約から、自分の発表したい本が必ずしも取り上げられないこともあった。

今後は、「この本を紹介したい」という児童の思いを大事にし、新たな紹介の場や方法を探っていきたいと考える。

(2) 読解指導と読書指導 (授業実践 2)

本実践は物語教材の指導計画の第一次・第三次に読書指導を位置付け、読解指導と読書指導とを関連付けたものである。

「きつねのお話を読もう」というテーマのもとに、第一次で「きつね」の本を読んでから中心教材の読解指導に入ったが、これまでの物語教材の学習に比べて、より意欲を持って学習に取り組み、内容の読み取りにも深まりが見られた。また、第三次での教師によるブックトークや友達の読書体験を聞くことにより、新たな読書への意欲も喚起することができた。

今後は、物語教材以外でも読書の幅が広がるような指導方法を工夫していきたい。

(3) 表現活動と読書指導 (授業実践 3)

本実践は作文教材の指導計画に、話す・聞く活動と読書指導を関連的に位置付けたものである。

友達に心がひかれた人物を紹介する発表会を設定した。書く対象や目的を明確にすることで書くことに必然性が生まれ、作文が苦手な児童でも読

書体験を生かして意欲的に書くことができた。また、書くための読書というと調べ読みの要素が強くなりがちだが、友達の発表を聞くことで更に新しい本を読みたいという意欲を喚起し、自由読書へと発展させることができた。

関連指導を行う際には、個々の読書体験や表現意欲を生かした活動にすることが重要であると考ええる。

■ 2 事例研究から

(1) 読書実態の共感的理解

児童の読書実態を共感的に受け止め、内面理解を図ることによって、個々の読書能力や興味・関心に応じた指導・支援を進めることができた。とりわけ効果的だった手だては以下のとおりである。

- ・児童との会話を通して、児童の読書に対する思いを受け止める。
- ・児童から教師に本を紹介してもらったり、児童が選んだ本と一緒に読んだりすることを通して児童と共に読書を楽しむ。

(2) 読書体験の場の設定

児童が読書を体験する場を意図的に設け、工夫することによって、本の楽しさを児童に気付かせ、読書への興味・関心を高めることができた。とりわけ効果的だった手だては以下のとおりである。

- ・読み聞かせやストーリーテリングなど、耳からの読書を体験させる。
- ・ブックトークで本を紹介する。
- ・児童との会話の中に出てきた話題をとらえ、本を読むことに結び付ける。

(3) 読書活動における児童間の交流

読書を通して友達との交流を促すことによって読書することの楽しさを広げ、読書活動を活発にしていけることができた。とりわけ効果的だった手だては以下のとおりである。

- ・児童が読んだ本や選んだ本を取り上げ、読み聞かせをする。
- ・紹介カード、1分間スピーチ、読書発表会などを通して読書情報の交流を図る。
- ・児童が持ち寄った本で学級文庫を設置する。

(4) 読書環境の整備

読書環境を整備することによって、日常の児童の読書活動を刺激するとともに、児童の読書への思いを保障することができた。とりわけ効果的だった手だては以下のとおりである。

- ・児童の興味・関心をひくような本を常に準備しておく。
- ・図書室利用の時間を確保する。
- ・一人の読者として読書を楽しんでいる教師の姿を見せる。

VIII 研究の反省と今後の課題

■ 1 研究の反省

- ・事例研究の過程で指導方針の見直しがあった。

・参考文献

- 竹井成夫『読まない子どもの指導』 国土社 1983
- 金沢嘉市・上地ちづ子『子どもたちに語りの世界を』 童心社 1985
- 文部省『小学校、中学校における読書活動とその指導』 学校図書館指導資料2 1987
- ホワイト・コーガー『朗読劇ハンドブック』 玉川大学出版部 1989
- 全国SLAブックトーク委員会編『ブックトーク』 全国学校図書館協議会 1990
- 古宇田亮順・阿部恵『こうぞパネルシアター』 東洋文化出版 1992
- 水野寿美子『本の森の案内人 子どもの読書とのかかわり』 国土社 1993
- 小森茂『国語科の実践動向V』 国土社 1995

事前の読書実態の把握や児童の内面理解を十分に行うことが大切である。

- ・事例研究の過程で児童に適切な本を紹介することが難しい場合があった。指導者自らが児童図書を読み、児童図書の現状や児童の求めるものに対する理解が必要である。
- ・読書指導を組み入れた単元構成を考える場合、単元構成の見直しや指導内容の精選を図ることが大切である。

■ 2 今後の課題

- ・学習漫画が多く読まれている現状を踏まえて、学習漫画を活用した読書指導の在り方について今後検討していく必要がある。
- ・今回作成した読書指導年間指導計画については、今後詳細な検討を加えていく必要がある。
- ・読書指導は、教育課程全般にわたって行われるものであるため、今後は国語科以外にも様々な指導の場を設けて、計画的、継続的な読書指導を行う必要がある。

・委嘱研究員

宮城教育大学助教授	宮川 健郎
仙台市立八木山小学校教諭	斎藤 俊子
仙台市立長町南小学校教諭	鈴木 智
仙台市立南吉成小学校教諭	佐々木智子
仙台市立桂小学校教諭	澤田 直美
仙台市立田子小学校教諭	吉田 敦子
仙台市立古城小学校教諭	松本 浩人

・担当

仙台市教育センター

指導主事 今野 英二

読書指導年間指導計画 1年

	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
指導のめあて	入学した喜びについて書かれた本を読み、読書に興味を持とうとする。	楽しい絵本を読み、絵と文章が一体になったおもしろさに気付こうとする。	動物の本を読み、科学院に興味を持とうとする。	仲良しになる話を読んで、自分でも読もうとする。	繰り返しの出てくる話を読み、他にもないか、探して読もうとする。	生活に役立つ本を読んで、実際の生活にも役立てようとする。	詩を読んで言葉のリズムを楽しもうとする。	昔話を読んでそのおもしろさを知り、楽しんで読もうとする。	楽しい童話を読んで、最後まで読み通す喜びを味わおうとする。	乗り物の本を選んで読み、文学以外のジャンルの本にも興味を持とうとする。	自分の好きな本を選び、進んで本を読もうとする。
教科書教材 手法例	みんなのせかい 読み聞かせ	おつきさま 読み聞かせ	かぶとむし ブックトーク	てがみ 読み聞かせ	大きなかぶ 読み聞かせ	かみずもう ブックトーク	しをよみましよう 読み聞かせ	かもとりごんべえ 読み聞かせ	ゆきの日のうらびんやさん 読み聞かせ	いろいろなふね ブックトーク	おはなし大すき ブックトーク
紹介する本	・いちねんせい (小学館) ・おめでとの1ねんせい (小学館) ・1ねんせいになりました！ (文化出版局) ・ぼくは一ねんせいだぞ！ (童心社)	・あおくんときいちゃん (至光社) ・ねえ、どれがいい？ (評論社) ・じごくのそらうべえ (童心社) ・スイミー (好学社)	・カブトムシ (あかね書房) ・あめがふるときちょう (評論社) ・ふたりはいつも (文化出版局) ・虫のひげ (新日本出版) ・足はなんぼん？ (国土社)	・ずーっとずきだき (評論社) ・ふたりはいつも (文化出版局) ・となりのせきのますだくん (ポプラ社) ・どんなにきみがすきだかあててごらん (評論社)	・てぶくろ (福音館) ・3びきのくま (福音館) ・わたしのワンピース (こぐま社) ・かえりみち (童心社)	・よわいかみつうた (福音館) ・なぞなぞあそびうた (のら書店) ・のはらうた (童話屋) ・金子みすゞはしとたんぼ (JULA出版)	・ことばあそびうた (福音館) ・なぞなぞあそびうた (のら書店) ・のはらうた (童話屋) ・金子みすゞはしとたんぼ (JULA出版)	・しばてん (偕成社) ・かにむかし (岩波書店) ・やまんばとうしかた (フレーベル館) ・ゆきむすめ (偕成社)	・おじさんのかさ (銀河社) ・ふらいばんじいさん (あかね書房) ・おおきななおきなおいも (福音館) ・きいらいばけつ (あかね書房)	・乗り物の図鑑 (学習研究社) ・ふねきやくせんこうせん (ひかりのくに) ・じどうしゃ博物館 (福音館) ・ブルドーザとなかまたち (福音館)	・ろくべえまってるよ (文研出版) ・ぼうし (評論社) ・さっちゃんまほうのて (偕成社) ・トビウオのぼうやはびょうきです (金の星社)

読書指導年間指導計画 2年

	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
指導のめあて	声に出して詩を読み、言葉のリズムを楽しもうとする。	植物や昆虫などの科学的な読み物を読み、新しい知識や情報を求めようとする。	絵本を読み、絵と文章から場面の様子を想像しながら読もうとする。	友達のことを書いた話を読み、友達の大切さについて考えようとする。	外国の物語を読み、読書の範囲を広げようとする。	動物の生態の不思議さを書いた話を読み、科学的な読み物を読む楽しさを味わおうとする。	詩を読み、表現のおもしろさを味わおうとする。	いろいろな民話を読み、筋のおもしろさや語り口のおもしろさを味わおうとする。	心の温かくなる話を読み、登場人物の気持ちを想像しながら読もうとする。	動物の子育てのことを書いたいくつかの話を読み、同じところ違うところを比べながら読もうとする。	ことば遊びの本を読み、友達に紹介したり、自分達の遊びに取り入れようとする。
教科書教材 手法例	しをよみましよう 読み聞かせ	たんぼぼ ブックトーク	いちごつみ 読み聞かせ	読書のまど ブックトーク	雨の日のおさんぽ 読み聞かせ	ビーバーの大工事 ブックトーク	しをよみましよう 読み聞かせ	かさこじぞう ストーリーテリング	うめの花とてんとう虫 読み聞かせ	ぺんぎんの子そだて ブックトーク	ことばあそび 読み聞かせ
紹介する本	・どきん (理論社) ・いいけしき (理論社) ・はははるだよ (金の星社) ・世界じゅうの庭が (国土社)	・アサガオ (あかね書房) ・ヒマワリのけんきゅう (あかね書房) ・あげは (福音館書店) ・アリジゴク (フレーベル館)	・こんこんさまにさしあげそうろう (P H P 研究所) ・くるぞく (童心社) ・かたあしだちょうのエルプ (ポプラ社) ・猫山 (岩崎書店)	・大きい1年生と小さな2年生 (偕成社) ・こぎつねコンとこだねき (童心社) ・ロボットカミー (福音館書店) ・ともだちができた日 (偕成社)	・ふたりはともだち (文化出版局) ・王さまと九人のきょうだい (岩波書店) ・かみ舟のふしぎな旅 (偕成社) ・スーホの白い馬 (福音館書店)	・動物のふしぎ (講談社) ・モグラのせいかつ (岩波書店) ・のろうさぎにげろ (新日本出版) ・鳥のすづくり (小学館)	・はらっぱのうた (品文社) ・みのむしの行進 (章書房) ・しかられたかみさま (理論社) ・てつがくのライオン (理論社)	・だいくとおにろく (福音館書店) ・やまんばのにしき (ポプラ社) ・ちからたろう (ポプラ社) ・なんげえはなしつこし (銀河社)	・しろいうさぎとくろいうさぎ (福音館書店) ・百万回生きたねこ (講談社) ・おにたのぼうし (ポプラ社) ・ゆめをにるなべ (教育画劇)	・はらっぱのおはなし (P H P 研究所) ・もすのこども (講談社) ・いるかのカーフ (文化出版局) ・たぬきの本 (新日本出版)	・ことばのこぼこ (すばる書房) ・絵本ことばあそび (岩崎書店) ・ことばははねる (小学館) ・あいうえおっせい (さ・え・ら書房)

讀書指導年間指導計劃

讀書指導年指導計畫

疏導年導指畫

疏導計畫
導年
4年

讀書指導年間指導計畫

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
指導のめあて	非現実的なおもしろさをもつて読む作品を、その面白さを味わうとする。	自然や科学について取った物語を読む、その面白さを味わうとする。	早稲小説に挑戦し、最後まで読んで読む。	ノンフィクションの物語を通して読む。	古典に対して興味を持ち、独特の表現方法を味わうとする。	生活の上で役に立つ知識を得る本に親しむ本をもつとする。	色や形とわたしたちの暮らし	生きているときの面白さ	読者の楽しみを、その面白さを味わうとする。	日本の童話や名作を通して読む。	ユーモアあふれる作品を、その面白さを味わうとする。
教科書教材	すずめのおくりもの	春を知らせるサクラの花	大造じいさんとがん	読書のまど	清水	色や形とわたしたちの暮らし	生きているときの面白さ	読書のまど	サリバン先生との出会い	注文の多い料理店	笑いをさそう表現
手法例	読み聞かせ	ブックトーク	読み聞かせ	ブックトーク	読み聞かせ	ブックトーク	読み聞かせ	ブックトーク	ブックトーク	ブックトーク	ブックトーク
紹介する本	・屋根うらたぬ屋にきた魚(岩波書店) ・小さなスプーンおぼさん(学習研究社) ・空気がなくなる日(新日本出版社)	・川は生きていく(講談社) ・黒つちがもえた(大日本図書) ・科学の質問箱(新光社)	・片耳の大シカ(旺文社) ・十五少年漂流記(集英社) ・あゝ無情(ポプラ社) ・ロジマの子守歌(砂文社) ・ガラスのうさぎ(金の星社)	・さとの子(日本文学) ・ひくまの出版(ありがとう) ・山ガール(平山) ・「平治」(徳成社) ・葛どころ(国士社)	・少年少女古典文学館(講談社) ・短歌をつくらう(さ・え・ら) ・真の細道を(さ・え・ら) ・読書のまど(さ・え・ら)	・車輪のはなし(さ・え・ら) ・身のまわり(さ・え・ら) ・発明発見(国士社) ・まわれ！足ながごま(大日本図書) ・不思議図鑑(ほるぷ出版) ・自然のランドセル(らくだ出版)	・少年少女の名時表(全15巻) ・あすなろ(さ・え・ら) ・時のランドセル(らくだ出版)	・船の子太郎(講談社) ・小公子(岩波書店) ・きよなるおじいちゃん(じいちゃん) ・ぼくは七つだった(さ・え・ら) ・読書のまど(さ・え・ら)	・豊臣秀吉物語(ファオ出版) ・コロブス(ファオ出版) ・白い大地(さ・え・ら) ・幼年伝記(小峰書店)	・風の又三郎(岩波書店) ・セロピのゴシップ(ポプラ社) ・坊ちゃん(ポプラ社) ・くしやみん(くしやみん) ・長くつ下ののび(小峰書店) ・玉虫厨子の物語(学習研究社)	・そここの学校(学芸図書) ・ゆかいな声(四六さん) ・くしやみん(講談社) ・くしやみん(くしやみん) ・くしやみん(くしやみん) ・くしやみん(くしやみん)

讀書指導年間指導計畫

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
指導のめあて	夢のあるおもしろい作品を 読み、読書の 楽しさを味わ おうとする。	科学的読書物 を通して考え 方を深めよう とする。	長編小説に挑 戦し、最後ま で楽しく読む うとする。	古典文学や伝 承文学の楽し さを味わおう とする。	平和の大切さ を伝える読書 会の中で生き 方を考える。 うとする。	長編物、伝記 物、歴史物な ど、いろいろな 分野に目を向 け、読書の愉 楽を深めよう とする。	児童のための 定型的な自由 読書のリズム を味わおうと する。	同一テーマの 本を深めよう とする。	人物の生き方 や業績に目を 向け、自分の 生活や意見と 比べ感想を持 とうとする。	文学書以外に もおもしろい 読書に役立ち るのに役立つ 書物があるこ とを知り、通 人である。	読書で学んだ ことを生かし て自分について 考えようとし る。
教科書教材 手法例	まぼろしの町 読み聞かせ	人間がさばく を作った	海のいのち 読み聞かせ	読書のまど ブックトーク	ヒロシマのう た ブックトーク	桃花片 心をひかれた 人物の紹介 読書会	短歌と俳句 読み聞かせ	研究したごと 読書のまど ブックトーク	宮沢賢治 ブックトーク	正倉院とシル クロード ブックトーク	未来に生きる ために ブックトーク
紹介する本	・七人のゆかいな大どろぼう (理論社) ・だれも知らない小国 (講談社) ・ズッコケ発明狂時代 (朝日新聞) ・のんびり転校生事件 (新日本出版)	・ワンプの星 (成成出版) ・飛びたてのマフクロウ (あかね堂) ・生物が消えた島 (福音館書店) ・白神山地ブナの森から (国土社)	・二分間の冒険 (講談社) ・コロレ工場の秘密 (評論社) ・ドリトル先生アフリカゆき (福音館書店) ・大きな森の小さな家 (福音館書店)	・絵巻平家物語 (ほる出版) ・絵本・走れメロス (戸田デザイン研究室) ・ジキル博士とハイド氏 (福音館書店) ・日本の古典 ・リリー・ワット (金の風)	・猫は生きて いる (理論社) ・ふたりの星 (講談社) ・対馬丸 (理論社) ・丘島の孤島 (福音館書店)	・マザー・レス (ポプラ社) ・歩いて作 った日本地図 (岩崎書店) ・私のア ラフ (成成社) ・福沢諭吉 (ポプラ社)	・どきん (理論社) ・伊旬はいか が (福音館書店) ・エイズとた たかっ た年の の肥 (ポプラ社) ・かざりな かざし (成成社)	・ぜいたく に 動物 (佑学社) ・木を植 えた男 (あすな ろ) ・ツキノ ワグ (小峰書 房) ・取も時 計を 持つて (ま・え ら書房)	・兄さん 沢賢治 (あすな ろ) ・菓子づくり に愛をこ めて (P.H.P 研究所) ・魔法の仕 掛け人 ディズ ニー ・松本零 次郎の 勇気 (P.H.P 研究所)	・ならの 大仏 さま (福音館 書店) ・猫と海 賊 (理論社) ・ぼくが 字を とんだ わけ (講談社) ・まが い だ らけの 百葉 づかい (ポプラ 社)	・28年 の年 式 (福音館 書店) ・ての ひら の村 (理論社) ・小犬 の裁判 はじ め (童心社) ・暖 八七 のび (福音館 書店)

< 資料編 >

読書指導の手引き 1

読み聞かせて読書の楽しさを共有しよう

1 読み聞かせとは

読み聞かせとは、1冊の本を子供たちに直接読んで聞かせる、いわば耳からの読書である。読み手が絵本の絵を見せながら読んだり、子供たちが一人ではなかなか読み通せない長編を少しずつ読んだりすることもある。

読書の喜びを知らない児童や、読書が習慣になっていない読書入門期の児童にとってより大きな効果があるが、一人で読めるようになった児童についても、主体的に読む力を育てるのに十分効果的である。

2 本の選び方の視点

(1) テーマや発達段階に合っているか。

・読み聞かせの場合、音声だけで話が進んでいくので、難しすぎないものを選ぶ。

(2) 語り口のよい、リズムのある作品か。

・センテンスの長過ぎないもの。実際に声に出して読んでみるのが大切である。

(3) 話の展開がはっきりしていて、クライマックスのある話か。

(4) 絵本は絵が大きく見やすいものを。

・それができない時は、読み聞かせの途中で立ち止まり、絵をよく見せてから先へ進む。

(5) 読み手が好きな作品を選ぶ。

・読み手がその作品を好きである、是非読み聞かせたいと思う気持ちがある、聞き手に伝わり、読書の楽しさを共に味わうことができる。

3 読み聞かせをする時の留意点

(1) 読み聞かせをする前に

- ・声を出して読み、絵や文の流れ、間のとり方、ページを操るタイミングなどをつかんでおく。
- ・読み聞かせの途中や最後の話合いは、子供の反応によって臨機応変に行うが、ポイントをあらかじめ考えておく。

(2) 読み聞かせの場合

- ・教室の場合、机を後ろにさげて、児童を教師のそばに半円形に座らせると効果的。



(3) 読み聞かせ方

- ・表紙をじっくり見せ、書名や作者名を読む。
- ・ページのめくり方や間のとり方に気を付ける。
- ・絵本は、絵がどの子にも見える高さにする。
- ・立ち止まりの箇所は、聞き手の反応によって判断する。つぶやきや表情、目の輝きなどを見逃さないようにする。
- ・読み終わったら、もう一度表紙を見せる。
- ・余韻をもって終え、一人一人の読みを大切にす。

4 読み聞かせに適した本の例

低学年	『てぶくろ』	福音館
	『王様と九人のきょうだい』	岩波書店
	『ねえ、どれがいい?』	評論社
中学年	『スーホの白い馬』	福音館
	『島ひきおに』	偕成社
	『しまふくろうのみずうみ』	偕成社
高学年	『じごくのそうべえ』	童心社
	『ひろしまのピカ』	小峰書店
	『100万回生きたねこ』	講談社
(学年はあくまでも目安)		

< 資料編 >

読書指導の手引き 2

ブックトークで読書の幅を広げよう

1 ブックトークとは

ブックトークとは、あるテーマに基づいて数冊の本の内容を手短に紹介するものである。本の中のおもしろい部分について紹介したり、一節を読んだり、著者の人柄や本のできた経緯などを話すことによって、本を読むきっかけを与えることができる。学級集団や小グループを対象に行う。

2 ブックトークの方法

(1) テーマを設定する

- ・児童の興味・関心のあること、また今学校で習っている学習に関連したテーマを設定する。

(2) 本を選択する

- ・テーマにそった本を5～6冊用意する。
- ・紹介する本は、必ず語り手がよく読んでおくことが大切である。
- ・聞き手の個人差を考慮して、その学年のレベルより低いものと高いものを入れておくことよい。

(3) プランを立てる

- ・1～2冊の中心となる本を決める。
- ・その本を中心に紹介していく順序を決める。
- ・1冊1冊のつながりにエピソードや作者についての紹介を入れるなど、変化を持たせた台本を作る。

(4) ブックトークを行う

- ・望ましい場所は図書室。
- ・語る人は学級担任、司書など。
- ・引用箇所や特に見せたい部分はすぐに示せるようにしておく。
- ・紹介の終わった本は見えるように立てかけておく。
- ・紹介した本のブックリストを用意しておく。

3 ブックトークの実際

テーマ：星座を見つけよう

ねらい：星座に興味を持ち星座の見つけ方を知る

対象：5年生

取扱い：理科「星」の学習の発展

時間：45分

取り上げた本

- ①『天の川ながれる島』 今西祐行 あすなろ書房
- ②『夏の星座』 藤井旭 金の星社
- ③『やさしい星座のみつけ方』 藤井旭 ポプラ社
- ④『よだかの星』 宮沢賢治 福武書店

展開の例

天の川を見たことがあるかどうかをまず問う。反応を待って①を出して南の島に伝わる天の川の伝説をもとにして作られた物語であることを話す。次に、②を示し夏の星座のあらましを見せる。さらに、夏の大三角については七夕伝説とからませて詳しく話す。「このような星座を見つけるにはどうしたらよいか…」と問いかけて③を出す。春夏秋冬にわたってさまざまな星座のあることを知らせ、星座を見つけるポイントについて話す。「この星は見つけられるか分からないけど…」と言いながら、④を時間の許す限り話す。



< 資料編 >

読書指導の手引き 3

パネルシアターで演じる楽しさを味わおう

1 パネルシアターとは

パネルシアターとは、演者が舞台の脇に立ち、パネルに絵人形をはったり、はがしたりして展開するお話や歌あそびのことである。

パネルシアターを読書指導に取り入れやすい理由としては、次のような点が挙げられる。

- ・人形劇やペープサートなどに比べて製作が簡単であり、また、絵があることによって素話に比べて人前に立って話す抵抗が少なくなる。
- ・絵話し形式で、演者が前面に出るので、演者と観客との隔たりが少ない。
- ・グループ活動や集会の場などでも利用できる。
- ・見る側ばかりでなく、演ずる側もお話を選んだり、絵をかいたりする楽しさを感じることができる。指導者が演ずるだけでなく、児童に演じさせることも可能である。
- ・一人で演ずることも、数人で演ずることもでき、多種多様な演出方法が考えられる。

特に児童が製作や実演に参加できることが大きな特徴である。絵本を見たり、童話を聞いたりした後、よい作品をパネルシアターに発展させて製作・実演すれば、読書への誘いになるのではないかと期待できる。

2 パネルシアターの方法

(1) 題材を決める。

(2) 絵人形を作る。

絵人形は、貼り付きやすい、絵がきれいに描ける、丈夫であるなどを充たす材料が要求され、一般的には、不織布が用いられる。

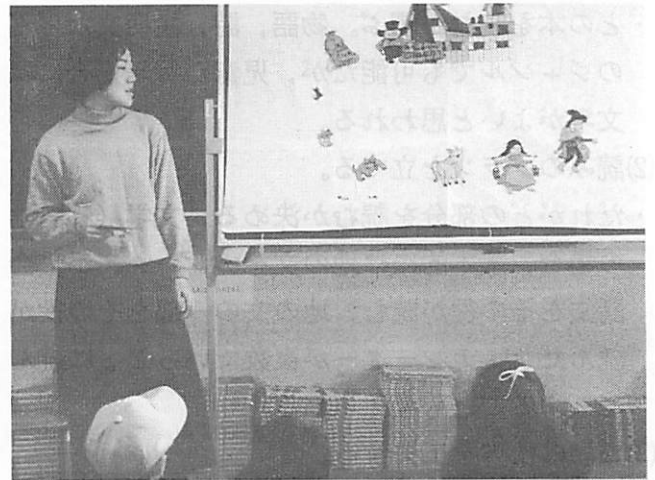
絵人形を作る際には、以下の点に留意する。

- ・平面的な絵であること。
- ・描くものの特色をはっきりさせること。
- ・アウトラインをはっきり描くこと。

(3) 練習をする。

- ・絵人形を貼る位置（画面構成）を工夫する。
- ・絵人形を貼ったりはがしたりするタイミングを考え、話が中断しないようにする。
- ・観客の目の高さや演者との兼ね合いを考え、舞台パネルや演者、観客の配置を考える。

(4) パネルシアターを演じる。



3 パネルシアターの実例

題 材：昔話を紹介しよう

ねらい：いろいろな昔話や民話を読み、そのおもしろさを味わったり、伝えたりする。

対 象：3年生

取扱い：国語「昔話の発表会」（総合）の一手法として取り入れる。

《取り上げた本》

『わらしべ長者』	岩波書店
『かみそりぎつね』	盛光社
『こどもの民話』	盛光社
『おこりじぞう』	新日本出版
『日本むかし話』	あかね書房

展開の例

第1次 発表会を知り、グループ毎に

好きな昔話を選ぶ。発表の方法を考える。

第2次 自分の役を決め、絵人形を作る。

第3次 発表の練習をする。

第4次 発表会をする。

< 資料編 >

読書指導の手引き 4

リーダーズシアターを通して
本の世界に読み浸ろう

1 リーダーズシアターとは

朗読による劇。群読が日本で生まれ、大勢での読みを基本とすることに対して、アメリカが発祥の地であり、より個の読みを生かし得ると言える。

2 リーダーズシアターの方法

(1)本を選択する。

・どの本を読むか選ぶ。物語、詩、説明文などのジャンルでも可能だが、児童が行う場合には文学がよいと思われる。

(2)読みのプランを立てる。

・だれがどの部分を読むか決める。文学（物語）の場合、基本的には地の文をナレーターが、会話文をその役が読む。地の文の一部をその役が読んだり、ナレーターが複数でいっしょに読んだりすることも考えられる。

(3)登場の仕方を工夫する。

・ナレーターは、終始観客の方を向いているが、その他の出演者は、自分の出番の時だけ観客の方を向く。登場の方法としては、下を向いている状態から顔を上げる、または、後ろ向きから前を向くなどの方法がある。

3 リーダーズシアターを行う時の留意点

リーダーズシアターの特色の第一は、簡単に取組めるという点である。一般の劇のような演出はしないのが普通だが、お面をかぶったり、動作を付けたりすることも、場合によっては効果的である。



読書指導の手引き 5

ストーリーテリングで
語りの世界を楽しもう

1 ストーリーテリングとは

話し手が昔話、絵本、児童文学などの物語（ストーリー）を自分のものとして覚え、本なしで、聞き手に語ることである。

2 ストーリーテリングの方法

(1)話を選ぶ

・自分が好きな話で、人に話して聞かせたい話やおおらかな笑いを誘う話、次を期待させるような動きのある話が適している。

(2)話を覚える。

・丸暗記をしない。何度も繰り返して話を読み、話の全体やストーリーの流れ、場面の区切りなどをつかむ。

(3)話をする。

・子供たちの顔をゆっくり見ながら、自然で素朴な語り口で話す。

・話す時間は30分までとする。

・話す場所は教室や図書室がよい。

・子供たちは語りを中心に扇型に並ぶ。話し手は子供たちが椅子に座るなら立ち、床に座るならば、椅子に座る。床に座らせた方が、話し手との一体感を作りやすい。

(4)話が終わってから

・本の紹介をする。

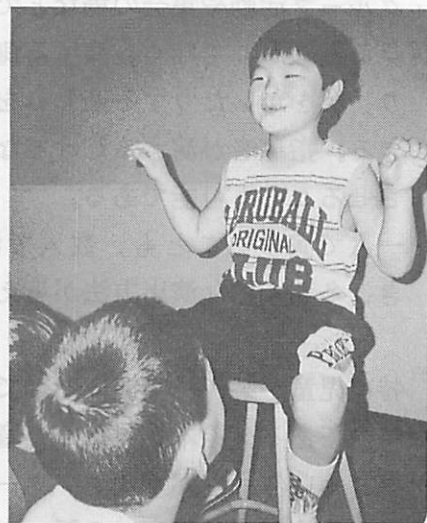
3 ストーリーテリングに適した本の例

『ふるやのもり』 福音館書店

『やまんばのにしき』 ポプラ社

『かさじぞう』 福音館書店

『子供に聞かせる世界の民話』 実業之日本社



子供たちが意欲を持ち主体的に取り組む社会科学習の在り方

—— 地域教材の活用と支援の工夫を通して ——

■要 約

この研究は、新学力観の考え方にに基づき、学習者の立場に立った社会科学習の在り方を、地域教材の活用と教師の支援の工夫を通して実践的に追究したものである。

地域教材の活用について、児童生徒・教師双方にアンケート調査を行うとともに、小学校と中学校において授業実践を行った。

その結果、地域教材活用の有効性と教師の支援の在り方を探ることができた。

■キー・ワード

☐社会科の学ぶ力

☐地域教材の活用

☐支援の工夫

目 次

I	主題設定の理由	41
1	教科の目標から	41
2	これまでの指導の在り方から	41
3	改善の方向性から	41
II	研究の基本的な考え方	41
1	社会科の学ぶ力とは	42
2	地域教材の活用とは	42
3	学習活動の支援とは	42
III	研究の目標	42
IV	研究の仮説	42
V	研究の概要	43
1	研究の方法	43
2	研究の内容	43
(1)	実態調査	43
(2)	実践授業	47
VI	研究の結果と考察	65
1	小学校の実践から	65
2	中学校の実践から	66
VII	研究の反省と今後の課題	68
1	研究の反省	68
2	今後の課題	68
◇	参考文献	68
◇	委嘱研究員	68

I 主題設定の理由

■ 1 教科の目標から

社会科は、人と人とのかかわりを中心に、自分と自分を取り巻く環境との関係を学び、人間としての生き方を学ぶ教科であり、その成果を生活の中で実際に生かすことが期待されている。

したがって、社会科の学習では子供たち一人一人が主体的に生きていくため、自分の個性や可能性を発揮し、自分なりの課題や意図を持って、自然・社会・文化などの対象にかかわり、進んで考え判断しながら、それらを解決し、実現し、創造することができるような能力や技能を育成することが大切である。

■ 2 これまでの指導の在り方から

これまでの学習指導には、子供たちの興味・関心や課題意識とのずれや遊離も多く見られた。方法面でも教師主導型の、知識注入による一方的な指導が多かったように思われる。そのため、一人一人の異なった視点からの考えが十分に出しにくいなど、子供たちの思考の多様性や体験の豊かさは軽視される傾向が強く、学ぶ意欲や能力を育てる面で不十分であったと考える。

小学校では身の回りの教材を活用し、一人一人の学び方を大切にしながら、体験的な学習を通して子供たちの生活に役立つ知識や技能を身に付けさせることを重視してきた。しかし、学年が進むにつれて学習内容が高度になり、分量も増えていくこともあって、知識の効率的な伝達に指導の重点が移っていく傾向がある。その傾向は中学・高校とさらに大きくなるため、体験的な学習に時間をかけることができず、学ぶ意欲や能力を十分に育てることが難しかったと考えられる。

■ 3 改善の方向性から

今日のような変化の激しい社会で重要なのは学習の結果としての知識の量ではなく、知識を身に

付けるための方法や過程である。膨大な情報の中から、自分の経験を通して必要なものを取捨選択し、相互に関連付け、構造化する自己学習能力が大切である。言い換えれば、人間と社会に関する様々な問題に気付く感性と問題解決にいたる方法と道筋を見通す眼を持ち、意欲的に学習に取り組む子供たちの育成が求められている。

このような実態を踏まえ、学習内容を子供たちの目の高さでとらえ直し、支援の方法も子供たちの理解する道筋に沿って見直したいと考えた。そのための糸口として、地域教材の活用を通して、子供たちの興味・関心を高めさせたり、教師の支援の在り方を工夫したりして、子供たちを主体的に学習に取り組ませたいと考えた。

未知のものに対する興味や憧れも学習の推進力として働くが、身近な地域の教材は、具体的な事象や資料などに直接触れることができ、自ら現地に立って調査・観察し考察することも容易である。

今日のような情報社会に生きる子供たちは間接体験を通して学ぶことがほとんどで、このような直接体験は貴重であるばかりでなく、これまで学んだ知識を自分の中で再構築する機会を提供してくれる。つまり、地域教材は社会科学習において、学ぶ対象としてではなく、その学習を通して地理認識や歴史認識を深めるための方法を身に付けさせる上でも有効である。私たちが、ここで「地域を」でなく、「地域で」の方を重視したのは、そうしたとらえ方による。その中で、子供たちは日ごろ見慣れた事象の中に、新たな意味を見いだすことができ、学び方を身に付けるとともに学習意欲を高めることができるであろう。

また、子供たちが生活の中で関心を持ったり、当面している課題を自ら解決しようとしたりすることは、生涯学習につなげるための基礎的な能力の育成という意味からも大切であると考えられる。

II 研究の基本的な考え方

■1 社会科の学ぶ力とは

子供たちが、学習内容に関心を示し、自らの力で調べ、考え、話し合いに参加し課題を解決しようとし、授業が終わっても問題意識を持って学習を継続できることととらえた。

具体的には、地理的な見方や考え方、歴史的な思考力、地図やグラフの読み方などの資料活用、広い視野に立った思考・判断などに関する能力や態度である。

「自ら進んで学習している」という自覚を持ち、多様な学習方法を身に付け、それらを問題に応じて取捨選択して活用し、断片的な知識を関連付け、構造化し、人間や社会に対する自分なりのイメージを豊かに形成していける能力である。

また、そのようにして身に付けた知識や技能を他の仲間と分かち合うための表現能力や、社会生活で生かしていく態度や意欲である。自分の学習の成果を他者に伝えるために、様々な表現を工夫することで、相手から学び取る能力をも高めることができる。さらに、生活への応用を通して、それらを生涯にわたって生きて働く力として身に付けることができると考えた。

■2 地域教材の活用とは

地域教材は、作業的・体験的学習を通して、それまで学習した様々な知識や学習方法を総合的に深めることができる。また、教師による多様な支援の工夫がしやすい教材である。

現地に立って直接、事象や資料に触れることで子供の学習意欲は高まる。その中で、日ごろ見過ごしていた風景の中に新しい発見をしたり、それまでは思いもよらなかった社会的事象が自分の生活と深い関係を持っていることに気付くことで、切実感が生まれ、学習意欲はさらに高まると考えられる。

また、地域教材を通して、日本の他の地域や世界の学習につなげることができ、過去の歴史を身近に学ぶこともできるので、学習に広がりや深ま

りが出てくる。

したがって、子供たちの生活の場にある地域教材で、具体的に社会科の内容を学習させることを通して、地理や歴史についての知識を再構成させ、子供に自分なりの世界像を描かせることができると考えた。

■3 学習活動の支援とは

子供はもともと学ぶ意欲と能力を持っている。その意欲を刺激し、能力を高めるための様々な働きかけを支援ととらえた。

子供たち一人一人が、自ら考え、判断し、表現し、行動することができるような資質と能力を獲得できる学習活動が大切である。そのような学習活動を促すために、教師が子供たち一人一人の個性を認め、その個性に応じて様々な刺激し、誘発し、呼び掛ける必要がある。

共感的な理解に基づく自由な精神的風土の中、教師が学習に対する明確な見通しを持たせ、様々な試行錯誤を保障し、適切に評価し励ましてやることで、子供たちは自らの能力を精一杯働かせ自分の世界を広げていくことができる。

したがって、教師の大切な仕事は、子供の成長や学習がもっともよく促進されるような環境をつくってやることとも言える。

Ⅲ 研究の目標

子供たちが意欲を持って主体的に取り組む社会科学学習の在り方を、地域教材の活用と支援の工夫を通して明らかにする。

Ⅳ 研究の仮説

子供たちにとって、身近な地域教材を活用し、学習過程の各段階で、個に応じた適切な支援を行えば、子供たちは、意欲を持って主体的に学習に取り組むようになるだろう。

V 研究の概要

■ 1 研究の方法

(1) 実態調査（平成7年7月中旬実施）

① ねらい

・地域教材に関して、活用状況や教師の意識を調査することで、有効な活用法や実践する上での課題などを探る。（調査1）

・児童生徒に対しても、教師対象のアンケートと同じような項目で調査を行い、教師との意識の違いを明確にするとともに、児童生徒がどのような地域学習を望んでいるかを探る。（調査2）

② 内容

地域教材を生かした社会科学習の実施状況及び地域教材に対する意識を教師と児童生徒を対象に調査する。

③ 調査対象

対象 校種	教 師	児童生徒
小 学 校	調査1 2校, 25名	調査2 2校, 136名
中 学 校	調査1 4校, 11名	調査2 4校, 534名

(2) 実践授業

① ねらい

実践授業では、地域教材の持つ有効性を検証するとともに、効果的な支援の方法を探る。さらに、地域教材を扱う上での課題とその解決法を明

らかにする。

② 内容

ア 小学校の実践授業（平成7年9月19日実施）

仙台市立川前小学校 6年

教 諭 大沼 芳浩

単元名 「戦国の世に生きた伊達政宗」

イ 中学校の実践授業（平成7年9月27日実施）

仙台市立三条中学校 1年

教 諭 狩野 博正

単元名 「鎌倉幕府の成立と鎌倉文化」

■ 2 研究の内容

(1) 実態調査

① 教師対象の実態調査（調査1）

ア 地域教材の必要性について

小・中学校ともに、90%以上の教師が、授業に地域教材を取り入れることが「必要」と考えていることが分かった。

イ 地域教材が必要な理由

地域教材を必要と感じる主な理由として、小・中学校ともに、現地での調査活動ができることと、学習者の興味・関心が高められることを挙げている。中学校では「地域の一員としての自覚を高め…」が多く挙げられているが、これは、地域社会とのかかわりが希薄になりがちな中学生に対する教師の願望を表しているものと思われる。

表1 地域教材の活用状況および地域教材に対する意識調査（調査1）

調 査 の 観 点		調 査 項 目
必 要 性	ア	授業に地域教材を取り入れることは、必要だと思いますか。
	イ	アで「必要だと思う」と答えた人は、その理由をお答えください。
活 用 法	ウ	地域教材を、主にどの方法で活用していますか。
学 習 活 動 の 形 態	エ	どのような学習活動を取り入れましたか。
子 供 の 変 容	オ	地域教材を取り入れたとき、子供にはどのような変容が見られましたか。
年間指導計画への位置付け	カ	地域教材を年間指導計画に位置付けていますか。
取り入れる上での課題	キ	授業に地域教材を取り入れることが難しい理由はどんなことですか。
活 用 上 , 望 む こ と	ク	地域教材を活用する上で、好都合だと思われることは何ですか。

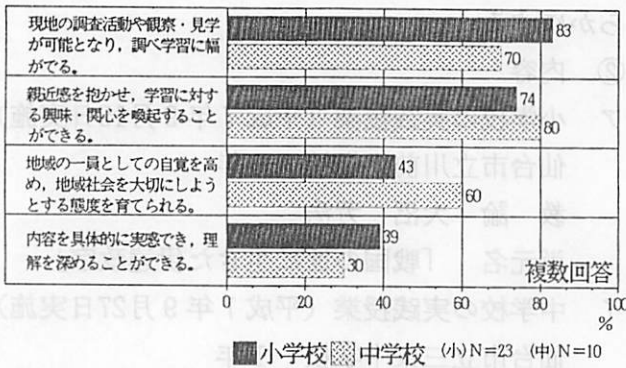


図1 授業に地域教材が必要な理由

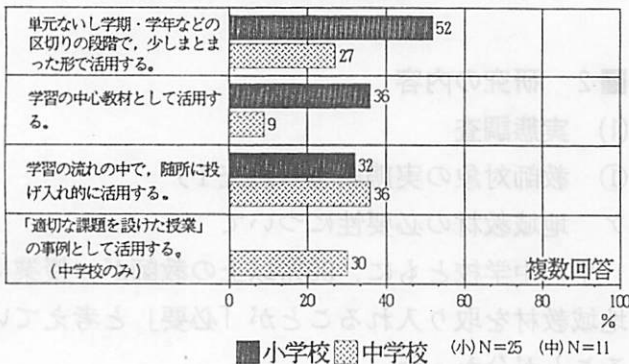


図2 地域教材の授業での活用法

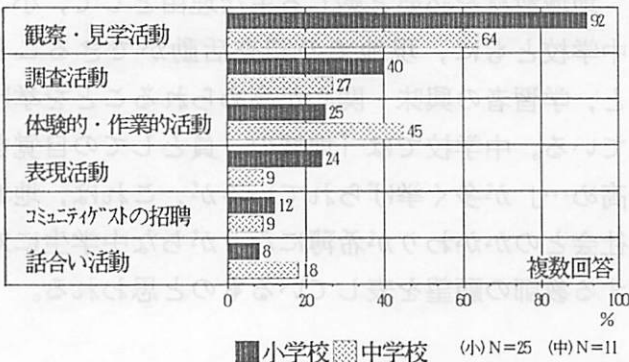


図3 学習活動の形態

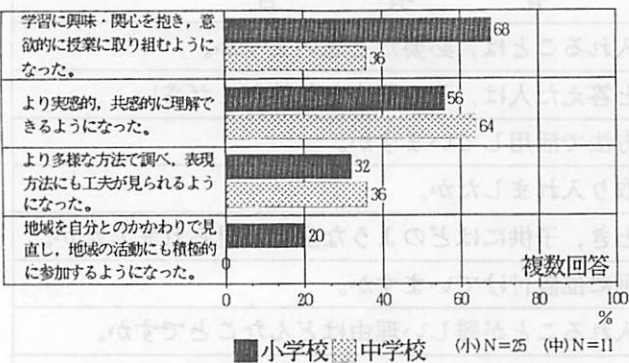


図4 地域教材による子供の変容

ウ 地域教材の活用法

図2の地域教材の活用法については、小学校と中学校の教師の意識にかなりの違いがあることが分かる。小学校では、地域教材はどちらかと言えば学習の中心的な教材ととらえられているが、中学校では、補助的な教材ととらえられている。そこで本研究では、小学校ではもちろんのこと、中学校でも「適切な課題を設けて行う授業」の一つの展開例として、地域教材を学習の中心教材として扱った授業実践を試みた。

エ 学習活動の形態

小・中学校ともに観察・見学活動を学習に取り入れていると答えた人が最も多かった。これらの活動は、学習事項を実地に検証できる地域教材の特性を生かした活用法と言える。しかし、その反面、表現活動と話し合い活動を答えた人は少なく、観察・見学後の活動があまり行われていないことが分かった。

オ 子供の変容

小学校では情意面での向上が、中学校では実感的・共感的理解が多く挙げられた。教師は、地域学習を行うことで、子供の社会科への学習意欲が増し、理解が深まると考えていることが分かる。しかし、中学校では、「地域を自分とのかかわりで…」は皆無であり、実践的態度を養うまでには至っていないと考えていることも分かった。

カ 年間指導計画への位置付け

小・中学校ともに地域教材を年間指導計画に位置付けているのは約半数であることが分かった。今後はきちんとした位置付けをしていく努力が必要であろう。

キ 地域教材を取り入れる上での課題

授業に地域教材を取り入れることが難しい理由として、小・中学校ともに多いのは、教材化に時間がかかるという点である。地域教材を普及させていくためには、この問題の解決が必要であろう。また、中学校では他の一般的な教材の指導に追われ、とても地域教材まで手が回らないという回答

表2 地域教材に対する児童生徒の意識調査（調査2）

調査の観点	調査項目
地域についての学習への意欲	ア 自分たちの住んでいる身近な地域についての学習をしたいですか。
	イ アで「とても」か「少し」と答えた人は、なぜですか。
	ウ アで「したくない」と答えた人はなぜですか。その理由を書いてください。
身近な地域の学習の楽しさ	エ 身近な地域(人物)を取り上げた授業で楽しかったのは、どんなときですか。
子供の変容	オ 身近な地域(人物)を学習してから、あなたはどのように変わりましたか。

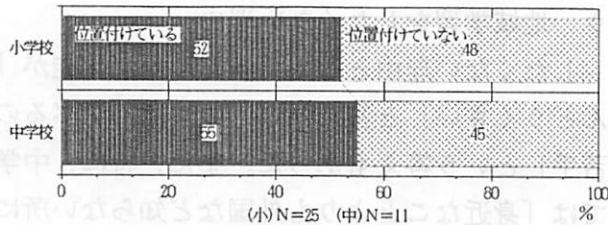


図5 地域教材の年間指導計画への位置付け

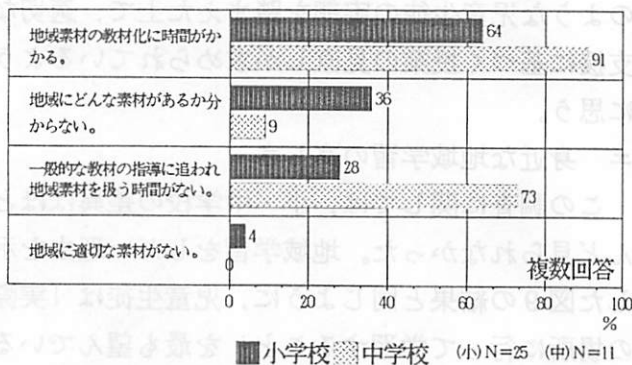


図6 地域教材を取り入れる上での課題

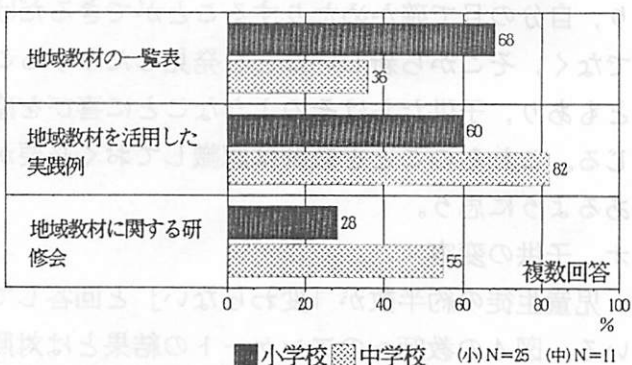


図7 地域教材を活用する上で望むこと

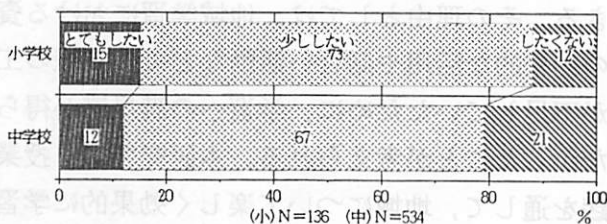


図8 地域についての学習への意欲

が多かった。しかし、地域教材には特定の地域だけでなく、他の地域の理解を助け深めていくという特性があることを踏まえ、3年間を見通した指導計画を練っていくことが求められる。

ク 地域教材を活用する上で望むこと

地域教材を授業に取り入れる際の困難な点を解消するものとして、地域教材の一覧表や実践例を求める声は大きい。それ以外には、各種機関との協力による地域教材の掘りおこしや共同研究などが要望として出された。

② 児童生徒対象の実態調査（調査2）

ア 地域学習への意欲

教師へのアンケートでは、地域学習について90%以上が必要と答えているが、児童生徒は約70%が「少し」と答え、「とても」したいは10数%に過ぎず、教師の意識とのずれが見られた。また、中学校では21%の生徒が「したくない」と答えている点も見逃せない。

教師は、地域教材によって児童生徒の学習意欲が高まることを期待しているが、必ずしもそうではないことが分かる。このことは、単に地域教材を扱えば児童生徒の興味・関心が高まるわけではないことを示している。地域教材は身近なことを扱うので、児童生徒の意欲や関心を高められるという特性もあるが、この有効性をさらに高めるためには、学習方法等の吟味やそれぞれの地域教材に応じた支援の工夫が必要となってくる。本研究では、このような児童生徒の実態を踏まえた上で授業を実践していきたいと考えた。

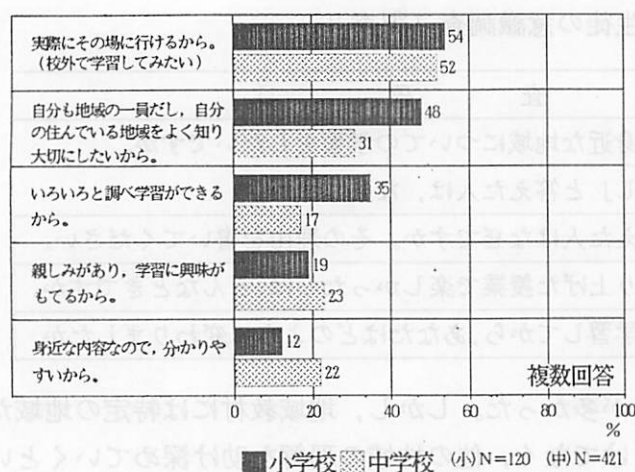


図9 地域学習をしたい理由

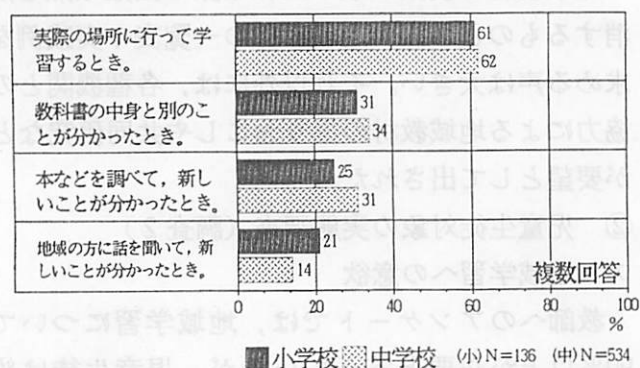


図10 どんなとき楽しいと感じるか

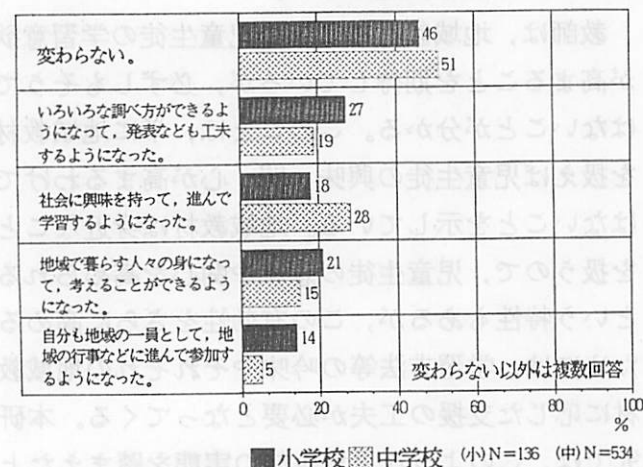


図11 地域学習による子供の変容

イ 地域学習をしたい理由

「実際にその場に行けるから地域学習をしたい」と答えた児童生徒が最も多かった。子供たちは教室から出て、校外で学習することを望んでいることが分かる。このことは、体験や見学が比較的容易にできるという地域教材の特性にも合致している。今後、地域教材を授業で活用する際には是非生かしていきたい点である。

ウ 地域学習をしたくない理由

したくない理由として、多くの児童生徒が「めんどくさい」と答えたが、中には「調べるのが苦手」という答えもあった。また、特に、中学生では「身近なことよりも外国など知らない所について学習したいから」という答えも多かった。このような児童生徒の実態を踏まえた上で、適切な支援に基づく授業の見直しが求められているように思う。

エ 身近な地域学習の楽しさ

この調査に関しては、小・中学校の差異はほとんど見られなかった。地域学習をしたい理由を示した図9の結果と同じように、児童生徒は「実際の場所に行って学習すること」を最も望んでいることが分かる。校外の学習では、実物に触れたり、自分の目で確かめたりすることができるだけでなく、そこから新しいことを発見したりすることもあり、子供たちはそのようなことに喜びを感じる。これらのことを教師は認識しておく必要があるように思う。

オ 子供の変容

児童生徒の約半数が「変わらない」と回答している。図4の教師へのアンケートの結果とは対照的で、ここからも意識のずれを読み取ることができる。その理由としては、地域学習における資料の効果的な活用や話し合い活動などでの支援の工夫が不足していたために、学習への満足感が得られなかったことが考えられる。本研究では、授業実践を通して、地域について楽しく効果的に学習する方法を探りたい。

(2) 実践授業

『仙台市立川前小学校 6年』

① 単元について

ア 単元観「戦国の世に生きた伊達政宗」

伊達政宗は、今以て郷土の偉人として人々に親しまれている身近な歴史上の人物である。政宗による仙台城や城下町づくり、新田開発や舟運の整備を目的とした北上川改修工事などの領国経営は戦国大名としての性格を顕著に示している。政宗は、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉や徳川家康とのつながりも深い。以上のことから、政宗を地域教材として取り扱い、その政策や業績を調べることは、我が国の戦国の世が統一されていくころの様子を理解させたり、江戸時代の幕藩体制確立の学習へ発展させたりするためにも適切であると考え、本単元を設定した。

イ 児童観

本学級児童の歴史に対する興味・関心は低い。そこで、各単元の導入時には、人物や文化遺産にかかわるエピソードを紹介して児童の興味・関心を高めたり、展開部でテレビ番組を活用して理解を深めたりしてきた。しかし、教師中心の指導がほとんどで、児童の問題意識を尊重し、児童が主体的に学習できる指導の工夫は不十分であった。

地域教材を扱った学習経験を問う意識調査によると、「実際にその場へ行ける」「いろいろな調べ学習ができる」「身近な内容なので分かりやすい」ことなどを理由に、楽しい学習活動として印象に残っていることが分かる。

また、本単元に関する事前調査によると「戦国の世」ということばから、日本中で戦いが繰り広げられていたというイメージを想像できてはいるものの「信長・秀吉・家康」については、名前を知っている程度で、三人が天下統一に果たした役割は、全く知らない。また、身近な歴史上の人物である「政宗」についても、隻眼であったことや騎馬像になっていることなどを知っている程度でどのように戦国の世を生き抜いたかについては、

ほとんど知識を持っていない。

ウ 指導観

地域教材は、身近な社会的事象を対象とする親しみやすさとその具体性から、児童の学習意欲を高め、主体的な学習活動を喚起できる。さらには、児童の地域を愛する心情を深め、地域の発展を願う気持ちを養うことにもつながる。

そこで、本実践では地域教材として伊達政宗を取り扱うことによって、児童の学習意欲を高める。さらに、児童の学習意欲を持続させ主体的な学習活動を活性化するために、教師による支援の工夫を行う。具体的には、一小単元一サイクルの問題解決的な学習過程の各段階で、次のような支援を工夫していく。その際には、各学習段階で児童に「学習ふりかえりカード」による自己・相互評価を行わせ、児童理解や指導の手がかりとしていきたい。

(ア) 「つかむ」段階

- ・信長、秀吉、家康たちによって戦国の世が統一されていく過程を把握させる。
- ・政宗の戦いや国づくりを概観させた後、個人の学習問題を作らせる。
- ・学習問題別グループを編成し、調べる内容や手だて、表現方法などの見通しを持たせる。

(イ) 「調べる・深める」段階

- ・文献資料や市博物館貸出資料などを活用し、児童が主体的に学習できるような場を設定する。
- ・「調べ学習ヒントカード」を活用し、学習問題の明確化及び調べる内容の焦点化を図る。
- ・第二土曜休業日を利用した市博物館などの自主見学を呼びかけ、児童の学習意欲を持続させる。
- ・調べる観点別に発表会を行い、話し合いをもとに互いに調べたことを振り返り深め合う。

(ウ) 「ひろげる」段階

- ・市博物館見学を行い、調べてきたことがらに関連のある歴史的事象を意識的に探させたり、三の丸跡に当たる市博物館周辺を歩かせたりすることによって、学習内容をより実感的に理解させる。

② 単元目標

ア 戦国の世に関心を持ち、戦国大名としての政宗の政策や業績を進んで調べることができる。

《関心・意欲・態度》

イ 鉄砲伝来による戦術の変化や検地・刀狩りなどの政策を通して、戦国の世が統一される過程を考察することができる。《社会的思考・判断力》

ウ 地図、年表などの基礎的資料を効果的に活用して、伊達政宗の政策や業績を調べるとともに、調べたことを工夫して表現することができる。

《観察・資料活用能力》

エ 伊達政宗の政策や業績を調べることを通して織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らが活躍した戦国の世の様子を理解することができる。

《知識・理解》

③ 指導計画 (P52 表3)

④ 本時の指導

ア 題材名 「仙台城と城下町づくり」

イ ねらい

伊達政宗の城づくりや城下町づくりについて調べたことを発表したり、話し合ったりすることを通して、それらに込められた政宗の願いや考えを理解することができる。

ウ 研究テーマとの関連

— 研究主題 —

子供たちが意欲を持ち主体的に取り組む
社会科学習の在り方

《地域教材の活用と支援の工夫を通して》

(7) 地域教材の活用

城という建築物は、児童の歴史学習に対する興味や関心を高める魅力を有する。しかも、仙台城の場合は、現存する堀や石垣から築城当時の様子をしのぶことができる。また、地理的にも児童の見学が可能な場所にある。

城下町仙台は児童自身が住む町である。児童

は、政宗が行った城下町づくりの工夫が、400年余りの時間を経た現在も、形を変えながら綿々と息づいていることに驚きを感じることであろう。

こうしたことから、本時における「仙台城と城下町づくり」の学習は、本単元の中でも、児童にとって最も身近な学習対象であり、児童の学習意欲を高め、主体的な学習活動を引き出すのに、ふさわしいものであると考えられる。

・政宗に関する文献資料や市博物館貸出資料を用意しておき、児童が調査活動で主体的に利用できるようにしておく。

・第二土曜休業日を利用した市博物館や仙台城址の自主見学を呼びかけ、学習意欲を持続させる。

(イ) 支援の工夫

・発表側児童に対しては、前時までに発表内容や表現方法を把握しておき、自作資料のほかに市博物館貸出資料の効果的な活用法を助言しておく。

・聞き手側児童に対しては、理解を助けるために発表内容に沿った学習プリントを配付し、発表や話し合いで分かったことを記入させる。

・学習問題別に発表と話し合いの時間を十分に設定する。

・前時までに、発表グループの発表内容や表現方法を把握しておき、話し合いを深化、拡充できるような補充資料や補助発問を準備しておく。

・吹き出しカードを用い、共感的に理解させる。

エ 指導過程 (P54 表4)

オ 評価

(7) 発表や話し合いに意欲的に参加したか。

(イ) 仙台城と城下町づくりの工夫に込められた伊達政宗の願いについて考えることができたか。

(ウ) 発表内容が自分たちの学習問題に照応し、表現方法に創意工夫が見られたか。

(エ) 攻めにくく守りやすい仙台城の特徴・立地条件や道路・用水路の整備、町割りの工夫などから、政宗の戦いに備えた城づくりや領国の商業上・交通上の拠点としての町づくりを理解することができたか。

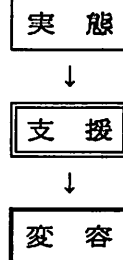
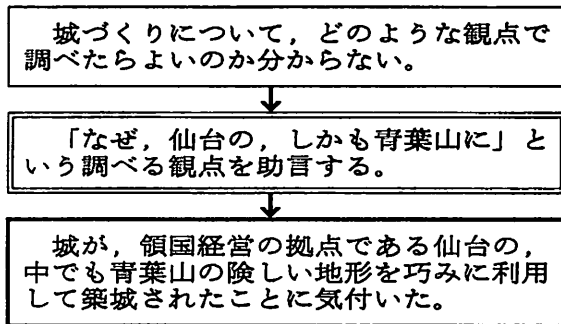
⑤ 児童の活動の様子と支援の実際

ア 前時までの発表グループに対する支援

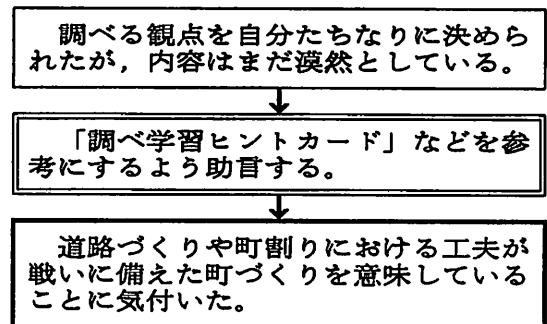
児童の問題意識を尊重した調べ学習では、調査内容や方法の決定、表現方法の工夫など学び方・まとめ方に対する教師の支援が重要である。なぜなら、これらにかかわる児童のつまずきを放置し

ア) 調査内容や方法について

【城づくりグループ】

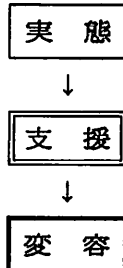
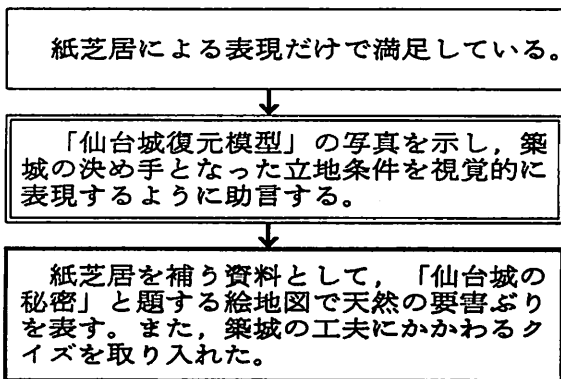


【町づくりグループ】



イ) 表現方法について

【城づくりグループ】



【町づくりグループ】

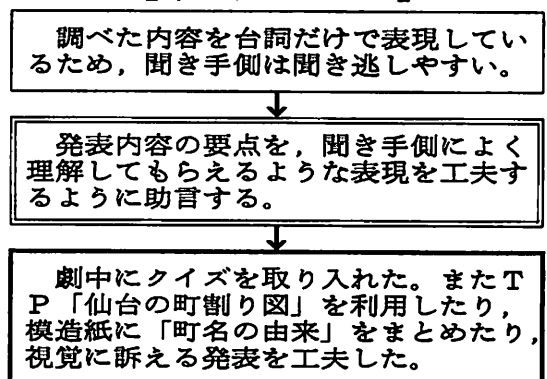


図12 前時までの発表グループに対する支援

資料1 調べ学習ヒントカード

調べ学習ヒントカード 城づくりについて
2組 番 名前 Y. S

- 岩出山城から仙台へ城を移すことにしたのはなぜか
 - ① 領地全体を治めるには、岩出山の地が不便だったから
 - ② ①（矢張り）街道から遠く離れている
 - ③ 領地全体から見ると、あまりにも（北）の方にかたよっているの、もっと（中央）へ城を移したかった
- 仙台の跡に青葉山に城を築いたのはなぜか
 - ① （青葉）の地であった
 - ② 西と南と北の三方は、人馬も通行困難な（山が）続き
 - ③ 南には15メートルの高さをもつ断崖絶壁の（岩の壁）
 - ④ 北には深い（谷）
 - ⑤ 東には（荒瀬）川が流れていた
 - ⑥ 発展の可能性が十分にあった

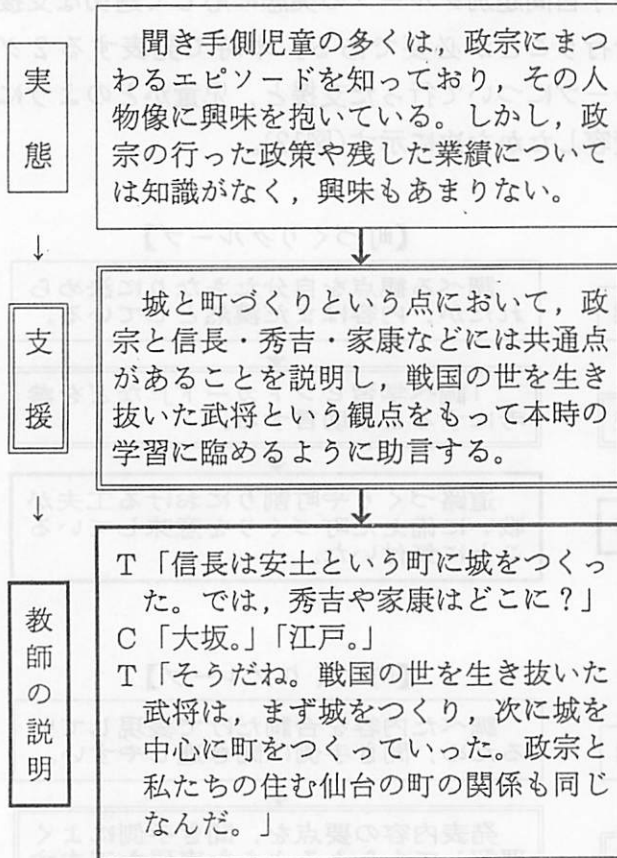
仙台は、領内の（中心地）に位置し、（奥州）街道が通り、広い（土地）平野が太平洋まで広がっていた

調べ学習ヒントカード 城下町づくりについて
2組 番 名前 H. S

- そのころの仙台は、どんな様子でしたか
 - ① ところどころに人家があるだけで、まわり一帯は（雑木林）に囲まれ、さびしい（荒）地だった。
 - ② そのころ仙台が「千体」と呼ばれていたのはなぜですか
（このあたりは谷地や、湿地が多く、石で作られ千体の仏像があった）から。
- 城下町づくりは、どのような手順でおこなわれましたか
 - ① まず道路づくりから始め、城下町の中央に（奥州）街道を取り入れ、これを町の交通の要所にした。現在の国道4号線は、この道とだいたい同じである。
 - ② この城下町の中での場所を何といましたか。（芭蕉の辻）
 - ③ 次に、武士や町人の住むところを決め、城のすぐ近くには、身分の高い重臣たち、新しく作った（奥州）街道の両側には（町人）を、城下町のはずれの周辺には（神社）を配置した。

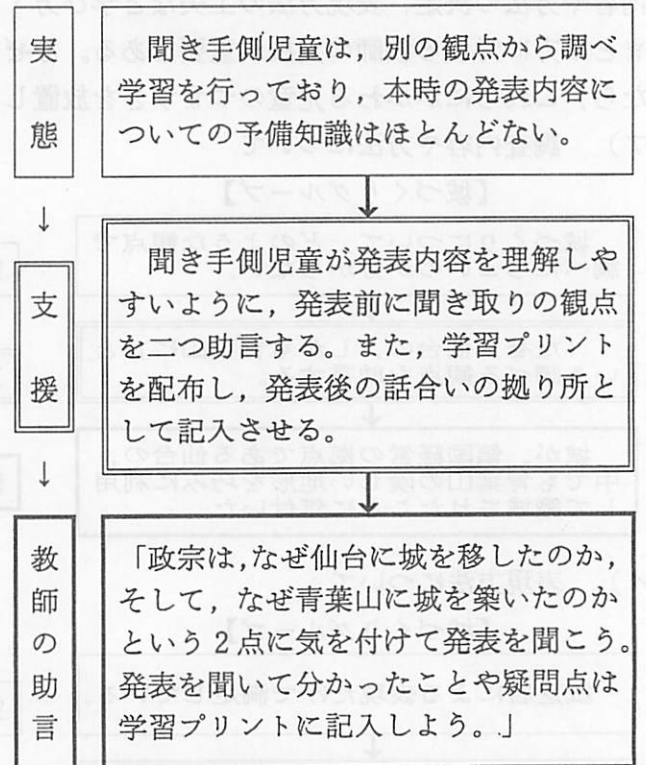
イ 本時の学習における児童の様子と支援の実際

(ア) 指導過程1 学習内容の確認



(イ) 指導過程2 調べたことの発表と話し合い

ア) 城づくり《発表形態・紙芝居、絵地図》



資料2 本時の学習プリント

1. なぜ仙台に？

徳川家康に味方した関ヶ原の戦いで手がらをたてた政宗は、家康のゆるしをもらって、城を岩出山から仙台へ移すことにしました。

	岩出山 領地内の位置	岩出山 奥州街道からのきより
岩出山	北にかたよっている。	遠い。
仙台	仙台市の中央に位置している。	は、こゝに近い。

↓

① 領地を(治める)のにつごうがよい！

2. なぜ青葉山に？

地形が [とてもけわしい]	① 東側(かいふと広き河川)
	② 南側(深い谷(竜ノ口))
	③ 西側(山続き)

||

① 敵は攻め(にくく)、味方は守り(ぶすい)！



写真1 政宗の城づくりについて発表する児童
【発表側児童の様子】

やや緊張気味に発表を始める。女子3名が交互に紙芝居を読み、男子1名は絵地図を指し示す。紙芝居終了後、発表内容にかかわるクイズを出題し始める。聞き手側児童が興味を示す姿を目にすると表情も和らぎ、参観に来ていた教師たちを指名して発言を求めるなど発表を楽しんだ。



写真2 クイズに挙手する児童

【聞き手側児童の様子】

初めて耳にする内容がほとんどであるため、興味津々といった表情で聞き入る姿が目立った。特に、クイズには意欲を示して活発な発言が続き、正解の発表に一喜一憂する児童の姿が見られた。
イ) 町づくり《発表形態・劇》

支援

「城づくり」と同様、聞き取りの観点を助言し、学習プリントを活用する。



写真3 政宗の町づくりについて発表する児童
【発表側児童の様子】

男子2名が自作のかつらと刀を身に付け政宗と家来に扮する。ユーモアを交えた台詞まわしや身振り手振りを工夫し、聞き手側児童の興味・関心を集めた。女子5名はナレーター役を務め、町割りの工夫や今に残る町名の由来を市博物館貸出資料のTPを活用して説明した。劇中でクイズを出題し、聞き手側児童の注意を喚起し盛り上がる。

【抽出児の反応】

本時では、抽出児3名を選び授業中の反応を調べた。児童の特徴と目立った動きを次に示す。

	N. S男	H. T子	T. S男
児童の特徴	思考・判断力、知識・理解共優れる。関心・意欲・態度は普通。	思考・判断力は乏しいが、調査や表現では地道な活動を続けた。	思考・判断力は高いが、調べ学習がうまくいかず、意欲が低下。
授業中の様子	授業に集中して取り組む。教師の質問に素早く反応する。数多く発表した。	発表にうなずき、驚きの表情を見せる。クイズに真っ先に反応して挙手。	発表に興味を示し、熱心にメモを取る。挙手も多く、発言も的を射ていた。

資料3 本時の学習プリント「町づくり」

2. 町割りの工夫

〔武士〕が
〔町人〕を
守る

城の近く〔身分の高い武士〕
町の中心部〔町人、職人〕
町の周辺〔武士〕
町はずれ〔寺や足軽〕

||

①〔戦い〕に備えている!

資料4 本時の「吹き出しカード」

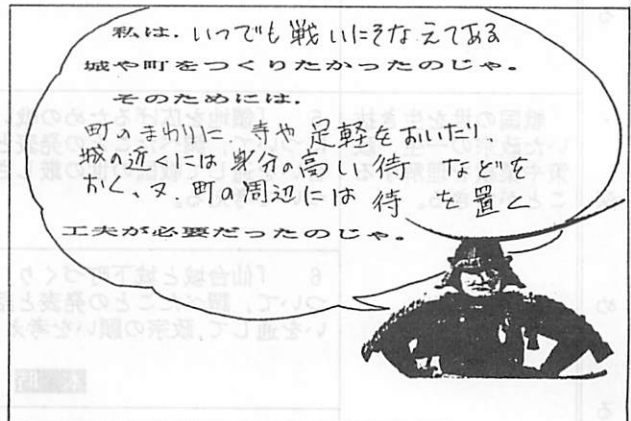


表3 指導計画 (12時間扱い)

段階	目 標	主な学習活動と内容	○ …… 支 援 【 】 …… 主な資料
つ	戦国の世が、信長・秀吉・家康ら三人の武将によって統一されていく過程を理解することができる。	1 三人の武将が、天下統一に果たした役割を、戦いや政策を通して理解する。 【信長】 長篠の戦い、安土城、楽市楽座 【秀吉】 検地と刀狩、大坂城、朝鮮出兵 【秀吉】 関ヶ原の戦い、江戸幕府②	○図から、応仁の乱後幕府の力が弱まり、全国各地に有力な戦国大名が乱立した時代背景に気付かせる。 【図】 主な戦国大名 ○狂歌の解釈を通して、三人の武将が天下統一に果たした役割に興味・関心を持たせる。 【狂歌】 「天下餅の歌」 ○ワークテストを児童一人一人の予習材料として扱うことを通して、戦国の世が統一される過程に対する理解を支援する。 ○16mm映画の視聴を通して、個々の児童が調べた学習内容を、学級全体に共通なものへと発展させる。 【16mm映画】 「信長・秀吉・家康」
か む 4	自分の問題意識に基づく学習問題を作り、追究の手だてや表現方法について見通しを持つことができる。	2 共通の学習問題に沿って個人の学習問題を作る。 【共通の学習問題】 政宗の一生や国づくりについて調べよう。 ①	○政宗が作った漢詩や肖像画にまつわる逸話をもとに、政宗という人物に対する興味・関心を高める。 【写真】 伊達政宗画像 ○VTRの視聴後、学習プリントに分かったことや疑問点などをまとめさせ、問題意識を高める。 【VTR】 「伊達政宗」 ○個々の問題意識を尊重して学習問題を作らせ、調べ学習に対する意欲を高める。また、児童に資料の収集も呼びかけ、興味・関心を持続化させる。
		3 個人の学習問題をもとに学習問題別グループを作り、追究の見通しを持つ。 【予想される観点】 ・領地を広げる戦い ・仙台城と城下町づくり ・地域に残る業績 など ①	○事前に児童一人一人の学習問題を把握しておき、学習問題の種類分けに向けて見通しを持っておく。 ○個人の学習問題を発表させながら種類分けを行い、児童に自分の調べる観点を明確に意識させる。 ○観点ごとに学習問題別グループを編成し、調べる内容や手だて、表現方法について話し合わせ、調べ学習を支援する。 ○第二土曜休業日を利用しての市博物館・仙台城址などの見学を呼びかける。
調 べ る ・ 深 め る	自分たちの学習問題を意欲的かつ協力的に調べ、表現方法を工夫してまとめることができる。	4 自分たちのグループの学習問題に沿って調べ、表現を工夫してまとめ、発表に向けての準備を行う。 ③	○児童が収集した資料を補充する資料を準備し、児童の要望や必要に応じて与えるようにする。 【読み物】 伊達政宗読本、宮城の歴史 ○視聴覚的な市博物館貸出資料を準備し、児童が主体的に活用できるような場を設定する。 【図】 政宗の領地 【写真】 仙台城下図屏風他 ○追究が行き詰まったときには、「調べ学習ヒントカード」を与え、調べる観点を意識させるとともに、ねらいに沿った調べ学習ができるよう支援する。 ○様々な表現方法を紹介し、聞き手に分かりやすい発表内容のまとめ方についても助言する。
	戦国の世を生き抜いた政宗の一生、政策や業績を理解することができる。	5 「領地を広げるための戦い」について、調べたことの発表と話し合いを通して戦国の世の厳しさについて考える。 ①	○発表内容に見合う補充資料や補助発問を用いて戦国の世の厳しさを理解させ、命がけの戦いを繰り返す苦勞、天下統一の夢を捨て秀吉や家康に従う政宗の無念さについて気付かせる。 【図】 居城の変遷 【写真】 大坂夏の陣
		6 「仙台城と城下町づくり」について、調べたことの発表と話し合いを通して、政宗の願いを考える。 本 時 ①	○発表内容に見合う補充資料や補助発問を用いて、仙台城の立地条件や道路・町割りの工夫を理解させ、政宗が戦いに備えた城や町づくりを目指したことに気付かせる。 【T P】 仙台城復元模型、仙台城下の町割り図

資料5 学習ふりかえりカード

評価の重点項目			
関心・意欲・態度	思考・判断	観察・資料活用 の技能・表現	知識・理解
戦国の世や信長・秀吉・家康ら三人の武将に関心を持つ。 《行動観察》 《学習ふりかえりカード》			戦国の世が信長・秀吉・家康ら三人の武将によって統一されていく過程が分かる。 《ワークテスト》 《発言》
政宗という人物に興味を持ち、その一生や国づくりを調べる意欲を持つ。 《行動観察》 《学習ふりかえりカード》	自分なりの学習問題を考える。 《学習プリント》		
	自分の学習問題が、どの観点に当てはまるか考える。 《行動観察》 《発言》	調べる手だてや表現方法を決定する。 《ノート》	
自分たちの学習問題を解決するために資料を集めたり調べようとしたりする。 《行動観察》 《学習ふりかえりカード》		調べて分かったことを自分の発想を生かして表現する。 《自作資料》	
発表や話し合いに進んで参加する。 《行動観察》 《発言》			戦国の世の厳しさと政宗の苦勞が分かる。 《発言》
同上			政宗の城や町づくりの工夫が分かる。《吹き出し》

【6年社会科】戦国の世に生きた伊達政宗

学習ふりかえりカード 表の1

2組 番 名前 ()

これはテストではありません。これまでの自分の学習への取り組みをふりかえり、次の学習への目標を持つためのものです。質問文をよく読み、答えの中からことばを一つ選んで○で囲みましょう。また、□の後に書いてある資料があなたの学習に役立ったかどうかを、□の中に○、○、×の記号で答えてください。
(○……とても役立った、○……少しは役立った、×……役に立たなかった)

- 信長・秀吉・家康について、調べてみたいと思いましたか。
(強く思った ・ 少しは思った ・ 思わなかった)
□ 「天下もちの歌」……………□
 - 三人の武将が天下を統一していく様子が分かりましたか。
(よく分かった ・ 少しは分かった ・ 分からなかった)
□ ワークシート……………□
□ 映画「信長・秀吉・家康」……………□
 - 政宗について、調べてみたいと思いましたか。
(強く思った ・ 少しは思った ・ 思わなかった)
□ 政宗の作った横断と肖像画……………□
 - 政宗について、自分が調べてみたい問題を考えることができましたか。
(よくできた ・ できた ・ できなかった)
□ ビデオ「伊達政宗」……………□
 - 自分の問題が、どんな種類に分けられるかを考えることができましたか。
(よくできた ・ ふつう ・ できなかった)
 - 自分やグループ問題の内容を深めたり、調べ方や発表の仕方考えることができましたか。
(よくできた ・ できた ・ できなかった)
7. 6を話し合.たとき がんばっていた人は、だれですか?
()

【6年社会科】戦国の世に生きた伊達政宗

学習ふりかえりカード 表の2

2組 番 名前 ()

これはテストではありません。これまでの自分の学習への取り組みをふりかえり、次の学習への目標を持つためのものです。質問文をよく読み、答えの中からことばを一つ選んで○で囲みましょう。

- 政宗について、楽しく調べたり、発表したり、話し合ったりできましたか。
(よくできた ・ 少しはできた ・ できなかった)
- 自分やグループの問題についていろいろ考え、自分なりの答えを出すことができましたか。
(よくできた ・ 少しはできた ・ できなかった)
- 自分やグループの問題を調べるとき、いろいろな資料を工夫して活用することができましたか。
(よくできた ・ 少しはできた ・ できなかった)
- 自分やグループの問題について調べたことをまとめるとき、関心人たちに分かりやすい発表のし方を工夫することができましたか。
(よくできた ・ 少しはできた ・ できなかった)
- 自分や他のグループが調べたことを、おたがいに発表し合ったり話し合ったりして、政宗の一生や国づくりの様子が分かりましたか。
(よく分かった ・ 少しは分かった ・ 分からなかった)
- グループの問題を調べてまとめたり、発表したりしたとき、グループの中で一番がんばっていた人はだれですか。

()

6		(7)「地域に残る業績」について、調べたことの発表と話し合いを通して、政宗が今以て郷土の誇りとして親しまれている理由について考える。 ①	○発表内容に見合う補充資料や補助発問を用いて、新田の開発や舟運の整備を目的とした北上川改修工事、支倉常長のローマ派遣、大崎八幡神社や瑞巖寺の建立などを理解させ、政宗が豊かな国づくりに貢献したことに気付かせる。 【T P】石巻港図絵馬【写真】支倉常長像
ひろげる 2	見学を通して学習内容を振り返り、新たな学習意欲を持つことができる。	(8)市博物館と仙台城址を見学する。 ②	○校外学習として市博物館と仙台城址を見学し、自分たちが調べてきた内容に関連する歴史的な事象を具体的にとらえさせることによって、新たな問題意識を高める。

表4 指導過程

具体目標	学習内容と期待される児童の活動	主 な 資 料
本時の学習に意欲的に参加することができる。 仙台城が、領地支配を考慮し、背葉山の険しい地形を巧みに利用してつくられたことを理解することができる。 仙台的城下町が戦いに備え、道路づくりや町割りを工夫してつくられたことを理解することができる。 仙台城や城下町づくりに込められた政宗の願いを理解することができる。	1. 本時の学習内容の確認 政宗の仙台城と城下町づくりについて調べたことをもとに考えよう。 2. 調べたことの発表と話し合い (1)仙台城づくりについて ①仙台に城を移した理由 ・領地支配に好都合（中央に位置） ②背葉山に築城した理由 ・天然の要害（竜ノ口溪谷、広瀬川と断崖） 仙台城の特徴 — 天守閣がない — 石垣が少ない — 堀が二つしかない ・ろう城時の飲料水の確保（地下水の利用） (2)城下町づくりについて ①道路の工夫 ・大手門から伸びる大町通りと奥州街道の交差点「芭蕉の辻」（商業と交通の中心） ・真っすぐにせず横丁が多い（城への敵からの攻撃を防ぐ） ②町割りの工夫 武士と町人の居住場所の区別（丁と町） — 城近く — 家老などの上級武士 — 町の中心 — 町人（商人や職人） — 町人町の周辺 — 中級武士 — 町はずれ — 足軽など下級武士 — 寺社 3. 本時の学習のまとめ 発表や話し合いから明らかになった、政宗の仙台城や城下町づくりにおける工夫を確認し合い、吹き出しカードにまとめる。	図…予想される児童自作資料例 図…教師が提示する資料 図…市博物館貸出資料 図紙芝居「政宗の仙台城づくり」 図T P「仙台城復元模型図」(例) 図プリント「仙台城復原図」(例) 図クイズ「仙台城の秘密」 図劇「政宗の仙台的町づくり」 図写真・T P「芭蕉の辻」(例) 図写真「仙台領奥州街道絵図」(例) 図クイズ「町づくりの秘密」 図T P「仙台城下の町割り図」(例) 図プリント「仙台城下の町割り図」(例) 図吹き出し「城や町づくりにこめられた政宗の願い」

同 上		政宗の目指した豊かな国づくりが分かる。 《ノート》
目的を持って見学する。 《行動観察》	「天然の要害」を実感する。 《行動観察》	

○ …… 支 援 ・ 評 価

○発表と話し合いの司会は教師が務める。事前に発表内容を把握し、話し合いを深める資料や発問を準備しておく。発表は、児童自作資料のほかに市博物館貸出資料も活用させる。

仙台城と仙台の町という身近な社会事象に興味を持ち意欲的に学習に参加できたか。《行動観察・発言》

○聞き手側児童に「仙台城復原図」を示した学習プリントを配布し、発表や話し合いで分かったことを記入させ、仙台城が青葉山の険しい地形を巧みに利用してつくられた理由を考えさせる手がかりとする。

発表と話し合いを通じて、攻めにくく守りやすい仙台城の立地条件を理解できたか。《学習プリント・発言》

○聞き手側児童に、「仙台の町割り図」を示した学習プリントを配布し、発表や話し合いで分かったことを記入させ、武士と町人の居住場所が区別されている理由を考えさせる手がかりとする。

○「芭蕉の辻」が仙台城から東進する大町通りと、道筋を変えた奥州街道との交差点であることを補足し、交通上の要所であることに気付かせる。

○大町通りと奥州街道沿いに町人町が集まっていることに注意させ、商業の盛んな地域であることに気付かせる。

○町人町を取り囲むように武士の町が配置してあることに注意させ、戦いに備えたものであることに気付かせる。

○足軽が戦いの先兵となることや、寺社の広い敷地が兵を隠す砦の役割を果たし、戦場にもなることを補足する。

発表と話し合いを通して、戦いに備えた道路づくりや町割りの工夫を理解できたが。《学習プリント・発言》

○政宗の願いを共感的に理解させる。

戦いに備えた城や城下町づくりの工夫に気づき、政宗の願いを共感的に理解できたか。《吹き出しカード》

資料6 学習プリント

⑤ 政宗の城づくり

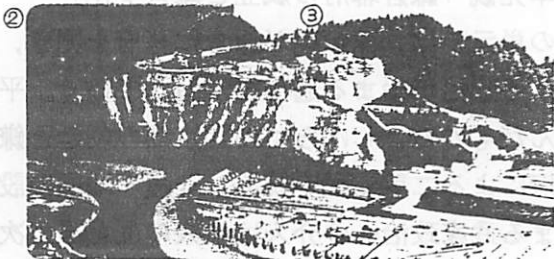


図1 仙台城復元模型

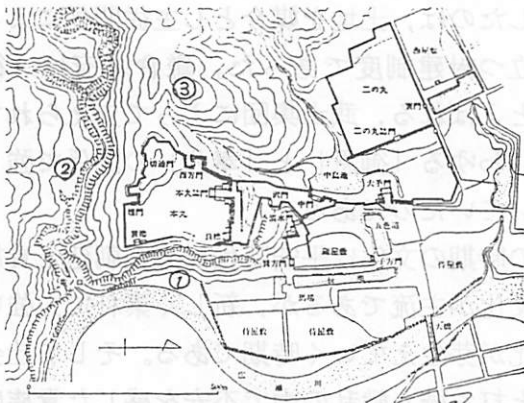


図2 仙台城復原図（正保絵図による作図）

⑥ 政宗の町づくり

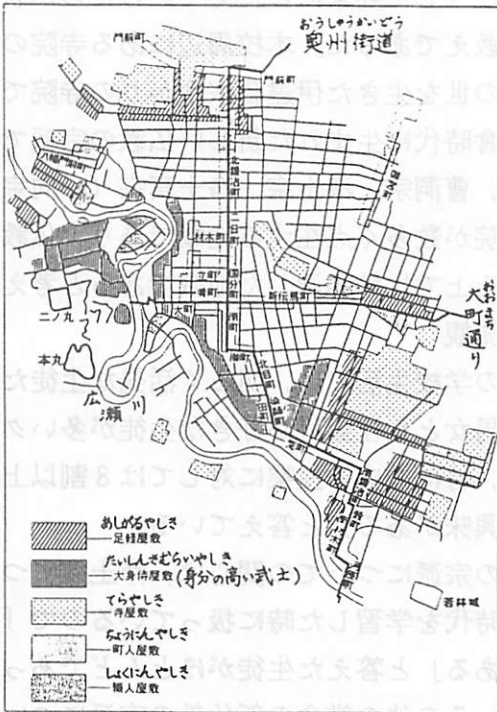


図3 仙台城下の町割り

『仙台市立三条中学校 1年』

① 単元について

ア 単元観「鎌倉幕府の成立と鎌倉文化」

この単元では、源頼朝が鎌倉に幕府を開き、武士による政治が始まる過程を学習していく。平氏は滅んだものの、しばらくの間京都の朝廷と鎌倉の幕府による二重支配が続く。守護・地頭の設置に始まる武家政治への介入は承久の乱を経て次第に武家政治を発展させていった。この武家政治を維持したのは、土地を媒介とし主従関係によって成り立つ封建制度であった。鎌倉幕府は「御家人」とよばれる、武士集団によって支えられていた。いわゆる「御恩」と「奉公」の関係で強く結び付いていたのである。

この時期の文化は平安時代以来の朝廷と貴族中心の文化が主流であるが、新しく素朴で力強い武家文化が芽生えていく時期である。そして社会の動揺と打ち続く戦乱の中で不安を感じた貴族は心のよりどころとなる教えを求め、武士や庶民は自分の運命を切り開いていくための教えを求めた。人々のこうした要求にこたえていったのが新しい仏教の教えであった。本校周辺にある寺院の多くは戦国の世を生きた伊達政宗ゆかりの寺院である。特に鎌倉時代に生まれた新しい仏教の宗派である臨済宗、曹洞宗、浄土宗、浄土真宗（一向宗）などの寺院が数多く点在する地域であり、仏教の学習をする上で比較的適した地域であると考えられる。

イ 生徒観

普段の学校生活では、明るく活発な生徒たちである。男女とも社会科が好きな生徒が多いクラスであり、特に歴史の授業に対しては8割以上の生徒が「興味がある」と答えている。

仏教の宗派についての関心は、浄土宗については平安時代を学習した時に扱っているので「聞いた事がある」と答えた生徒がほとんどであった。しかし、その他の鎌倉の新仏教の宗派については日蓮宗以外ほとんど聞いたことがない。

本校学区は伊達政宗公ゆかりの寺院が数多く点

在する地区であるにもかかわらず、地域の寺院に対する興味・関心がきわめて薄い事は驚きである。特に「北山五山」に対する知識はほとんどなく、なかでも北山周辺に寺院が多い理由を知っている生徒はごくわずかであった。しかし、座禅会などのような地域の行事に参加したことのある生徒は半数以上にのぼり、地域とのつながりはしっかりしているようである。また、主体的に学習をすすめたり、校外学習、体験学習に対しても非常に興味を持っている。

ウ 指導観

本単元では、源頼朝による守護・地頭の設置、鎌倉幕府の開設、北条氏による執権政治の確立という内容を学習させることにより、武家政治が確立していく過程をとらえさせたい。そして政権が貴族から武士へ移行したことで、社会や文化の面でも変化が見られたことに着目させたい。特に武家文化の芽生えである鎌倉文化が素朴で力強い感じを与える作品を生んだ時代背景に着目させ、社会の動揺と打ち続く戦乱の中で新しい仏教が芽生えた理由も追究していきたいと考える。

本校学区は戦国時代に生きた伊達政宗公ゆかりの寺院が多い。そのため、鎌倉時代に新しい仏教が芽生えてきた時代背景をより明確に押さえるためにも地域の文化財を最大限に利用させたい。そのため「適切な課題を設けた学習」では「仏教と北山の寺院」を設定し、鎌倉仏教について特色ある地域に住む生徒に、より深めた学習を行うことができると思う。

(ア) 「つかむ」段階

仙台北山の寺院に関心を持ち、各宗派の特色についてグループを編成し、調べる内容・方法などの見通しを持たせる。

(イ) 「調べる・深める」段階

各寺院に聞き取り調査に行くなど、生徒が主体的に学習できるような場を設定する。

(ウ) 「ひろげる」段階

当時の文化面の作品・建築・絵画を学習する。

② 小単元の日標

ア 新しい仏教の時代背景を、仙台市北山地区の寺院を調べることにより理解することができる。また、地域の文化財への関心を深める。

《関心・意欲・態度》

イ 鎌倉時代の新仏教の特色と、それが生まれた理由を考えることができる。文化について時代背景やその担い手をおさえながら理解することができる。

《社会的思考・判断》

ウ 地図、年表、地域にある文化財を効果的に活用し、鎌倉時代の新仏教についての特色を調べるとともに、調べたことを工夫して表現することができる。

《資料活用の技能・表現》

エ 平氏政権が滅亡した経緯をおさえ、鎌倉幕府成立の過程、幕府のしくみや武家政治の特色などを理解する。

《知識・理解》

オ 封建制度のしくみを土地支配や主従関係を中心に理解する。また、源氏の断絶以降執権政治確立までの経過について理解する。

《知識・理解》

カ 武士が荘園に所領を広げていく過程と、農業技術が進歩し、手工業や商業が発達していったことを理解する。

《知識・理解》

③ 指導計画（10時間扱い）

ア 平氏の滅亡と鎌倉幕府の始まり …………… 1

イ 封建制度と執権政治 …………… 1

ウ 武士の生活と農民の生活 …………… 1

エ 新仏教の教えと文化の新しい動き …………… 1

オ 適切な課題を設けた学習

「仏教と北山の寺院」…………… 6

（P58、表5）

④ 本時の指導

ア 題材名「仏教と北山の寺院」

イ ねらい

提示された資料や北山地区の寺院に行き調べてきたことを発表し合い、宗派の違いによって様々な相違があることに気づき、さらに民衆の中に浸透していった理由を考える。

ウ 研究テーマとの関連

— 研 究 主 題 —

子供たちが意欲を持ち主体的に取り組む
社会科学習の在り方

《地域教材の活用と支援の工夫を通して》

(ア) 地域教材の活用の工夫

三条中学校周辺にある寺院を生徒が調べることによって、生徒一人一人が主体的に活動できるようにする。

(イ) 支援の工夫

・学習課題別に発表と質問、話合いの時間を十分に設定しておく。

・事前に各グループの発表内容や発表方法を押さえておき、一覧表にまとめておくことによって、発表を聞く側の意欲を高めておく。

・周辺の寺院を直接訪問し質問を生徒自身で行うが、質問内容については事前にグループと教師が話し合いまとめる。

エ 準備物

OHP、ビデオテープ、ビデオデッキ

TPシート、北山マップ、プリント

オ 指導過程（P60、表6）

カ 評価

(ア) 地域の北山の寺院を調べることによって鎌倉時代に生まれた新仏教の様々な特色、それが生まれてきた理由をとらえることができたか。

(イ) 生徒一人一人が鎌倉時代の新しい仏教について意欲を持って調べようとし、発表や話合いに意欲的に参加することができたか。

(ウ) 三条中学校周辺にある寺院を生徒が調べることによって、生徒一人一人が主体的に活動することができたか。

(エ) 三条中学校周辺の寺院を直接訪問し質問を生徒自身で行うことができたか。そしてそれまでの質問内容についても十分事前に各グループと教師が話し合いまとめることができたか。

表5 適切な課題を設けた学習「仏教と北山の寺院」の指導と評価計画（6時間扱い）

段階	目 標	学 習 活 動	支 援
つかむ①	○仙台北山の寺院に関心を持ち調べようとする意欲を持つ。	1 新しい仏教(鎌倉仏教)の表を作成し、当時の世の中の情勢をとらえる。(鎌倉時代) ○学習課題をつかむ。 新しい仏教が民衆の間に広まっていった理由を考えてみよう。 ○学習課題を解決するためにどんなことをどんな方法で調べていったらいいか考え、調べる計画を立てる。 ①	・新しく起こった仏教について調べてきたことや北山の寺院のようす、夏休みの座禅会に参加した生徒による感想をもとにした話合いから、さらに、念仏、題目を実際に唱えてみることにより、これから調べていこうとする意欲を喚起したい。 ・なぜ北山地区に寺院が多く集まっているのかという素朴な疑問をもとに「調べてみたい」という興味・関心を寺院に向けさせる。 ・「簡単で分かりやすく、実行しやすい教えであったから、広く人々の心をとらえて急速に広まったのではないか」という仮説をもとにそれを立証する手だてを考える。 ・学習課題を焦点化・具現化させるために予想をたて、自分の学習課題をつかむ。さらに、調べる内容や方法を話し合い、見通しをもって学習が進められるよう助言する。
調べる・深める④	○学習課題を解決するための資料収集を行う。	2 学習課題に沿って調べる。 ・禅宗系の寺院について ・浄土宗系の寺院について ①	・聞き取り調査や集めた資料から、必要な事実事象を選択できるよう助言していく。 ・同じ学習課題を持つ生徒がグループを組み、学習が進められるよう助言する。 ・収集した資料を発表し合い学習課題に沿うように整理する。さらに、工夫をこらして表現できるよう助言し学習効果を一層高めたい。
	○集めた資料、聞き取り調査などをもとに発表するための表現方法を考える。	○各寺院に行き、グループ毎、聞き取り調査を行う。 ・禅宗系の中の臨済宗、曹洞宗について知る。 (1)開祖について (2)なぜ広まっていったのか、その理由。 (3)座禅について、等。 ・浄土宗、浄土真宗(一向宗)について知る。 (1)開祖について (2)なぜ広まっていったのか、その理由、等。 ②	・北山五山の代表的な寺院、東昌寺、資福寺、光明寺、浄土宗の大願寺などへの聞き取り調査を行わせる。質問内容なども吟味しビデオなどの教育機器を使用させるなど工夫をして調べるよう支援する。 ・身近な地域にも各宗派の代表的な寺院があることに気付かせる。 ・住職・僧侶など実際に寺院で働いている人々にインタビューなどをすることにより、できるだけ体験的に学習させるようにする。 ・北山地区の代表的な寺院のほとんどは、伊達政宗が仙台に城を構える際の北の砦として戦略的な政策があった事に気付かせる。 ・北山の寺院を調べたことから鎌倉仏教の本質に気付くように支援する。
	○話し合った表現方法で発表することができる。	○各グループの発表を聞く ○グループ毎の発表をもとに話し合う。 ①	・グループ毎に調べてきたことを発表させ、各宗派の考え方の違いに気付かせる。 ・実際に教室内で座禅の実演を行い、禅宗に対する関心を高める。
ひろげる①	○当時の文化面への影響を知ることができる。	3 鎌倉時代の文化面での作品、建築物、絵画などを学習する。 ①	・文化面においても仏教の思想に基づいて作られた作品が多く鎌倉仏教と深く結び付いていることに気付かせる。

資 料	評 価 の 重 点 項 目			
	関心・意欲・態度	社会的な思考判断	観察・資料活用の技能・表現	知 識 ・ 理 解
○教師の提示する資料 ・新しい仏教の一覧表 ・座禅会に参加した生徒の感想文 ・北山周辺の地図 ・念仏「南無阿弥陀仏」 ・題目「南無妙法蓮華経」 ・グループ作り 学習方法の手順を示したプリント。	表作りを通して北山地区が鎌倉時代に起こった宗派の寺院が多いことに気づき、北山の寺院に関心をもち学習課題を持とうとする。 (行動観察)	自分なりの予想を持ち、調べる課題を考える。 (発言・ノート)		
○図書室での調べ学習中心 ・図書室の文献 ・伊達政宗ゆかりの寺院(その1 その2)等。	自分の学習課題を解決するために資料を集めようとする。 (行動観察・ノート)		調べて分かったことを自分の発想を生かして表現する。(自作資料)	
○教師の指示する資料 ・北山周辺の地図 ○予想される生徒の資料 ・ビデオ 住職へのインタビュー ・仏教で使用する道具 ・TP	自分の学習課題を解決するために資料を集めたり、調べたりしようとする。 (行動観察)			
・仏教で使用する道具 ・ビデオ ・自作資料	自分の考えを発表し、話し合いに参加しようとする。 (発言)	なぜ、その宗派が広がっていったのか考える。 (発言)	ビデオや資料などから宗派の違いを読み取る。 (発言・ノート)	同じ仏教でも宗派によって生活の仕方、考え方が違うことが分かる。 (ノート)
○教師が指示する資料 ・資料集 「東大寺南大門」 「金剛力士像」				当時の文学作品、建築物、絵画などの作品が分かる。 (ノート)

表6 指導過程

具体目標	学習活動の内容と期待される生徒の活動	主な資料
○三条中を中心とする主な寺院の分布を知ることができる。	1. 北山マップによって三条中を中心に主な寺院の分布を確認し、本時の学習内容の確認を行う。 ・北山五山、秀林寺、称念寺、大願寺、輪王寺など主な宗派の寺院の場所をTPシートによって確認する。 ・臨済宗、曹洞宗、浄土宗、浄土真宗の寺院が多く集まっている事に気付く。	(教師が提示する資料) 地図：三条中を中心とする北山地区
○「新しい仏教の教え」の一覧表をもとに発表を聞くことができる。	2. グループごとの発表を聞く。 (1) 禅宗系の寺院を調べた班の発表を聞く。(臨済宗の寺院、資福禅寺) ・修行時代の僧侶の1日の生活について ・座禅などの修行、念仏について ・「あじさい寺」と呼ばれている理由。 ・北山五山の歴史について(資福禅寺の歴史について) ・修行時代の服装、食事内容について ・開祖、栄西について ・地域とのかかわりについて(お盆、お彼岸の行事、ボランティア活動) ・臨済宗が広がっていった理由。等 (2) 実際に代表者の座禅の実演を見て、座禅の方法を学ぶ。座禅会に参加した生徒の感想も聞き、さらに修行しなければならなかった理由を考える。 ・イライラしてくる。あまり効果ない。落ち着いてくる。等 ・人々を救うためではないか。 (3) 浄土宗系の寺院を調べた班の発表を聞く。(浄土宗の大願寺、浄土真宗の称念寺の2つ) ・「念仏」について ・修行時代の僧侶の1日の生活について ・服装、食事内容について ・開祖、法然と親鸞について ・葬式、お墓との関係について ・地域とのかかわりについて(お盆、お彼岸の行事、ボランティア活動) ・浄土宗、浄土真宗が広がっていった理由。等	(予想される生徒の発表例) ○ 修行の時の食事内容 ○ 修行の時の1日の生活のようすを表した図 ○ 住職へのインタビューをしたビデオ(5分程度) ○ 発表のためのTPシート ○ 発表のための模造紙 (教師の提示する資料) ○ 「新しい仏教の教え」一覧表のプリント
○新しい仏教が広まっていった理由について、考えることができる。	(4) 念仏について、様々な抑揚をつけて唱えたり、御詠歌があったりする理由を考える。 ・仏様を敬愛しているのではないか。 ・キリスト教の賛美歌と同じ。 3. 発表したことをもとに、なぜこれらの宗派が一般大衆に受け入れられ広がっていったのか考える。 ・当時の社会の動揺、戦乱の中で生命をおびやかされ、不安を感じた。 ・心のよりどころとなる教えを広めたのではないか。 ・武士の気風に合った教えであった。 ・簡単で分かりやすく、実行しやすい教えであった。	天台宗の回向文(えこうぶん) 南無大恩教主釈迦牟尼如来 (禅宗) 南無極楽教主阿彌陀如来 (浄土宗) 南無妙法蓮華經眞淨法門 (日蓮宗) 南無高祖天台知者大師 (中国) 南無宗祖比叡伝教大師 (天台宗)
○本時の学習を自己評価表で振り返ることができる。	4. 鎌倉時代に起こった宗派の開祖のほとんどが比叡山延暦寺で若いころ修行をしていることに着目し、鎌倉時代のルーツを探ろうとする意欲を持つ。 ・天台宗の教えとは、どんなものだったのだろう。 ・それぞれの仏教の開祖についてくわしく調べてみたい。 5. 自己評価表を書くことにより、今日の授業の反省を行う。	(教師の提示する資料) ・法然の弟子が親鸞(浄土宗) ・栄西の弟子が道元(禅宗) ・比叡山延暦寺は母体寺

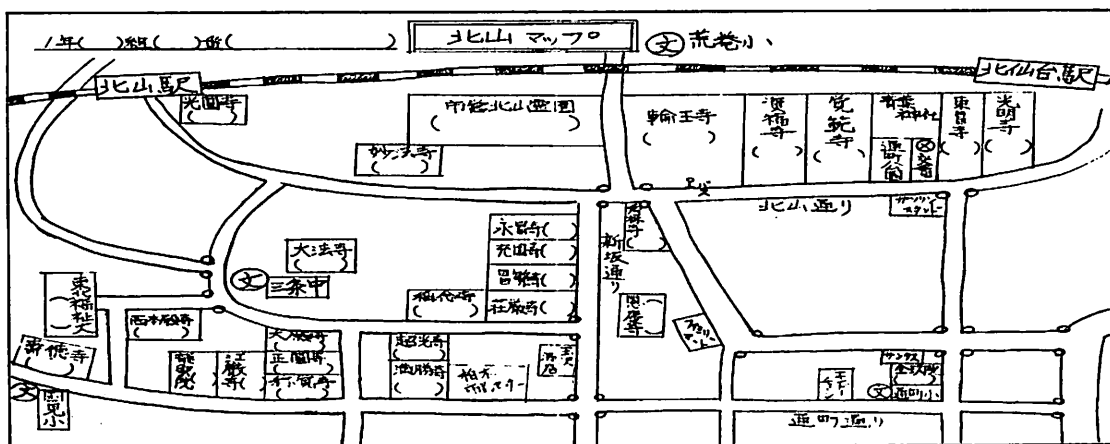


図13 北山マップ

資料 7

お寺に行つての感想

お寺に行つての感想

くわしく説明してくれてわかりやすかった。
それに何枚も資料をくれて教えてくれたのでわから
なかったことがよくわかった。
仏教はとて大きく念仏をとらえてくれた。
木魚は魚の骨だそうだが、ほろりコウの形
だった

こまかいことまでいろいろおしえていただ
いた。昨日まで分らなかったことがもの
すごくよく分かった。
木魚はおび 魚の骨でできていることが分
らなかったが、こまかい骨のつくりが分
かっていることが分かった。

感想

おしょうさんがとてもくわしく教えて
くれたので、よくわかった。
・さすがに道元の時がまたわかった。
・よくわからない言葉もあった。

感想

おしょうさんが長々とくわしく説明してもら
してもいろいろな事が分かった。
・道元は、宗教での仏法が、度々、はげしい
と説き、正伝の仏教も説いたことが分かった

支 援 ・ 評 価

- 三条中を中心に寺院の分布の様子をつかませ、できるだけ分かりやすく発表を聞くことができるよう支援する。
- 北山地区に寺院を配している理由が、伊達政宗が仙台を城下町として町づくりをした際の、北の砦としたことを確認しておく。その際、あまり深入りしないようにする。

- 同じ仏教でも宗派による考え方の違いと、類似性(共通性)の両方をとらえさせるように支援する。
- 住職からの聞き取りをする場合の注意事項として「開祖について」と「なぜ、広まっていたか。」という質問事項は必ず入れるよう支援する。

- 信教の自由の立場からあまり個人的なプライバシーまでは立ち入らないように配慮する。

- 最近話題となっている新しい宗教などに見られるような「宗教は、金もうけ主義だ。」とか「怖い」といったイメージだけは持たせないように心がけたい。

- 住職に習ってきた座禅の方法を行ってみるにより、座禅というものをより身近に感じることができるようにする。

- 座禅会での体験を実際に発表してもらうことにより、少しでも話合いが活発になるように支援する。

調べてきたことを分かりやすく発表し、発表されたことと自分が調べてきたことを比較し、意欲的に質問や話合いに参加する。(観察)

生徒および教師から提示された資料等をもとに、宗派によって考え方の違いや修行の方法の違いに気付く、それぞれの宗派が一般大衆に広まっていた理由を考える。(観察)

- 話合いがスムーズにいかない場合、鎌倉幕府が成立するまでの時代背景を思い出させ、社会の動揺、戦乱での不安が全国に及んでいたことに気付かせるよう支援する。

- 平安時代までの仏教と比べ、新しい仏教が分かりやすい内容であることを発表内容の中から確認できるよう支援する。

- 天台宗の教えが鎌倉時代に新しく起こった仏教の内容のほとんどを含んでいたことに気付かせ、仏教について深く知りたいという興味を持たせる。

- 自己評価によって、本時の授業を反省させることにより次時への学習課題を持ち、学習意欲を喚起させる。

1年(3)組()番(T・K)

宗派名を記入し、念仏、題目、座禅、それぞれについて○×で記入しなさい。

宗派名	浄土信仰			日蓮宗	禅宗		天台宗
	浄土宗	浄土真宗	時宗		臨済宗	曹洞宗	
開祖	法然	親鸞	一宗	日蓮	栄西	道元	最澄
念仏	○	○	○	×	×	×	○
題目	×	×	×	○	×	×	○
座禅	×	×	×	×	○	○	○
広まった経路	貴族・武士	武士・農民	農民・僧侶	武士・農民	武士・農民	貴族・武士	貴族

(メモ)

広がっていた理由

- ① 極楽浄土→あみかれ
- ② 簡単でわかりやすい。

図14 ワークシート

鎌倉時代の新しい仏教をまとめてみよう
(教科書を参考にまとめてみよう。) 注意、基本用語集を参考にしてもよい。

		1 年	組	番	氏 名
	宗派名	関 係	内 容	どのような人々の関心をもったのか	発表した寺院
浄土系	浄土宗				
	浄土真宗 (一向宗)				
念 仏	時 宗				
法華系 題 目	日蓮宗 (法華宗)				
禅 系	臨済宗				
	曹洞宗				

図15 予習カード

⑤ 授業中の生徒の取り組みの様子

ア 授業記録から

(ア) 発表側生徒の様子

ア)「臨済宗、資福禅寺」の発表グループ

・ 前時までの支援

調査内容や方法		表現方法
寺院に訪問した際の質問内容について、視点がはっきり見つけられず、悩んでいた。	実態	ビデオの使用は考えていたが、使用方法・内容についてグループの中で対立していた。
	↓	
「座禅」という視点を与え、それを中心に質問内容を考えるよう助言した。	支援	寺の様子や住職との話合いの様子などの映写をして、後で編集するよう助言した。
	↓	
座禅の方法、修業時代の食事内容などを中心に質問を考えることができた。	変容	自分たちがビデオに登場したり、寺の石庭の様子などよりリアルに表現していた。

・ 本時の様子と支援

臨済宗の考え方、資福禅寺の歴史について住職の方にインタビューし、それをビデオに撮り発表で使った。僧侶の修行の時の食事（うめぼし、ごはん、おしんこ）を実際に用意し、試食した。試食も生徒が行うようすすめたが、恥ずかしがり結局、教師自身が試食することになった。これは、反省点である。座禅の方法についても、生徒自身が実演。他の生徒から拍手をもらっていた。寺院を訪問する時から意欲的であり、授業の発表の方法なども自分たちで話合いをして、工夫していた。

イ)「浄土宗、大願寺」の発表グループ

・ 前時までの支援

調査内容や方法		表現方法
「仏教は座禅が必要である」という固定観念があり、座禅を行わない宗派の場合の質問内容を考えるのに戸惑いがあった。	実態	ビデオの使用が初めてであり、その使用方法について消極的だった。また、編集方法も分からなかった。
	↓	
「座禅」ではなく「念仏」に視点を当てて考えるよう助言した。	支援	寺の風景、住職とのインタビューの様子、伊達政宗の灰塚などを映写することを助言。
	↓	
念仏の方法やその内容、念仏の意味などに焦点を絞ってグループで話合いが行われた。また、木魚についても質問することが決まった。	変容	大願寺の門構えやインタビューの様子、木魚の説明の様子、法然の似顔絵など随所に工夫の跡がみられた。



写真4 座禅の実演の様子

・本時の様子と支援

浄土宗の特徴である念仏「南無阿弥陀仏」、御詠歌、そして楽器としての木魚に着目し、それらの説明を中心に発表を行った。TPシート、住職へのインタビューの様子のビデオ、木魚の種類なども紹介していた。さらに大願寺の歴史や伊達政宗の灰塚などについても調べて発表した。しかし、支援不足からか、多くの内容を調べすぎて決められた時間内に発表を終了することができなかった。住職の方が三条中学校の生徒の保護者であったこともあり、学校に対し大変協力的であり助かった。

ウ)「浄土真宗・称念寺」の発表グループ

・前時までの支援

調査内容や方法		表現方法
教科書で「悪人こそ救われる」と説いた宗教をなかなか理解することができずに戸惑っていた。	実態	住職にインタビューした内容をOHPだけで発表することを考えていたがグループ内でまとまらなかった。
	↓	
難しい内容なので、事前に図書室でもう一度調べ質問内容を考えるよう助言した。	支援	他のグループと同じようにビデオ使用をアドバイス。そのための話合いをすることを助言。
	↓	
住職とかなり綿密な打ち合わせを行い「念仏」を唱える実演をお願いし、インタビューの時の住職の服装まで吟味した。	変容	称念寺の門構えを映写。「念仏」を唱える様子を鮮やかにビデオに撮り、住職の方も袈裟を着てインタビューを行った。

・本時の様子と支援

念仏「南無阿弥陀仏」の意味、唱える時の抑揚など浄土宗との違いに着目し、発表を行った。住職の方に実際にお経をあげてもらい、それをビデオ上映していた。きらびやかな仏殿の様子がテレビの映像に映し出され、極楽浄土の様子の表現であることがリアルに生徒に伝わったように思う。住職の方がクラスの生徒の父親であったということもあり、発表した生徒も聞き手側の生徒も和やかなムードであった。

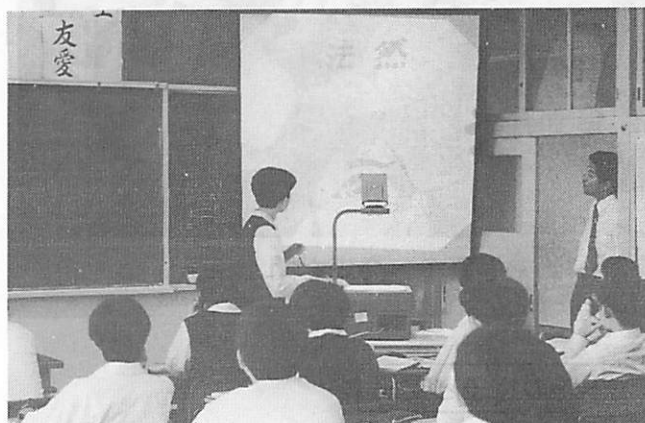


写真5 浄土宗の発表の様子



写真6 浄土真宗の発表の様子

(イ) 聞き手側生徒の様子

・前時までの支援

発表側生徒が数時間にわたって調べたり実際に寺院に訪問したりして学習してきたのに対し、聞き手側生徒は、本時で発表内容を初めて聞くことになる。そこで聞き手側生徒が理解するための支援として、鎌倉時代におこった新しい仏教を理解

するための学習プリントを用意した。しかし、発表に時間がかかりすぎたため、討論する時間が不足してしまい、うまく活用することができなかった。

本時にいたるまで毎時間、自己評価表を書かせ授業への取り組みの反省、疑問点などを確認させた。それが本人の次時への課題となり、興味・関心の持続に役立った。

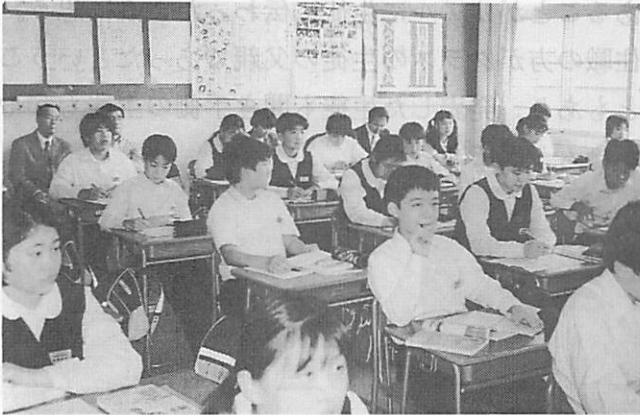


写真7 発表を聞く様子

・本時の様子と支援

資福禅寺、大願寺、称念寺の発表内容とも自分たちが住んでいる地域にある寺院であるにもかかわらず、初めて聞く内容がほとんどであったため興味を持ち真剣に聞いていた。発表内容や板書事項を参考に質問を考え、熱心に発表する生徒の姿も見られた。特にビデオに対してはめずらしい内容であったことも手伝ってか予想以上に真剣に見ていた。質問に対しても真剣に答えていた。

・授業中の抽出生徒の様子

生徒の特徴	授業中の様子
資料活用能力 知識・理解は 優れているが 関心・意欲・ 態度は普通の 生徒	授業に対しては真面目 に取り組んでいたが、 挙手はあまりなかった。 グループの発表に対し ては、真剣に聞いてい た。

YH
君

生徒の特徴	授業中の様子
WS さん 関心・意欲・ 態度が非常に ある生徒	発表の時には、発表の 補佐役を行い、授業中 も意欲的にメモを取っ ていた。
KE 君 思考・判断力 が乏しい生徒	授業に対し、積極的に 参加し、大変意欲的に がんばっていた。ビデ オ視聴の際、真剣に見 ていた。

資料8 自己評価表

自己評価表

1年()組()番 K・T

評価の内容	(1)日(月)	(12)日(月)	(14)日(月)	(18)日(月)
よくやったか?	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
グループ学習	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
積極的に論理的に話し合いに参加したか。	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
発表意を弱めず気持ちよく聞けたか。	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
集中して話を聞けたか。	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
資料をよく見たか	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
一生懸命考えたか	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
補足・質問・意見を発表できたか。	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
よく活動(参加)できたか。	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
学習内容がわかったか。	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -	++ + - - -
千ののけに四回	0 回	0 回	0 回	0 回
発表回数	0 回	0 回	0 回	0 回
今日の授業を振り返って	1. わかったこと、わからなかったこと。 2. 質問したいこと、疑問に思うこと。			

検
狩野

検
狩野

検
狩野

検
狩野

Ⅵ 研究の結果と考察

■ 1 小学校の実践から

(1) 実践授業において

① 地域教材の活用に関して

地域教材を活用する大きな意義は、実地見学や現地での資料探しが容易で、児童の学習意欲を高めやすいということである。しかし、今回の実践のように地理的な制約から、実地見学や児童による資料探しが困難な場合には、教師が収集して与えた文献資料や市博物館貸し出し資料が中心となることも考えられる。

今回の実践で扱った題材「政宗の城づくりと町づくり」は、仙台市の中心部から離れた地域の児童にとっても、興味・関心をそそられ、自主的な学習への意欲を高めることのできる地域教材であることが分かった。

また、政宗の城づくりや町づくりを学習することで、児童は、戦国の世に生きる政宗の生きざまを通して、この時代の大名の苦労や知恵、城下町に住む人々の生活の様子を現実味をもって理解し、時代を認識する手がかりをつかむことができたように思う。

② 支援に関して

ア 発表児童への支援の工夫

城づくりを調べた班は、紙芝居で表現することは決まったものの、具体的な観点が見つけれなかった。そこで、なぜ青葉山に築城したのか考えてみようと言った。その結果、仙台城が険しい地形を巧みに利用して築城されたことを、紙芝居だけでなく自作の絵図で表現することを子供たちは考えた。

表現活動の一つとして、クイズを取り入れたことで、発表児童は調べた内容に対する理解を深め、聞き手側児童も聞く視点を明確にもつことができた。

イ 聞き手側児童への支援の工夫

発表側児童が数時間にわたって調べてきたのに

対して、聞き手側児童は授業で初めて発表内容を聞くことになる。そこで、聞き手側児童の理解を支援するために、発表やその後の話し合いをまとめる学習プリントを用意した。

また、児童の課題意識を尊重することで、調べる対象も多様化していくので、特定の班しか発表しない形式の授業では、話し合い活動を円滑に行わせることによって学習内容を深めることも重要な支援と考えられる。

(2) 事後調査から（児童の変容）

ア 地域学習への意欲

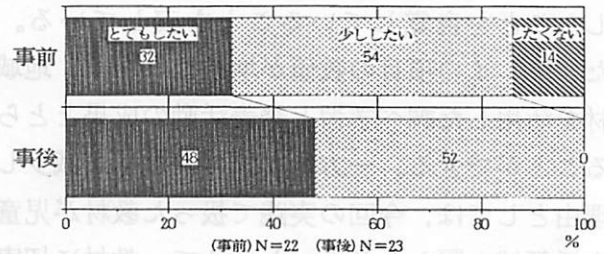


図16 地域学習への意欲

図16から分かるように、伊達政宗を中心教材として、城づくりや町づくりについての学習をしたことで、児童の地域学習への意欲は大きく高まった。また、「身近な地域の学習は楽しいですか」との問いに対しても、「とても楽しい」と答えた児童が27%から66%に大幅に増加している。このことから、地域教材を活用し、多様な学習形態を取り入れ、児童が主体的に学習に取り組む環境を作り出したことで、児童の学習意欲は高まったと考えられる。

イ 地域学習の楽しさ

表7 どんなとき楽しいと感じるか。

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	
事前調査 (%)	9	32	45	23	0	N=22
事後調査 (%)	61	61	17	48	9	N=23

ア、本などを調べて、新しいことが分かったとき イ、実際の場所に行って学習するとき ウ、地域の方に話を聞いて、新しいことが分かったとき

エ、教科書の中身と別のことが分かったとき オ、その他

ア、エの項目の数値が増加しているのは、地域素材を使っの調べ学習の成果であろう。また、イの項目が増加していることから、今回の実践が児童の博物館での学習の動機付けになっていることが分かる。なお、ウの項目の数値が減少している理由としては、今回の実践では地域の方に話を聞く機会がなかったことが考えられる。

ウ 地域学習による児童の意識の変容

表8では、オの「変わらない」と答えた児童が減っていることに注目したい。これは、今回の実践によって子供自身の変容しただけでなく、変容したことを自覚していることを表している。また、ア、イの項目の数値が増えたことは、地域素材を活用した調べ学習と発表活動の成果ととらえることができる。一方、ウ、エの数値が減少した理由としては、今回の実践で扱った教材が児童の生活領域と隔たりがあったため、教材に切実感を持たせるような支援の工夫が望まれる。

表8 地域学習による児童の変容

項 目	ア	イ	ウ	エ	オ	
事前調査 (%)	9	9	23	27	23	N=22
事後調査 (%)	43	61	17	17	9	N=23

ア、社会科に興味を持って、進んで学習するようになった

イ、色々な調べができるようになって、発表なども工夫するようになった

ウ、地域で暮らす人々の身になって、考えることができるようになった

エ、自分も地域の一員として、地域の行事などに進んで参加するようになった

オ、変わらない

■ 2 中学校の実践から

(1) 実践授業において

① 地域教材の活用に関して

三条中学校の学区内には30余りの寺院が集まっており、今回の単元「鎌倉時代の新しい仏教」において、地域教材を活用した学習には向いている地域である。しかし、いざ寺を調べる段階になると、生徒たちの反応は思ったほどではなかった。というのも、調べる対象があまりに身近すぎて、

今さら調べても、と感じる生徒が多かったからである。そこで、「北山マップ」という資料を作成し、自分の家や学校と寺院の位置を再認識させることで、生徒の興味・関心を高めた。

実際に調査活動を始めると、普段見ても気付かなかったことを発見したり、知らなかったことが分かったりしたことで意欲が高まり、積極的に活動に取り組む様子が見られた。

本実践では、生徒にとって比較的理解しやすい「念仏」「題目」「座禅」というキーワードで課題を焦点化した。が、仏教のように難しい教義などを含む教材を利用する場合には、誰にでも分かることや生徒自身の目や耳で容易に確認できることを中心に課題を浮き出させる工夫が必要である。

また、生徒に調査活動をさせる場合には、協力者との綿密な事前の打ち合わせが不可欠である。打ち合わせが不十分であれば、教師側の意図は生徒の調査内容になかなか反映されないからである。さらに、寺院に限らず、身近な地域において調査活動に協力してくれる人などをリストアップしておくことも、地域教材を利用した授業を継続的に実施するためには必要なことと思われる。

② 支援に関して

ア 発表生徒への支援の工夫

生徒一人一人を生かすためには、調べ学習をした後の発表が大切である。発表前には必ず発表内容と発表方法について、教師と打ち合わせをする必要がある。調査事項のまとめ方や発表の仕方について助言することは、大切な支援の一つと考えられる。発表する際にVTRの利用など表現方法を工夫することで、「みんなの前で発表することは楽しく、やりがいがある」といった成就感を持たせるよう心がけたい。

イ 聞き手側生徒への支援の工夫

まず、発表者の説明の聴き方を身に付けさせることが大切である。そのため、本実践で、「念仏」「題目」「座禅」をポイントとして示したように、聴く際のポイントを学習プリントで明示するなど

の方策をとることが大切になってくる。

自己評価表は、生徒自身の意欲・疑問を引き出すための有効な手段と考えられるし、教師側から見れば、授業を評価することにもなる。さらには、生徒一人一人の興味・関心・理解等を知ることができ、適切な支援を行うためには不可欠のものであると言える。

発表を中心とした授業で特に配慮したいのは、発表後に行われる話し合い活動である。発表内容について全員で話し合うことによって、はじめて共通の課題意識が芽生え、理解を深めることができると考えるからである。

(2) 事後調査から（生徒の変容）

ア 地域学習への意欲

生徒にとっては最初は、あまり乗り気ではなかった学区内の寺院の調査活動であったが、教師の支援の工夫で生徒の興味・関心が高まり、実際に調査活動を行いそれを発表したことで、地域学習への意欲が向上したと考えられる。

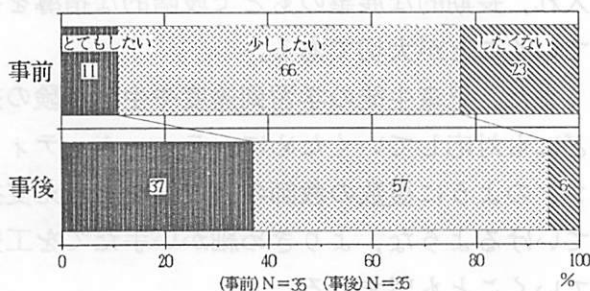


図17 地域学習への意欲

イ 地域学習の楽しさ

表9 どんなとき楽しいと感じるか。

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	
事前調査 (%)	31	46	9	26	6	N=35
事後調査 (%)	29	57	26	20	0	N=35

ア、本などを調べて、新しいことが分かったとき イ、実際の場所に行って学習するとき
ウ、地域の方に話を聞いて、新しいことが分かったとき エ、教科書の中身と別のことが分かったとき オ、その他

話を聞いて…」を地域学習の楽しさと答えた生徒が増えた。寺院に出かけ、住職さんからいろいろ学んだことで新しい発見があり、印象深かったためであろう。

ウ 地域学習による生徒の意識の変容

表10 地域学習による生徒の変容

項目	ア	イ	ウ	エ	オ	
事前調査 (%)	17	20	9	9	43	N=35
事後調査 (%)	29	29	11	14	31	N=35

ア、社会科に興味を持って、進んで学習するようになった

イ、色々な調べ方ができるようになって、発表なども工夫するようになった

ウ、地域で暮らす人々の身になって、考えることができるようになった

エ、自分も地域の一員として、地域の行事などに進んで参加するようになった

オ、変わらない

オの項目の数値が減り、他の数値はすべて増加している。このことから、地域教材を活用し、調べ学習や発表学習などを取り入れ、学習形態を工夫することによって、生徒は社会科や地域社会への興味・関心を高め、主体的に学習に取り組むようになることが検証できたように思う。

エ 地域学習の見学場面

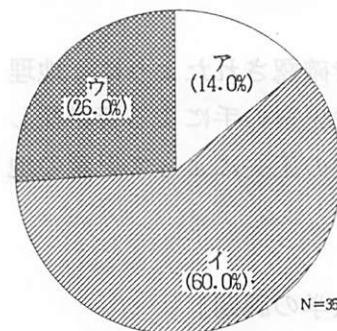


図18 どの場面で見学したいか

ア、調べる前

イ、調べている途中

ウ、調べた後

今回の調査研究を進める過程で、学習のどの段階で調査・見学活動をいれるべきかが議論になった。事後調査の結果、「調べている途中」を希望した生徒が多かった。このことは、生徒が調査・見学活動によって、自ら課題を解決する手がかりを得ようとしていることを示している。今後、指導計画を作成する上で、生かしていきたいと思う。

小学生への調査結果とは反対に、「地域の方に

Ⅶ 研究の反省と今後の課題

■ 1 研究の反省

(1) 実態調査について

地域教材にかかわる社会科学習の状況について、児童生徒及び教師に、できるだけ同じ内容の質問項目を設定して調査したことで、小学生と中学生の意識の類似点や相違点、また、児童生徒と教師の意識の違いなどを発見することが可能となり、研究の方向性をつかむことができた。

調査の内容については、地域教材の活用が児童の変容にどのようにつながったかを、より具体的に分析できるような項目の設定も必要であったと考える。

(2) 実践授業について

小・中学校での実践授業では、児童生徒の生活の場にある地域教材によって、社会科の内容を具体的に学習させ、興味・関心を喚起しながら主体的な学習意欲を高められることが検証できた。特に、調べ学習の進め方や発表段階での表現活動においては、いずれの授業でも教師の支援が大きな役割を果たすことが、事後調査の結果にもはっきりと現れている。

また、小学校の実践で確認されたように、地理的な制約から実地見学や児童の手による資料探しが困難な場合でも、支援の工夫によって児童の地

域に対する関心を深めさせながら、十分に主体的な活動を引き出すことができた。

さらに、学習内容についての考察を深めさせるために、話し合い活動の組織の仕方など、個々の児童生徒の実態に対応できるような支援の工夫が必要であることも分かった。

■ 2 今後の課題

(1) 地域教材について

地域教材を有効に活用していくためには、環境整備を積極的に推進していくことが求められている。具体的には以下の2点である。

- ① 各学校ごとに地域教材による実践の成果を蓄積し、年間指導計画の中に位置付けていくこと。
- ② 地域教材に関する資料の収集の方法や集めた資料のデータベース化を推進していくこと。

(2) 支援について

主体的な学習を推進していくためには、児童生徒が中心となって活動するような学習形態を取り入れ、長期的な展望のもとで段階的な指導を行っていくことが大切である。

また、児童生徒の学習到達度や生活経験の差などにも対応していくために、ティーム・ティーチングのように複数の教師の目で個をとらえ支援していけるような、よりきめ細かい手だてを工夫していくことも望まれる。

● 参考文献

- 稲葉宏雄編『教育方法学の課題』
ミネルヴァ書房 1979
- 『研究収録 第19集』
熊本県立教育センター 1991
- 『全国社会科研究協議会宮城大会 資料集』
1992
- 渋澤文隆『新学力観に立つ社会科の授業改革』
明治図書 1992
- 文部省小学校社会科資料『新しい学力観に立つ
社会科の学習指導の創造』 1993

● 委嘱研究員

宮城大学教授	田中 武雄
仙台市立川前小学校教諭	大沼 芳浩
仙台市立黒松小学校教諭	三塚 修
仙台市立東華中学校教諭	吉岡 康則
仙台市立人來田中学校教諭	片岡栄治郎
仙台市立松陵中学校教諭	後藤 淳子
仙台市立三条中学校教諭	狩野 博正

● 担当

仙台市教育センター	
指導主事	我妻 喬子

学級における相互理解を図るための国際理解教育

—— 外国人児童との触れ合い体験を通して ——

■要 約

この研究は、学級における外国人児童との触れ合い体験を通して、国際理解教育の指導の在り方を探ろうとしたものである。

外国人児童の適応指導の実態及び外国人児童との触れ合い体験を生かした国際理解教育の課題に関する調査を行い、それをもとに授業実践を行った。

その結果、外国人児童の個々の特性を的確に把握し、彼らの特性を受容する環境づくりと指導を行えば、相互理解を図ることができることが明らかになった。

■キー・ワード

☐ 国際理解教育

☐ 相互理解

☐ 適応指導

☐ 外国人児童

☐ 触れ合い体験

☐ 異文化理解

目 次

I	主題設定の理由	71
II	研究の基本的な考え方	71
1	国際理解教育の推進	71
2	「外国人児童との相互理解を目指す」指導の充実	71
III	研究の目標	71
IV	研究の仮説	71
V	研究の概要	72
1	研究の方法	72
2	研究の内容	72
3	学級活動における授業実践	82
4	社会科における授業実践	88
5	適応指導と触れ合い体験の実践	93
VI	研究の結果と考察	95
VII	研究の反省と今後の課題	96
1	研究の反省	96
2	今後の課題	96
◇	参考文献	96
◇	委嘱研究員	96
資 料		97

I 主題設定の理由

近年、経済や文化の世界交流が著しく進んだ結果、帰国子女や外国人子女の数が増えつつある。

しかしながら、同質社会の中で育った日本人の子供たちの中には、自分と異なる生活習慣や行動様式を素直に受け入れることができないでいる子も見られる。そのために自分の特性を自ら抑制したり、ゆがめたりするなどの不適応を起こす帰国子女や外国人子女も見受けられる。

そのような状況の中で、日本人児童一人一人が自分たちとは異なった文化的環境の下で育ってきた子供たちを温かく受け入れ、互いのよさや違いを認め合い、思いやりの心が育つ学級づくりや学校づくりが課題となっている。

そのためには、まず外国人児童を受容し、その特性を認め伸長していくこと、具体的には、学校内での適応指導をより充実させながら自己を表現させ、彼等自身に異文化的環境の下に存在することの意義に気付かせることが大切になってくる。

さらには、これまで外国人児童と接する機会が少なかった日本人児童に、彼等との直接体験や異文化体験を数多くもたせることによって、異文化や自国文化を理解し尊重し受容する態度を身に付けさせることができるものと考ええる。

そこで、学級を国際的相互理解の場ととらえ、外国人児童の特性を生かし、互いの文化・習慣・ものの見方・考え方の違いを認め合うことにより、児童は互いに国際的視野を広げ、思いやりの心を持ち、伸び伸びと自己表現ができるようになると考え本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

■ 1 国際理解教育の推進

平成7年度仙台市の学校教育における国際理解教育推進の重点施策の一つは、児童生徒が今後日常生活の場面において国際社会に通用する行動様

式を学習し実践に役立つよう指導することである。

そのためには、国際社会の基本を異文化理解や人間理解としてとらえ、国際社会に関する知識を深める必要がある。また、諸外国の文化、人々のものの見方・考え方やそれぞれの風土に根ざした生活様式などを理解し、尊重しようとする態度、さらには、世界のすべての地域の人々の基本的人権を尊重する態度の育成が求められている。

■ 2 「外国人児童との相互理解を目指す」指導の充実

外国人児童の違った生活習慣や言語を通して、ものの見方・考え方の相違を学び、それを教科・特別活動・生活指導の中で積極的に取り入れる。そのことによって、外国人児童が学級において自己を表現し、自身の存在意義に気付くことができるようになることが目標である。

また、日本人児童が外国人児童と触れ合うことを通して、異文化を理解し、自国文化にも関心をもつようになることを期待する。

このことを通して、児童に国によって多様な文化やものの見方・考え方があることを学習させる。そして、その違いを受け入れ、互いに思いやりをもって生きていくことの大切さに気付かせることができるものと考ええる。

III 研究の目標

異文化の相互理解を図るために、外国人児童の生活習慣や異文化体験を生かした国際理解教育の在り方を適応指導の実践を通して明らかにする。

IV 研究の仮説

外国人児童の適応指導を図りながら、学級において、日本人児童と外国人児童との触れ合い体験を積極的に生かすことによって、相互理解の心を育てることができるであろう。

V 研究の概要

■ 1 研究の方法

本研究では、外国人児童との触れ合い体験を通して、日本人児童のものの見方・考え方を広げることを期待し、教科・特別活動などの指導の在り方を探っていききたい。

そのために、小学校における外国人児童の適応指導の実態及び外国人児童との触れ合いを生かした国際理解教育推進上の課題について、教師・外国人の児童の保護者からアンケートをとり、その実態を明らかにし、授業実践を通して国際理解教育の在り方を探ることにした。

(1) 実態調査

① ねらい

小学校における外国人児童の適応指導の実態及び外国人児童を生かした国際理解教育推進上の課題を把握する。

② 内容

- ・外国人児童との触れ合い体験を生かす場とその具体的方法
- ・外国人児童の保護者の学校への期待

③ 調査対象

- ・仙台市内の小学校で外国人児童を担任している教師
- ・仙台市内の小学校で3年以内に担任したことのある教師
- ・仙台市内の外国人児童の保護者

④ 調査期間

平成7年7月13日～20日

(2) 実践授業

- ① 仙台市立国見小学校 教諭 齋藤 希美
3年生学級活動 題材名「友達の国で遊ぼう」
- ② 仙台市立高森東小学校 教諭 村上 和恵
教諭 相原 隆志
5年生社会科 小单元名「自動車をつくる工業」

■ 2 研究の内容

(1) 実態調査

① 教師用アンケートの結果と考察

——外国人児童との触れ合い体験とその具体的方法——

外国人児童を担任した経験を持つ教師から、外国人児童の適応指導と外国人児童を生かした国際理解教育の実態に関連した七つの設問に、回答が得られた。

その回答を集計した結果から、外国人児童との触れ合い体験を生かした国際理解教育の在り方について考察していききたい。

設問1 外国人児童を指導する上で問題がありますか（ありましたか）。

外国人児童の増加に伴い、その子供たちを指導する上での問題点を整理することは、外国人児童を日本の学校で円滑に適応させるために重要なことだと言える。

図1から、多くの教師が「問題がある」と感じていることが分かる。

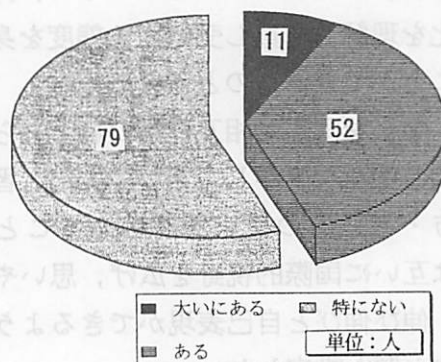


図1 外国人児童を指導する上での問題の有無

この中で「大いにある」と回答した教師が具体的な問題として記述した内容をまとめたのが次の表1である。

表1以降は、のべ回答数で集計している。

問題点の傾向は、言語に関連することと生活習

慣や文化の違いに関連すること、そして学校内の受け入れ体制に関することなどに大別できる。

表1 「大いにある」文章記述の傾向 単位：人

1. 言語に関連すること	
・学習言語の問題	5
・保護者の生活言語の問題	3
・児童の生活言語の問題	2
計	10
2. 生活習慣や文化の違いに関連すること	
・物事の「感じ方」の問題	2
・掃除に関連した問題	1
計	3
3. 学校内の受け入れ体制に関連すること	
・個別指導の時間の確保の問題	1
・校内での受け入れ体制の問題	1
計	2
4. その他	
・母国での学習の進捗の問題	1
・記述なし	2
計	3

外国人児童を指導する上での問題点を具体的に整理することによって、より実態に即した指導の在り方が明確になると考える。

そこで設問2では、外国人児童を指導する上での問題点を具体的な事例によって整理していきたいと考える。

設問2 外国人児童を指導する上で問題となっていることは何ですか。

設問2では、設問1で「大いに問題がある」「問題がある」と回答した63人の教師の具体的な問題の内容について調査を進めた。

まず「学習言語の問題」と「生活習慣や文化の違いの問題」に分けて、どちらに問題を感じているのか調査した。その結果、図2から分かるとおり、ほぼ半数ずつの回答があった。

設問1で「大いに問題がある」と回答した教師

の具体的な問題の記述の多くが、「言語」に関連した問題だった。さらに「問題がある」と回答した教師の回答を加えると、「生活習慣や文化の違い」も、外国人児童を指導する上で問題だと感じている教師が多いことが分かる。

記述欄には、たくさんの具体的な事柄が述べられていた。

まず「学習言語の問題」では、

- ・算数は比較的理解しやすいが、国語、理科、社会の理解が難しい。
- ・話し言葉は理解できるが、読む、書くといった学習が難しい。
- ・保護者が日本語が分からない場合、連絡に手数がかかり、伝わったかどうか心配にもなる。
- ・担任の知らない言語の場合は、担任がその言語の勉強をしないとコミュニケーションが生まれない。
- ・一斉授業の中では、なかなか外国人児童の指導が手にまわらない。個別指導の時間の確保が必要だ。
- ・交友関係でトラブルがあった場合、事実関係を聞き、納得できるように説明することが、言語の問題から難しい。

などの記述がみられた。

「学習言語の問題」にとどまらず、児童や保護者、さらに教師の「生活言語」についての問題も述べられていた。児童や保護者とのコミュニケーションづくりの上で言語の問題が障害になっていると言えるであろう。

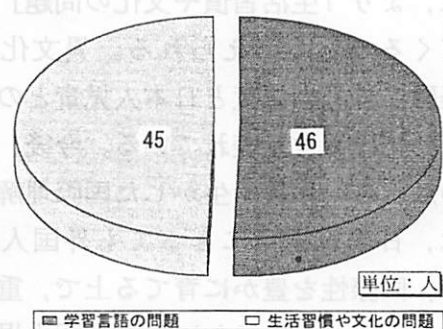


図2 外国人児童の指導上の問題

したがって、学校側の受け入れ体制の中でも、特に重視すべき指導内容になると考えられる。

また、「生活習慣や文化の違い」の問題では、以下のような事例が述べられていた。

- ・日本では、ほめる時に頭をなでるが「首から上は触れてはいけない」ということを知り、ほめる時に気を付けるようにした。
- ・学校の掃除をしたことがなかったのでとまどっていた。
- ・雑巾がけに抵抗を感じているようだった。
- ・宗教上、食べてはいけない食品があった。
- ・国による習慣や価値観の違いから、児童間で意見や考えのくいちがいが見られた。
- ・給食の献立に、食べたことがない食品が含まれていて、本人が困っていた。
- ・習慣の違いからか、なかなか学級になじめず誤解される場面があった。

このように「生活習慣や文化の違い」の問題の中には、食事、清掃、児童の個性の強さなど、幅広く問題点が述べられていた。

生活や文化の違いは、それぞれの国や家庭により、さらに児童個人によって異なるので、それぞれの外国人児童にふさわしい適応指導の在り方が重要になると考えられる。また、外国人児童としての問題にとどまらず、その児童個人の問題にも注目して指導に当たる必要があるという回答もあった。

さらに、「言語」上での問題が解決する見通しが立ち、外国人児童とのコミュニケーションが密になれば、より「生活習慣や文化の問題」がはっきりしてくることも考えられる。異文化の中で育った経験が外国人児童と日本人児童との感じ方の違いとしてはっきり表れている。今後、外国人児童との触れ合い体験を生かした国際理解教育の在り方は、日本人児童にとっても外国人児童にとっても、国際性を豊かに育てる上で、重要になると考えられる。このほかにも、外国人児童を指導する上で問題になる事例が以下のように述べら

れていた。

- ・異なったカリキュラムでの学習経験を経ているので、日本のカリキュラムで、該当学年までの学習経験を積み重ねているか判断に悩む。
- ・本国に戻ったことを心配していた。
- ・他の学級や学年の児童が「変な日本語だ」などと言ってからかう。

生活言語の習得には時間がかかる。また、学習言語の習得にはさらに時間がかかる。外国人児童への初期の適応指導は、このような期間に展開される「言語」や「生活習慣や文化」を理解していく活動である。言語の問題で外国人児童が卑屈になることなく、伸び伸びと学校で生活できるような適応指導が必要と考えられる。

また、担任が個人的に強く負担を感じる結果にならないような学校側の受け入れ体制の整備や個別指導の在り方なども課題になってくる。

さらに、学級経営や学校経営で必要になる「調査票」や「同意書」「申込書」などかき添えて英文で準備してあれば、担任の負担が軽減されるし保護者との円滑な関係づくりのきっかけにもなると考えられる。

このように「言語」に関する問題を解決しながら「生活習慣や文化」に対する理解を深めさせて、外国人児童を学級に適応させる指導の在り方が重要だと考えられる。

そこで、設問3から、具体的な適応指導の在り方について調査を進めた。

設問3 外国人児童の適応指導で大切と思われることは何ですか。

この設問に対しての回答をまとめた図3から、「保護者との連携」「日本語の習得」が大切と考えている教師が多いことが分かる。

教師が適応指導で大切だと感じていることは、外国人児童の保護者への調査での「学校に期待すること」とほぼ一致する。外国人児童の保護者は

次の3項目を学校教育に期待している。

- ・日本語の習得
- ・友達と仲良く遊べる
- ・授業が分かる

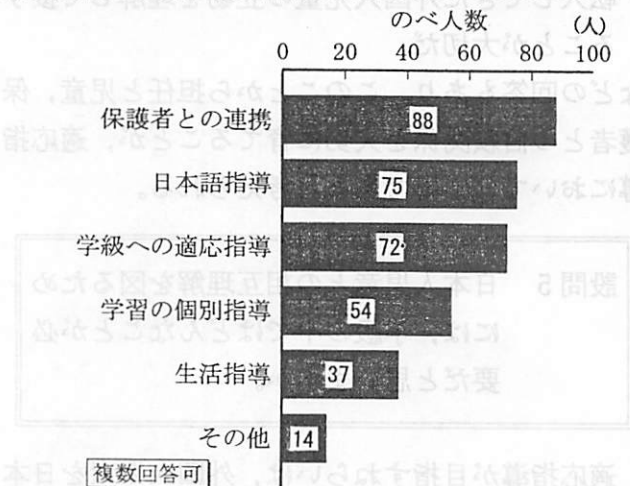


図3 外国人児童への適応指導

言葉の壁はあるが、保護者と外国人児童の日本語習得の状況や交友の様子について連絡を取り合いながらの適応指導を、教師も保護者も重要視していることがうかがえる。

以下はその他の回答である。

- ・他学年や他学級の児童、教職員が外国人児童に対しての共通理解を持つ必要がある。
- ・定期的なカウンセリングが必要だ。
- ・担任自身が外国の文化についての理解を深めながら外国人児童に接する必要がある。
- ・外国人児童の人間性を重視して指導に当たる必要がある。
- ・保護者がPTAの行事に参加したり日本語の勉強をしたりして、日本の学校の様子を理解する努力が必要である。

日本の教育現場についての情報を外国人児童や保護者へ広く知らせることができれば、外国人児童のカルチャーショックを和らげることができる。また、教師自身もその児童の母国の文化や生活の様子についての情報があれば、その国の習慣や文化、価値観の違いに敏感に対応する準備ができる

ものと思われる。

事前の情報交換が実現すれば「どうして掃除しなければならないの」とか「頭に触られるのがいやだ」「食べられない」などといった、未然に防ぐことが可能な適応指導の障害は排除できるものと考えられる。

また、外国人児童や保護者に対する情報の提供と同時に、教師や日本人児童に対しても共通理解を得られるような手だてを講じながら、適応指導に当たることも重要なことだと言える。

しかしながら、必要以上の適応指導は外国人児童の自尊心を傷つけたり、日本人児童には「特別扱い」のように感じさせてしまう危険性がある。学級や学校の中で、国は異なっている同じ人間、友達同士だということを、外国人児童も日本人児童も互いに共感できるように、目的と必要性が明確な適応指導や個別指導を進めることが重要だと教師が感じていることがうかがえる。

設問4 外国人児童を学級に適応させるために必要なことは何ですか。

外国人児童が日本の学校で異文化経験を生かし、その特性を生かせるような適応指導が大切になってくる。そこで、教育現場で外国人児童を学級に適応させるために必要と思われることについて調査を進めた。

図4で示したとおり「友達を増やすこと」「外国人児童の特性の把握」が必要だという回答が多かった。外国人児童を学級の中に適応させるためには、

- ・子供たち同士が遊びなどを通して、友達を増やすこと。
 - ・教師が観察や、聞き取りなどを行いながら「外国人児童の特性」を把握していくこと。
- が、まず必要になると考えられる。

また「日本語の習得」や「活躍の場を与えること」「互いの文化や生活の違いを理解すること」

も、外国人児童が友達を増やしたり、外国人児童の特性を理解したりするためにも重要であろう。

これらのことから、教師が外国人児童のよさを見つけ、周囲の児童にアピールできるような支援を行いながら、友達を増やすことが「外国人児童との触れ合いを生かす」適応指導に求められていると考えられる。さらに、よりよい学級づくりを目指し、児童個々の個性を生かし、認め合えるような学級の雰囲気づくりや学級経営の在り方も重要なことだと言える。

また、学校の受け入れ体制の整備や、定期的なカウンセリングといった適応のための体制づくりが必要だという回答も多かった。その他の記述の中にも次のような関連した内容の回答があった。

- ・担任の負担をできるだけ軽減し、その外国人児童と交流する時間や個別指導の時間を確保する必要がある。
- ・日本語が全く話せない場合は、母語が話せる先生と気軽に話ができる場の設定も大切なことだ。
- ・学級や学年全体の児童、時には学校全体の児童の理解が必要だ。
- ・宗教、食生活、生活習慣などの、児童の母国の文化に対する理解を深めておく必要がある。

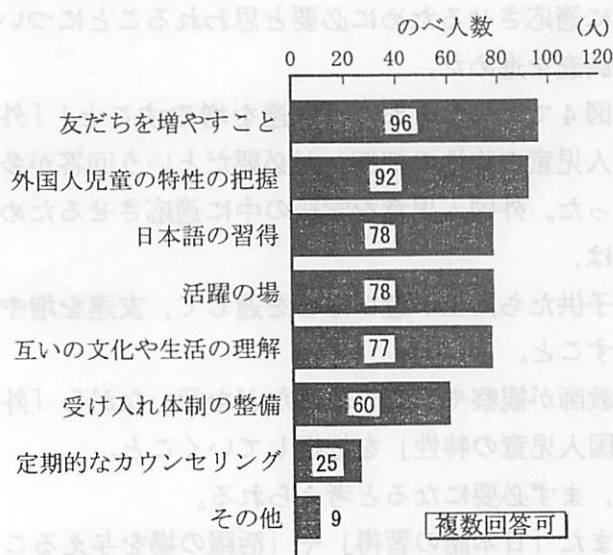


図4 外国人児童の適応指導の内容

- さらに、その他の記述の中には、
- ・保護者の協力を得る必要がある。
 - ・外国人児童に限らず友達を素直に受け入れる学級の雰囲気づくりが大切だ。
 - ・転入してきた外国人児童の立場を理解して接することが大切だ。

などの回答もあり、このことから担任と児童、保護者との信頼関係を大切に育てることが、適応指導においては必要であると考えられる。

設問5 日本人児童との相互理解を図るためには、学級の中ではどんなことが必要だと思いますか。

適応指導が目指すねらいは、外国人児童を日本の学校の教育環境に適応させ、友達づくりにつながる「相互理解」を図ることである。そこで、学級の中で「相互理解」を図るために必要と思われることを調査した。

図5から分かるとおり、「遊び」の場で相互理解を図ることや、「学習以外の活動」で協力し合うことが必要であるという回答が多かった。相互理解の手段として「遊び」や「協力し合える活動」を通して、自然な交わりの中で、外国人児童が日本の学校に適応していくものと考えられる。

このことは、外国人児童のもっている特性やよさを発揮できる活動を通して、外国人児童を日本に同化させるのではなく、お互いの文化や生活習慣、個性を認め合えるような活動を通して「国際的相互理解」を図ることが大切なことだと考えられる。したがって、「遊び」の場が外国人児童の特性を発揮できる場として、適応指導の初期に位置付ける必要があると思われる。

それは、お互いに理解し合ったり、協力し合う場だということだけではなく、外国人だということを特に際立たせることなく、外国人児童の母国の生活や文化、習慣を理解する基盤を日本人児童の中に育てるためにも必要であると考えられる。

この「遊び」の場を通して「遊び相手」が「友達」になり、「友達」は学校生活の中で「仲間」になっていく。さらに、お互いを理解し合える「友達」を増やしていくことによって、外国人児童が生き生きとした学校生活を送ることができるものと考えられる。

また「学習の場」で考え方や文化の違いを理解することは、言語の問題を含めた適応指導がある程度進んだ段階で有効になると考えられる。お互いに自分の考えや育った環境について話し合ったり、情報を交換したりすれば「国際的相互理解」が一層深められるであろう。

外国人児童の日本での滞在期間の経過によって教師のねらいや活動に対しての期待は変化する。その変化する期待を外国人児童が学校生活の中で実現するためにも、初期の適応指導の充実と相互理解の必要性が浮き彫りとなってくる。

その他の記述の中には、

- ・外国人児童を主役にして、学級の友達みんなでできることを見つけ共有する。
- ・外国人児童の願いを尊重して指導に当たる。
- ・生活全般で相互理解を図る必要がある。できれば、帰宅後も友達が誘い合って遊べるように配慮する。家庭間の交流を深めることも大切になる。
- ・国語の本にふりがなをふり、読めるところを発表させ、自信を持たせた。
- ・言葉が思うように通じないうちは、例えば算数

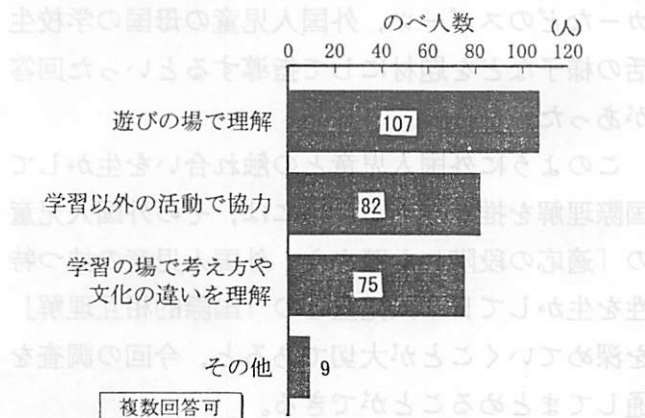


図5 学級の中での相互理解の方法

では、分数を英語で話させるなどして親しみがもてるよう配慮した。
など、外国人児童の「個」を大切にして指導に当たることが必要だとの回答があった。

設問6 今までに国際理解教育を推進する上で外国人児童をどのように生かすことができましたか。また、できると思いますか。

設問7 これから国際理解教育を推進する上で外国人児童をどのように生かそうとお考えですか。

設問6では「外国人児童との触れ合い体験を生かした国際理解教育」の現状について調査し、設問7で、今後の方向性について調査を進めた。それぞれの回答を図6で比較しながら考察を進めたいと思う。

設問6, 7でも、「文化の相互理解」に関する内容が最も多かった。

教師が、外国人児童の生まれ育った国の生活環境や文化の違い、経済の特徴の違い等をとらえながら、相互理解を深めさせていくことが重要であると考えられる。

日本国内での、地域性がもたらす生活習慣の多様性を認める態度が「他国理解」の基盤になる日

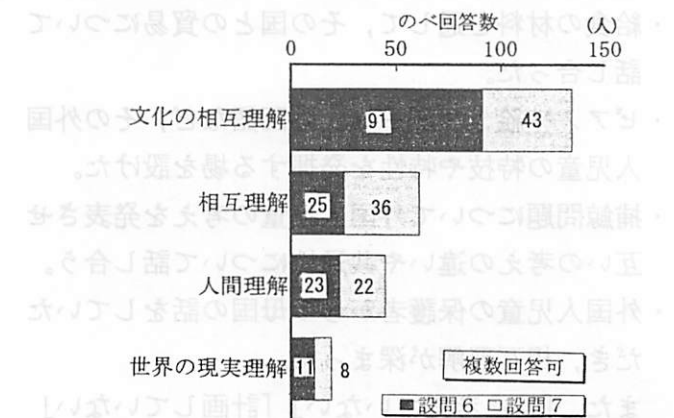


図6 外国人児童との触れ合いの要素

本人児童と、外国人児童とが相互理解するためには、それぞれが自分の国の文化を十分に理解しておく必要があると考える。

しかし、外国人児童にとっての文化理解は、母国についても日本についてもまだまだ不十分である。したがって、そうした理解の不足を補う役割を担うのが外国人児童の保護者だと言える。その他の記述の中にも「外国人児童の保護者も教育活動に参加していただき、外国人児童が表現しきれない母国の生活や文化について話したり、日本文化と交流したりできるような活動が必要だ」とあった。保護者の協力を得ての「異文化理解」の場が、日本人児童と外国人児童との「国際的相互理解」の接点になると考えられる。

そのほかにも、次のような回答があった。

- ・外国のいろいろな国にたくさんの子供がいて、顔や言葉は違うけれど、みんな友達になれるという内容の話合いができた。
- ・外国人の来校者があった時、通訳として活躍させた。
- ・世界のニュースと関連付けて話し合った。
- ・すべての国の人が、かけがえのない人間として尊重しなければいけないことを理解させたい。
- ・国内から国外へと日本人児童の目を向けさせることができるように外国人児童を生かしたい。
- ・生活習慣や文化の違いを感じることによって、日本人児童が日本の文化を見つめ直すことができた。
- ・給食の材料を通して、その国との貿易について話し合った。
- ・ピアノや絵、スポーツ、外国語など、その外国人児童の特技や特性を発揮する場を設けた。
- ・捕鯨問題について外国人児童の考えを発表させ互いの考えの違いや共通性について話し合う。
- ・外国人児童の保護者からの母国の話をしていただき、相互理解が深まった。

また、「特に考えていない」「計画していない」という記述もあった。その理由は、「外国人児童

との触れ合いを生かすのではなく、自然に適應できるように見守ることが大切である」ということだった。教師の外国人児童の特性や個性を尊重する考え方がうかがえる。

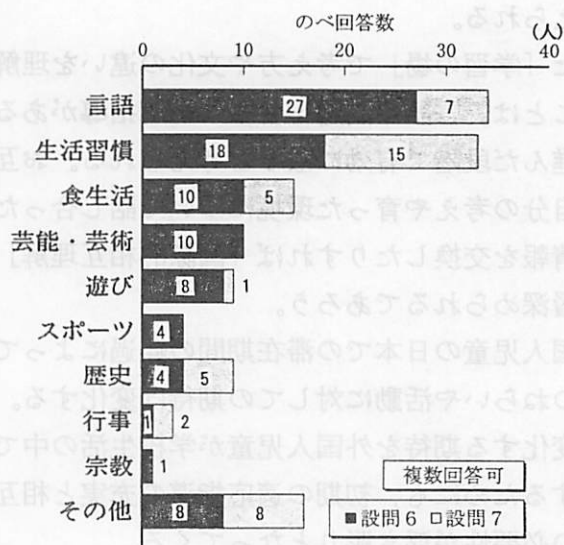


図7 「文化理解」の内容

図7で「文化理解」の具体的な記述の内容をまとめた。「言語」「生活習慣」が際だって多いことが分かる。特に「生活習慣」の内容で、今後外国人児童の役割を生かそうと考えている教師が多いことが分かる。「生活習慣」の違いを通して「相互理解」を深めようと考えていることがうかがえる。その他の文化理解についての記述の中には、気候や地形についてや、お弁当くらべ、民族服や民俗芸能、外国の歌や遊び、バスケットボールやサッカーなどのスポーツ、外国人児童の母国の学校生活の様子などを題材にして指導するといった回答があった。

このように外国人児童との触れ合いを生かして国際理解を推し進めるためには、その外国人児童の「適應の段階」を踏まえ、外国人児童の持つ特性を生かして日本人児童との「国際的相互理解」を深めていくことが大切であると、今回の調査を通してまとめることができる。

② 保護者用アンケートの結果と考察
——保護者は学校へ何を期待するか——

表2 設問1と回答数 人

設問1 滞在期間について	総回答	人
1年未満	14	
1年～2年未満	11	
2年～2年未満	14	
3年以上	40	

表3 設問2と回答数（複数回答）人

設問2 学校教育への期待	人
友達と仲良く遊べる	62
子供の特性を伸ばす	57
授業が分かる	46
日本語の習得	45
成績の向上	40
担任の先生との信頼関係	40
生活習慣や文化の違いの理解	33
個別指導	13
定期的なカウンセリング	11
その他（自由記述）	10

以上のようなアンケート調査の設問の回答から滞在期間別に考察を行った。

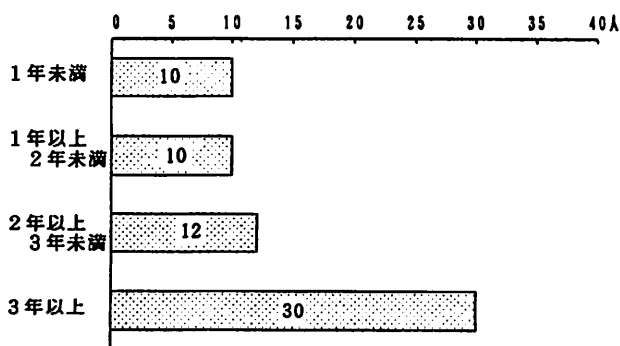


図8 友達と仲良く遊べる

図8から、7割を超す保護者は、友達と仲良く遊べることを望んでいることが分かる。滞在期間が1年未満から3年未満までの保護者については、この項目を1番多く選択している。この結果から、早く学校生活に慣れ今までの自国の生活と同じように、友達と仲良く遊んでほしいと願っていることがうかがわれる。

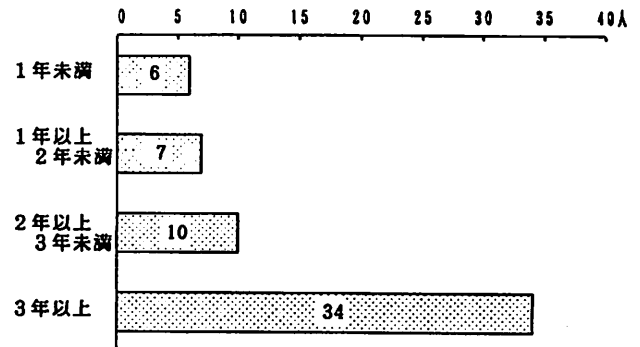


図9 子供の特性を伸ばす

上図から、滞在期間が長い程、子供の特性を伸ばすことを多くの保護者が期待していることが分かる。3年以上の滞在期間の保護者については、9割近く選択していた。これは滞在期間の長くなると、子供の個性の伸長を願う保護者の期待が高まってくることを示していると思われる。

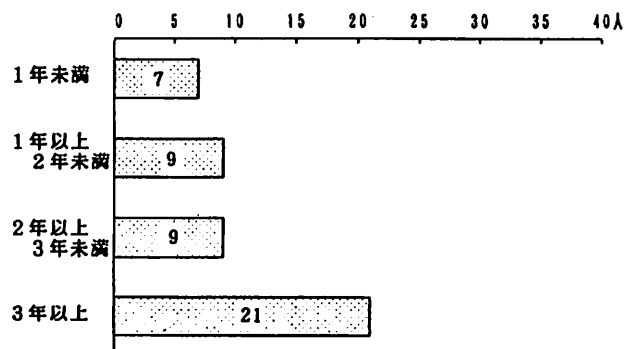


図10 授業が分かる

上図は、1年以上滞在している保護者の多くが授業を分かることを期待していることが分かる。このことは1年間日本で生活し、日常生活で使う日本語を少し理解できるようになり、更に日本語を授業の中でも理解し、学習内容をよく理解してほしいと望んでいるものと言える。

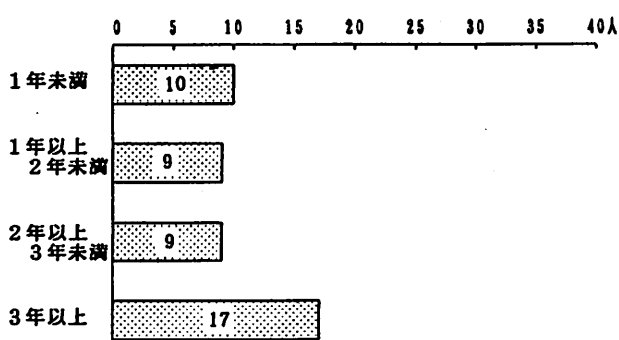


図11 日本語の習得

上図から、日本語の習得では、滞在期間が2年未満の保護者は8割以上が選択した。それは生活基盤の一つである日本語の習得を期待していると思われる。しかし、2年を経過すると保護者は、児童が日本語をある程度習得してきたので、願いが変化してきていると思われる。

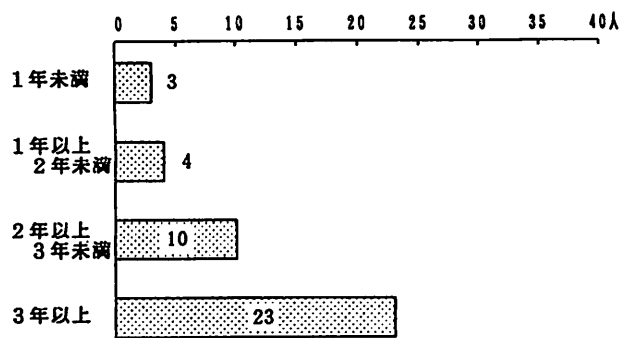


図12 成績の向上

上図から、滞在期間の長い保護者は成績の向上を期待していることが分かる。これは滞在期間が長くなれば日常生活が普通にでき、成績が心配になる。それに加え母国への帰国が近くなり、帰国後の成績を気にするためと考えられる。滞在期間が短いと成績の向上は期待していないと思われる。

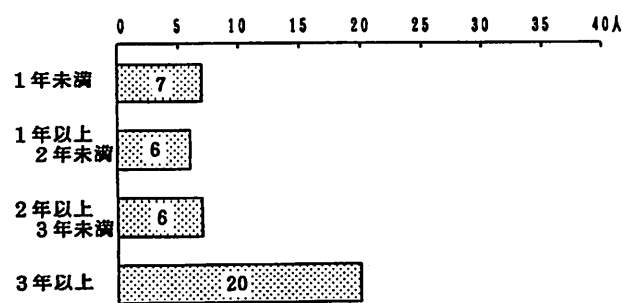


図13 担任の先生との信頼関係

図13から、どの期間でも担任との信頼関係を保護者は期待している。また、自由記述欄には「先生方の指導に感謝している」という内容があった。そのことを考え合わせると、担任と保護者の信頼関係は、ある程度できているものと思われる。

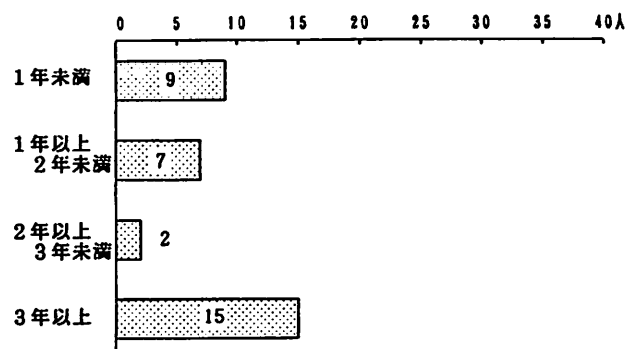


図14 生活習慣や文化の違いの理解

上図から、生活習慣や文化の違いを理解してほしいと考えているのは、2年未満の滞在期間の保護者の6割以上だった。しかし、2年以上滞在している保護者は選択した割合が少なかった。これは、日本の生活習慣や文化について子供たちに教えるには、親は十分な知識が無いため、学校へ期待をしていると思われる。しかし、その期待に学校がこたえていなかったためか、2年経過すると親が教えていくほうがよいと考え、学校への期待は少なくなっているとも考えられる。

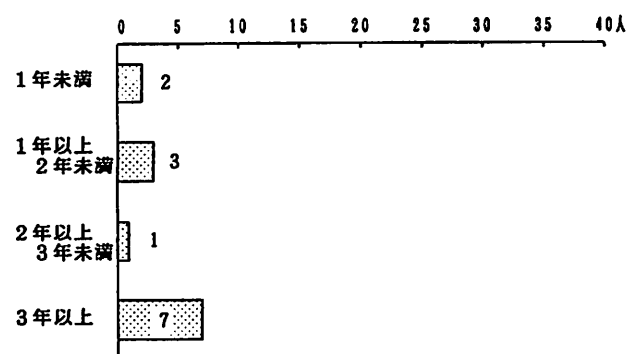


図15 個別指導

上図から、個別指導を望んでいる保護者は、全体を通して少ない。これは、担任及び担当教師が日常的に個別指導を行っており、保護者はその指導に対しある程度満足しているため、学校への期待では選択しない保護者が多かったと考えられる。

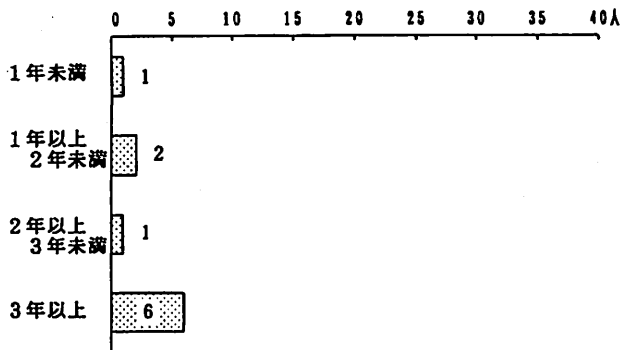


図16 定期的なカウンセリング

上図から、定期的なカウンセリングを望んでいる保護者は全体を通して少なかった。これは、個別指導と同じく、学校が絶えず連絡を取り、保護者からの連絡に対して十分な対応をしており、そのことが保護者をある程度満足させ、必要を感じさせないために選択しなかったと考えられる。

保護者用アンケート結果の全体を通してみると滞在期間が2年未満の保護者は、日本での生活に適応できるように「日本語の習得」「友達をつくる」「生活習慣や文化の理解」などについての支援を学校に求めている。

2年を経過した保護者は、母国にいたときと同じように、「子供の特性を伸ばす」「授業が分かる」「成績の向上」など、子供自身の能力を伸ばすことや、子供の成績の向上を学校へ求めている。

③ 調査のまとめ

①・②のアンケート調査の考察をまとめると、「外国人児童との触れ合いを生かす」ためには・学校生活への円滑な適応（人間理解）・外国人児童を生かす場の設定（相互理解）の2点が重要になってくる。

初めの「学校生活への円滑な適応」は、転入学初期の適応指導に焦点を当てていると思われる。そこでは、担任及び担任経験者は指導上の問題点として「言語の問題」「生活習慣や文化の違い」を挙げ、保護者の学校への期待も「日本語の習得」「生活習慣や文化の違いが分かる」であった。

担任及び担任経験者は、対策として「学習以外の場での日本人児童とのコミュニケーション」を

挙げ、保護者も「友達と仲良く遊べる」を挙げた。これは人間理解に立った、合致した意見である。

次の「外国人児童との触れ合いを生かす場の設定」は、先に述べた転入学初期の適応指導を終え相互理解に焦点を当てていると思われる。ここでは、「外国人児童をどのように生かしたか、どのように生かしたいか」について、担任及び担任経験者は「母国の気候や地形について話してもらう」「民族服や民俗芸能について話してもらう」「母国の学校の様子について話してもらう」などを挙げていた。また、保護者の学校への期待については、「個性の伸長」「成績の向上」を挙げていた。この考えは、相互理解に立った授業の中での子供の活躍という点で合致していると言える。

そこで、学級活動と教科指導の二つについて実践授業を行い、研究仮説の検証を行うことにした。

ア 実践授業1（平成7年11月実施）

仙台市立国見小学校 教諭 齋藤 希美

ここでは、遊びを通して、コミュニケーションを図るために次のねらいで学級活動を計画した。

(ア) ・触れ合い体験を生かす。

外国人児童の母国の遊びを通して子供同士の触れ合い体験をさせる。

(イ) ・互いに理解しようとする心の育成

遊びを通し遊びの共通性や違いを感じとらせる。

イ 実践授業2（平成7年11月実施）

仙台市立高森東小学校 教諭 村上 和恵

教諭 相原 隆志

ここでは、外国人児童との触れ合いを生かし、相互理解を図る場を社会の授業の中で扱うこととし、次のような手立てを考えた。

(ア) 外国人児童に存在感を持たせる

発表者として自分の考えを話させる。

(イ) 外国人児童と日本人児童の意見の発表

授業の中でお互いを知り、理解させる。

(ウ) T T方式を取り入れる

必要に応じ、互いの意見をT 2が通訳する。

■ 3 学級活動における実践授業

(1) 主題名 「友達の国で遊ぼう」

——世界の遊びを紹介し合う活動を通して——

(2) ねらい

- ・互いの国の遊びを紹介し合い、違いや共通性に気付くことができる。
- ・児童が互いに協力し合って楽しい集会にすることができる。

(3) 指導に当たって

国見小学校では、学区内に東北大学留学生が居住する国際交流会館が設置されて外国人児童の受け入れが始まった。1992年より「国際教室」を開設し、専任教師を一名配置し、担任と連携を図りながら指導に当たっている。現在、29名の外国人児童が在籍しているが、うち9名の児童が国際教室に通級してきている。これらの児童は年齢相応の学年学級に所属し、平均一日1時間程度、国語、社会の時間等に取り出し授業を行っている。ここでは「日本語の指導」「日本での適応指導」が主な指導内容となっている。

国際理解教育の基本理念である相互理解は、多様な概念が包含されている。今回は特に、人間理解と文化理解に視点を置き、3年生なりのアプローチで迫りたい。児童は一人一人多様な生き方や価値観に違いがあることを認めること、また、遊びを通してそれぞれ特徴をもった文化があることに気付かせたい。また、遊びの共通性にも目を向けさせたい。

この学級の児童は、国際教室の清掃担当になっていることと外国人児童が2名通級していること

もあり国際教室についてよく知っている。外国人児童は日本語が不自由なので、周囲の児童は親切にお世話をしている。その児童から異文化を吸収する機会を設定し、互いに楽しく遊ばせたい。

(4) 児童の実態

男子20名、女子18名、計38名の児童が在籍している。外国人児童は男子2名、女子2名、計4名が在籍している。うち男子1名、女子1名の児童が国際教室に通級してきている。

この学級では話し合い活動の議長団を生活グループの輪番で行っている。児童はその役割を教師の指導のもとに意欲的にこなしている。話し合いでは発言の活発な児童はもとより、教科の学習では、消極的な児童も進んで意見を述べている。集会活動はこれまで「お別れ会」を経験している。

今回の学習に当たって、当学級の日本人児童に対して実態調査を行った。

外国のことについて「だれから何を習いたいか」という設問では、H男（韓国）から韓国語、遊びなどと回答した児童は21人で、K女、R男（中国）と回答した児童は15人、A児（バングラディシュ）は1名であった。このことから在籍している児童の国への興味をもっていることがうかがえる。また、児童は当然のことながら、遊びに対する興味をもっていることも分かった。

「もし、何か外国人児童に教えるとしたら何を教えたいか」という設問には、日本語や日本の遊び（将棋、鬼ごっこ、お手玉、まりつき、かるた）と回答した。3年生なりに日本の文化を表現して伝えたい気持ちをもっていることが分かった。

表4 3年2組に在籍する外国人児童の実態

児童	国籍	通級	※日本語力	性 格	交友関係	来日時期（期間）
H男	韓国	あり	BC	明朗、おっとり	好感を持たれている	1995. 4（7か月）
K女	中国	あり	B	明朗、積極的	最近広がりが見られる	1995. 1（10か月）
R男	中国	なし	A	多弁、自己中心的	特定の友達と遊ぶ	1992.10（3年）
A女	バングラディシュ	なし	A	受動的、消極的	狭いが誰とでも遊べる	1993. 6（2.5年）

※ 日本語の状況

A 支障なし

B 読み書きに支障あり

C 会話に支障あり

D 全くわからない

(5) 研究仮説との関連

外国人児童との触れ合い体験を生かす活動として、遊びを実践するまでの活動を工夫していきたい。そのために、実態を調査し児童の興味を生かして活動計画を立てた。しかし、これまで外国人児童を活動の中心にすえた実践の経験が日本人児童にもなかったので、今後日常的に相互理解を図るためのきっかけの活動となることを期待している。

研究仮説との関連として次のことに留意する。

触れ合い体験を生かす

・3年生が活動するのに適した遊びを選択させ、その説明をさせる。まだ、日本語会話が十分ではない外国人児童もいるので、同じグループになった日本人児童と「遊びの学習会」を設けさ

せ、遊びを紹介し合う活動を通し触れ合い体験を持たせる。

児童を生かすための活動としては友達の国のあいさつを勉強したいという児童の希望があった。そこであいさつの手本を示す場面をビデオに撮影して視聴させたい。朝の会などでは「総理大臣」役の児童をリーダーとして、あいさつの練習をさせる。さらに、あいさつ集を作らせることで、扱う国の文字に慣れさせる。

互いに理解しようとする心の育成

触れ合い体験として計画した活動を通して、遊びには、共通性があることや国によって違いがあることを感じてくれることと思う。

授業後の評価については、違いや共通性をどのように認識したか感想カードで把握する。

(6) 活動の流れ

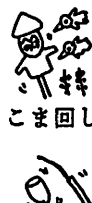
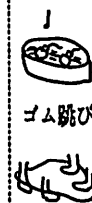
次	活動内容	相互理解を図るための教師の指導・支援
1次 実態調査	外国についての興味・学習への意欲を探る。	結果を集計し児童の学習への意欲、興味の方向を探り活動に生かす。
2次 学習活動	議題の提案 実行委員の選出	集会活動への意欲付けを図る。実行委員になった児童には役割意識を持たせる。
3次 実行委員会	話合いの計画と、話合いの項目の検討。	活動の精選を図る。当日のためだけではなく、日常化できる活動について助言し取り組ませたい。
4次 話合い活動	内容の具体化と詳しい活動の決定	外国人児童やその保護者と協力し、活動に適した遊びを選定する。
5次 学級活動 放課後 朝自習 朝の会 帰りの会	創作活動（パスポート、国旗しおり） あいさつ集の作成とビデオの撮影と視聴。朝や帰りの会であいさつの時間を設定。 遊びの学習（グループごと）	この場面では外国人児童を十分に生かしたい。 母国でのあいさつや遊び方を紹介したことをビデオに録画し、全員に視聴させる。 外国人児童を中心として、遊びを紹介し合う時間をつくり楽しませたい。 どの国にも行けるよう、しおりを工夫させたい。
6次 集会活動	友達の国で遊ぼう（本時）	グループごと活動が円滑に運ばないような時は、指導者が遊びを支援する。 楽しく活動させたい。

(7) 本時の指導

① 本時のねらい

- ・互いの国の遊びを紹介し合い、その違いや共通性に気付くことができる。
- ・楽しく遊ぶことができる。

② 活動内容

活動内容	児 童 の 活 動	教師の支援・援助	国際理解教育の視点と評価
1. 始めの言葉 2. めあての確認	・児童は各国ごとに分かれて集まる。 ・担当の児童は、始めの言葉を発表する。 ・活動のめあてを知る。 ・楽しく遊びましょう。仲良く遊ぶ。協力してあそぶ。 ・いろいろな遊びをおぼえましょう。	・始めの言葉は元気に発表させたい。 ・楽しく遊ぶことについて補説する。	・自分なりの目的意識をもたせる。 ・互いに助け合っていこうとする意欲を喚起する。
3. 係の確認 4. 各グループの紹介 5. 各グループに分かれて活動	・各国の中の役割を確認する。 ・代表児童が紹介する。【各1名×4グループ】 ・分担に従って、活動する。 【韓 国】【中 国】【バングラディシュ】【日 本】 入国審査の係 入国の児童⇒自分のパスポートを見せ入国。 審査官の児童⇒挨拶をしスタンプを押す。	・しおりで確認する。 ・各自の「旅行」の順路をしおりを見て確認しておく。	○自分の考えを相手にしっかりと伝えたか。 ○外国人児童は母語で元気よく紹介したか。 ○いろいろな活動に興味をもって参加しているか。 ○自分の役割を果たしているか。 ・あいさつを交わす楽しさを味わわせる。
・入国 ・あいさつ ・遊びに参加	韓国のじ ゃんけん カバイボー 中国のじ ゃんけん スートチェン ツプ バングラデ ィシュのじ ゃんけん ウージャホウ 日本のじ ゃんけん 各国の遊びに参加 ホスアビノリ  こま回し チェンツー  チャオビーチン クミルトマンル ジョレネメチ  水風船釣り  ゴム跳び	・どのグループにも回るよう、しおりで参加を工夫したい。 ・あいさつは前もって練習しているが、ここでは発音などについては矯正しない。 ・国民の役になった児童は中心になって、教える。 ・まんべんなくどの国にも回るよう声がけする。 ・途中で交代の合図をする。 ・総理大臣役になっている外国人児童に感想を発表させる。	○固定観念にとらわれず遊ぼうとしているか。 ○互いに助け合って活動しようと努めたか。 ○いろいろな遊びを比較したり、多様な見方をしたりしているか。 ※ ・は視点 ○は評価
6. 感想発表	・各グループの「総理大臣」が感想を発表する。 ・活動の自己評価をする。		

③ 評価

- ・互いの国の遊びを紹介し合い、その違いや共通性に気付いたり楽しく遊んだりすることができたか。

(8) 結果

本時授業記録（抜粋）

活動内容	外国人児童の活動状況 ※アルファベットは実態の欄参照		日本人児童の活動状況
各グループの紹介	H男	・楽しみにしていた発表の場である。大きい声でしっかり発表できた。	・これから始まる活動の内容を、しおりで確かめながら聞いている。外国人児童の紹介文は意味が分からないが、外国人の友達が母語を流ちょうに話すのに見入っている。 ・母語を忘れてしまうということが意外なことだったようだ。
	K女	・自分でしっかりとした紹介文を書いた。中国人のR男の発表を気にかけていた。	
	R男	・母語の保持状況が危うく、K女に修正してもらってなんとかやりとげた。	
	A女	・ベンガル語を書いた文を読むことを楽しみにしていた。	
グループに分かれての活動	H男	・韓国語のあいさつをしたり、カバイボーを楽しそうにしていた。笑顔も見られ、活動に集中していた。	【韓国グループ】ホスアピノリに子供たちが集まっていた。こま回しにチャレンジしている子が多かった。日本のこまと似ているので親近感をもっていた。自分の国に友達がたくさんくるようにと呼び掛けていた。 【中国グループ】チェンソーでは10回蹴った児童に賞状をあげるなどして工夫していたので、意欲的に参加していた。普段の生活ではゴム跳びに参加しない男子も興味をもって参加していた。 【バングラディッシュグループ】日本のおにごっこに似ているので戸惑いがなく、すぐに活動できた。ワニがいるという、この国の遊びの設定が活動を盛り上げていた。 ・全体の活動状況を見ると四つの国を全部回ろうと、張り切って活動する姿が多く見られた。遊び方を外国人児童に教わりながら参加して楽しんでいた。 ・あいさつコーナーでは、どの児童も恥ずかしがらずに元気な声であいさつを交わしていた。
	K女	・中国語のあいさつをする係。中国服を着て、始めは恥ずかしそうだったが、慣れてきたらしっかりやりとげようと頑張っていた。	
	R男	・チェンソーを作る時に、一人で張り切っていた。ここでも自分が中心になって進めていた。	
	A女	・クミルトマルジョレネメチでは、民族服を着用して誇らしげだった。	
感想発表	・4人の児童とも、自分の言葉で楽しかったという気持ちを表現できた。 ・各グループの総理大臣としての立場で感想発表をするので緊張していたようであった。		・感想カードを書いていた。

(9) 考察

① 触れ合い体験を生かす活動の工夫

【計画の段階から参加させる】

日本語がある程度理解できる外国人児童を計画の段階から参加させたことで、互いの活動の意欲を喚起した。

【保護者の協力を得る】

自分の所属するグループ内で「遊びの学習会」をもたせたことは、その児童の保持している自国の文化を伝える活動として有意義であった。

外国人児童は必ずしも母国の遊びを知っているわけではなかった。そこで遊びを父母から取材したり教師と話し合ったりする中で、今回の遊びを決定していった。このことは父母の協力を得た活動例となった。

【遊びを通じて】

それぞれの遊びから、その国独自の文化を年齢相応の感じ方で理解できたのではないだろうか。何年か後に日本の文化に対する認識が深まった時にも、今回の経験が生きてくるのではないかと考える。

【文字に触れる】

あいさつ集の作成に当たって、自分の参加する国の文字を見よう見まねで、各自書いていた。子供たちは中国も漢字を使うことを知り、親近感を覚えたようであった。

またベンガル文字を上手に書きこなすA女を見て、「2か国語話せるなんてすごい」という驚きを感じたことは有意義だったと考える。

【あいさつの学習会を通して】

計画委員会で「あいさつの勉強をしよう」という提案があった。さっそく朝の会や帰りの会など

の時間を活用して4か国語のあいさつをする時間をもった。外国人児童のリードで元気なあいさつを毎日繰り返すうちに、次第に学級活動への意欲も高まった。

また、気に入ったというあいさつがそれぞれにでき、外国人児童も日本人児童が母国を理解してくれていてうれしいという感想がみられた。

ベンガル語に対して興味をもった児童は、「今度辞書で調べてみたい」という感想をもった。意識の変化が見られた点で興味深い。

日本式のお辞儀は中国、韓国とも共通しているが、バングラディッシュでは手を頭の上においてあいさつすることに興味をもったという感想がみられた。

【民族衣装を着る】

バングラディッシュ人のA女の発案で当日、民族服を着用することになった。韓国、中国、バングラディッシュの民族衣装が当日集められた。児童は民族服の美しさに目を奪われ、喜んで着用したり写真をとったりした。児童の興味のある活動を直接体験できたことは有意義であった。



写真1 チマチョゴリを着て遊ぶ。

例1 挨拶の学習、文字を書いて

感想カード

名前【 H H 】

① あいさつの勉強をして、思ったことや気づいたことをまとめましょう。

バングラディッシュのじはまほろのじみたいたのですきです

感想カード

名前【 Y K 】

① あいさつの勉強をして、思ったことや気づいたことをまとめましょう。

ベルガル語、すまれくむのとき、手を豆腐の前に、おいて、やるのかとて
楽しかった。

② 相互理解の心を育てる取り組み

【遊びの学習会での変容】

中国人のK女は、国際学級でも所属学級でもかなりの速さで日本語や学習の理解ができていた。しかし、まだ日本に不慣れではないかという友達

の配慮から面倒を見てもらう場面が多かった。今回ゴム跳びのビデオを撮影する際、今までには見せたこともないくらい積極的に活動し、日本語で説明する姿が見られた。

「K女ちゃん、日本語上手なんだね、すごい」とK女が友達に言われた時、「自分の日本語をほめてもらって、うれしかった」という感想を述べている。外国人児童との触れ合いを生かす活動を組み立てて計画することは、相互理解のための効果的な方法である。そのためには事前の調査、準備も大切になってくる。

【遊びを終えての感想】

例2の感想からも分かる通り、バングラディッシュ人児童は母国の遊びを友達が楽しんでいるのを見て満足感を持ったことが分かる。日本人児童の感想では、学級集団で遊びを工夫して自分たちの遊びの中に取り入れていった様子が見えてくる。

【国旗を作る活動を通して】

自分の所属しているグループの国旗を作る時間を設定した。大小様々の国旗を喜んで作っているうちに国旗の意味を尋ねる質問が集中した。

外国人児童の中に、母国の国旗の意味を知って



写真2 製作した国旗を飾っての活動

いる児童がいたので説明をさせた。また、教師があらかじめ、その由来を調べておき補説した。国旗には歴史、国民の構成、風土などを表す意味があることを児童なりに理解したのは、指導の意義があったと考える。

例2 遊びを終えての感想

わたしは、チェンソーかともたのしかたです。わたしは、長いひもかいているのな。さんとかに回って、しょうじょうもい。いました。でも、Eいひもかいていないのは、いかにしかけれません。でした。それに、あしにびつかって、いたかったです。でも、たのしかったです。

日本人児童 (A. Y女)

人ラビーのたのしかったのは、かん国の「すずめ」のいれと、日本の「かき」のすずめ。水うせんアでは、すずめせんが、とても楽しかったです。かん国の「すずめ」のいれと、日本の「かき」のすずめ。水うせんアでは、すずめせんが、とても楽しかったです。かん国の「すずめ」のいれと、日本の「かき」のすずめ。水うせんアでは、すずめせんが、とても楽しかったです。

バングラディッシュ人児童 (A. A女)

(10) 実践の反省と課題

ほとどの児童も、互いの国の遊びの違いや共通性を認識して遊ぶことができた。児童は面白くない遊びに飛びついてはこない。教師は面白さを発見できる遊びを選定したり、場を設定したりする必要がある。外国人児童との触れ合いを生かすためには、その保護者の協力も不可欠である。

また、本時では児童の興味を持続するだけの細かい時間設定が必要だった。まして、日本語を話すことが不十分な児童を主役にすえる場合は、日本語も含めその国の児童が誇りを持って活動できるように内容に配慮しなければならないと考える。

■ 4 社会科における授業実践

(1) 小单元名 「自動車をつくる工業」

(2) 小单元の目標

・我が国の自動車産業が盛んになってきた理由や外国との問題点について、輸出入に関する資料などを使って意欲的に調べ、自動車産業が人々の生活に果たす役割を理解するとともに、これからの日本の工業のあるべき姿を考えることができるようにする。

・外国人の友達の発表を通して、日本の立場とは違う考え方があることを知り、かつ、お互いに認め合うことができるようにする。

(3) 小单元の評価規準

評価の 観点	評 価 規 準
社会的事 象への関 心・意欲 ・態度	日本が世界一の自動車生産国であることを知り、自動車工業にかかわる課題に関心を持ち、それらを進んで調べようとする。
社会的な 思考判断	大量生産をするためのしくみや関連工業の役割を知り、生産を高めるための工夫や協力について考える。
観察・資 料活用の 技能表現	課題に関する資料を活用し、分かったことをまとめ、分かりやすく表現する。
社会的事 象につい ての知識 理解	自動車工場では、分業と流れ作業で大量生産されていることや、関連工場との仕事のつながりが分かる。

国際的感 覚の育成	外国人の友達の発表を聞き、立場の違いや感覚の違いを知り、かつ、お互いにそれを認め合う。
--------------	---

(4) 小单元について

・本单元では、近代的な工業の一例として自動車生産を取り上げる。流れ作業による大量生産によって、性能のよい自動車を作っていることや、よりよい自動車を作るための工夫や努力、関連工場のかかわり、海外にも広がる自動車生産などについて理解させる。さらに、これからの日本の工業のあるべき姿を考えることができるようにする。

・学級の構成は男子18名、女子16名、計34名である。社会科の学習に関しては、社会の現象に対して比較的敏感であると言える。朝の会で「昨日のニュース」として、テレビや新聞から印象深かった記事の発表を続けているが、次第にニュースに関して自分の考えを述べるようになってきている。社会の授業においても関心が高いと言える。資料を集めたり、資料から読み取って考察したりする活動に熱心に取り組んでいる。

・発表はまだ活発といえる段階ではないが、ノートの記述を見ると、学習事項のまとめや疑問点などをきちんと書いている児童が多い。グループでの学習活動を通して、意見を出し合い、学習を深め合うことができるようになってきている。

・外国人児童に対しては、言葉の壁もあり、学習や給食、清掃活動などでどう接していいのかわからず、多少距離をおいて接している様子が見られた。ただ、昨年から同じ学級だった児童もおり遊び時間は一緒に過ごすなど、次第に仲間意識が育ってきている。

・1学期には、教師が手助けしていたことを、同じグループの児童ができるようになってきている。

・外国人児童（J 君）は中国系アメリカ人である。昨年11月末に来日し、すぐに本校に編入した。父親は技術者であり、学校近くの合弁企業に勤務している。当初の予定では3年間程度の滞在になるということである。

昨年度は1日に1時間程度の日本語の取り出し授業を受けていた。およそ4か月で基本的な日本語を習得したということで、取り出し授業は今年度から行っていないが、1学期は国語や社会の授業時に日本語のプリントを学習していた。

2学期からは、社会の授業にも参加させたいということで、国際理解教育担当者が週3時間の内2時間をTT方式で指導に当たっている。国際理解教育担当者は主に外国人児童の指導を中心にして、J 君が所属しているグループの児童の個別指導を行っている。

J 君は学習意欲が高く、知りたいことに対しては、納得するまで質問をしてくる。知識も豊富である。2学期からは、慣れてきたこともあり、とても活発になり積極的に学習している。

「伝統的な技術を生かした工業」の単位では、「こけし」についてグループ学習をしてまとめた。J 君はそれぞれの特徴をつかんだこけしを丁寧に描き、発表することができた。また、こけしの歴史や系統についても「秋保工芸の里」で説明を受け、理解することができた。

英語の使用については特に制限していない。遊びの中では、できる限り日本語を使うようにしているので、友達とのコミュニケーションは少しずつよくなってきている。しかし、学習の場では、なかなか日本語を使うことが難しいので、英語でもよいということで指導をしている。

本校の児童は、半数以上が英語を習っているの、生きた英語に親しませるということでも「外国人児童との触れ合い体験を生かす」ということになっていると思われる。

また、J 君は音楽や算数といった日本語をあまり必要としない学習においては、とても優秀な成

績を収めている。

・J 君のアメリカでの生活体験を生かすということで、日本人とは違ったものの見方、考え方をするのではないかと期待している。特に自動車工業は日米ともに盛んで、しのぎを削っている状態なので、英語でもよいから、彼の自動車工業に対する考えを示させたいと考えている。その点では、来日して1年程度ということで、アメリカでの生活を覚えており、また、父親が技術者であるということで助言を得られやすいというメリットがある。日常場面で考えていくと、外国人であるを意識することは、徐々に少なくなっている。

「外国人児童との触れ合い体験を生かす」ということは、最終的には文化の壁をこえて、相互理解を深めつつ個性を認め、個々の特性を生かすということで、外国人、日本人の区別なしに「個性を生かす」ということにつながっていくと考える。

(5) 指導計画（10時間扱い）

	学習の流れ	教師の支援活動
つかむ	・日米の自動車生産のグラフを読み取り、気付いたことを話し合う。 ・世界第2位となったアメリカの立場になって考える。 ・共通の学習問題を設定する。①	・日米の自動車生産のグラフの提示 ・日米の自動車の輸出入のグラフの提示 ・逆輸入車のカタログの提示
日本はどうしてアメリカをこすぐらい車売るようになったのか。 それと90年から自動車の売り上げがのびていないのはどうしてか。		

	学習の流れ	教師の支援活動
つかむ	・ 共通の学習問題から自分で調べたいことを見出し、個人の学習問題を考える。 ・ 個人の調べたい内容を検討し、必要に応じてグループ化を図る。個人やグループごとに、調べる計画やまとめの方法などを話し合う。 ①	・ 個々の問題が日米の自動車問題にまで、発展できるよう支援する。 ・ 何について、どんな方法で調べるか、予想を立てることができるよう助言や支援を行う。
調べる	・ 学習問題にそって調べる。 ② ※予想される学習問題 ・ 価格が外国の車より安いからではないか ・ どうして安いのか。 ・ 日本車は故障しにくいからではないか。 ・ なぜ故障しにくいのか。 ・ 日本車は便利なものがたくさんついているからではないか。 ・ 日本車は安全だからではないか。 ・ 日本車は燃費がいいからではないか。	・ すぐに結論を出さずに、その論拠になるデータを整理し、問題点を引き出す。 ・ 安くなっている理由については、予想を立てさせて調べさせる。 ・ できる限りアメリカ車と対比させたい。
整理する	・ 学習問題をまとめる。 ② ・ 小冊子にまとめる。	・ B4大の原稿用紙にまとめそれをとじるようにする。

発表する	・ 小冊子をもとに、グループごとに発表する。 ② ・ 質問や意見を出し合い、考えを深めていく。(本時2/2)	・ 質問や意見で深めるようにしていく。
まとめる	・ 調べたことを中心にして自動車工業の問題点をまとめる。 ・ これからの自動車工業を考える。 ①	・ 流れ作業、分業、関連工場などといったことをおさえる。
	・ 評価テストをする①	

(6) 本時の指導

ア 本時の目標

- ・ 友達の発表を通して、自動車産業が急激な発展を遂げた理由や問題点を知る。
- ・ 外国人の友達の発表を聞いて、日本の立場とは違う考え方があることを知り、かつ、お互いに認め合うことができる。

イ 資料、準備物

- ・ 児童が作成した自動車工業に対する小冊子
 - ・ リスニングカード
- 発表を聞いて、分かったこと、疑問に思ったこと、考えたことを書くためのもの。

ウ 指導過程 次ページ

エ 評価の観点

- ・ 友達の発表を聞き、自動車産業が急激な発展を遂げた理由や問題点を知ることができたか。
- ・ 外国人の友達の発表を聞いて、日本の立場とは違う考え方があることを知り、かつ、その考えを認めることができたか。
- ・ 日本人の友達の発表を聞き、多様な考え方があることを知り、その考えを認めることができたか。

ウ 指導過程 (2時間分)

	学 習 活 動	T 1 (担任)	T 2 (国際理解担当)	国際理解教育 の視点と評価
導 入	授業のめあてを確認する。	発表会だということ を確認する。		
	友達の発表を聞いて、自分の 考えをくらべよう			
展 開	グループ発表をする。 ・小冊子をもとに説明をする。 ・聞く側の児童はリスニングカードにメモを書いたり、設問に答えたりしていく。 ・発表後、質問を受け、分かる範囲内で答える。 ・感想発表をする。 グループ発表を聞き、疑問に思ったことを発表する。 疑問点について、説明をしたりお互いの考えを発表し合ったりする。 (中 略)	発表会だということを確認する。 ・注意事項の確認 ・リスニングカードの記入の仕方の説明 ・児童がどうしても答えられない場合には、「あとで、調べてみてください。」とか、補足説明をするなどの支援を行う。 ・全体を振り返ってどうしても疑問に思うことを出させる。	・J君には英語で補足説明する。 ・小冊子をもとに難しい言葉は英語で補足説明する。 ・J君からも考えが引き出せるようにする。 - 以下同様 ・J君が発表の際に、日本語で説明できない場合には英語を日本語に通訳する。	・友達の発表を聞こうとしたか。 ・J君の発表を聞こうとしたか。 ・日本車とアメリカ車の違いを比較することができたか。 ・J君の考えを認めることができたか。
ま と め	⑪「超ミラクルマル秘リポート」なぜ、日本の会社の車をアメリカで作って日本に輸出するのか。 ⑫「ぼくのレポート」☆J君の発表どうして、アメリカの車が売れるようになってきたか。どうして日本の車が売れなくなってきたか。 全部のグループの発表を聞き、疑問に思ったことを発表する。 疑問点について、説明をしたりお互いの考えを発表し合ったりする。よりよい自動車はどんなものかを考える。	・今後、外国に日本の工業が増えるかどうかを確認する。 ・80年式のコルベットと比べて、95年式のカマロがよくなった点を確認する。 ・全体を振り返ってどうしても疑問に思うことを出させる。 ・次時の予告をする。		

(7) 授業記録 (抜粋)

J 君の発表

「ぼくのレポート」

テーマ

「アメリカの車はなぜ最近売れるようになってきたか」

予想

・アメリカで日本の車は長持ちするから、みんなが買い換えなくていいからではないか調べて分かったこと

父親に聞いて分かったこと

・最近のアメリカの車はエンジンを改良して燃費を良くしスピードも出るようにした。
・値段を下げてきたし、右ハンドルの車も作られるようになってきた。

具体的な例として

1980年製シボレーコルベットと1995年製シボレーカマロの比較をする。

ほとんど日本語で発表することができたが、説得力に欠けるところがあったので、T2教師が補足説明をする。

学級の友達からの質問

「アメリカの人々は、どうして大きい車を買うのですか」

J 君の答え ※英語で答えたが日本語に要約
「それは、キャンプに使ったりスポーツに使ったり、大きな車を使うと便利な場合が多いからです」

学級の友達からの質問

「デザインをどのようにしたのですか」

J 君の答え ※英語で答えたが日本語に要約
「車のデコボコをなくすデザインに変えていきました」

(8) 考察

実践の反省と課題

「外国人児童との触れ合い体験を生かす」ためには、次のようなことが必要と考えられる。

・その外国人児童が母国の知識をある程度得ていること。

今回は、来日してから1年程度であり、4年生まで母国にいたということで、その点での問題は少なかった。

・父親や母親の援助が得られること。

子供の知識だけではどうしても十分でないところがあるので、母国のことを総合的にとらえられる大人の目が必要となってくる。その際、父親や母親から得る情報はとても大切なものとなってくる。今回は、父親が技術者ということで、工業に対する知識が豊富なために、多大な援助を得ることができた。

・ある程度の日本語を理解していること。

母国の知識は十分あるが、日本語を理解せずに母語だけの発表では、聞く側に無理が生じてくる。その点では、今回は日常会話を理解し、ひらがなで書くことができるJ君には無理が少なかったと言える。

授業後の感想の中で、J君の発表をどの程度理解できたかという項目に対しては、60%の児童が「日本人とかわらない程度理解できた」40%の児童が「理解できた」と答えている。それに対してJ君は、学級の友達の発表を「4分の1理解することができた」と答えている。小冊子を作りそれをもとに発表しているので、ある程度理解することができたと思う。

また、J君の発表に対して、学級の友達は、「アメリカの人がどうして大きい車を買うのか」が分かった

「アメリカの車が少しずつ売れてきている理由」が分かった

などと答えている。J君の言いたいことは、ある程度伝えられたと判断できる。

■ 5 適応指導と触れ合い体験の実践

(1) 外国人児童に対する適応指導(高森東小学校)

昨年度の国際理解教育研究グループにおける国際理解に関する調査では、日本語の不自由な外国人児童等が在籍している学校数は14校ということである。その内の7校で担任以外の教師が日本語の指導をしている。いわゆる「取り出し授業」である。国見小学校では、国際学級を設置して専任の教師が日本語の指導をしているが、それ以外の学校では、教務主任や研究主任といった教員が週に何回か日本語の指導をしているという現状である。

本校では、昨年11月にアメリカ人児童2名を受け入れた。小学1年の女子と小学4年の男子である。

当初は、2人一緒に日本語の指導をしていたが時々英語で兄弟げんかが始まってしまうので、別々に指導することにした。

兄の方は4か月ほどで基本のテキストを終えることができたので、5年生になった段階で取り出し授業を終えることにした。ただし、プリントによる日本語の指導はその後も継続した。

ここでは、妹の方について詳しく記してみたい。

「取り出し授業における日本語指導」

対象	小学2年 女子
出身	アメリカ合衆国テキサス州オースティン
来日	平成6年11月
帰国予定	平成9年7月
指導者	研究主任(担任外)
指導室	図書室及び校内全般
指導回数	週3～4時間
使用テキスト	『にほんごをまなぼう』 文部省編 ギョウセイ
指導書	『にほんごをまなぼう』教師用指導書 文部省編 ギョウセイ 『国際理解教育Q & A』 多田孝志編 教育出版

昨年11月から日本語指導をしており、1年経過した現在、日常のあいさつや遊びでは特に問題点は見られない。ただし、「国語」に関しては、できる限り「日本語」の指導の時間として「取り出し授業」を行っている。

段階を追って、振り返ってみたい。

第Ⅰ期(平成6年11月～12月)

来日してすぐということもあるし、本人のアメリカでの学校経験が2か月程ということもあり、まずは学校に慣れることから始まった。

日本語については「あいさつ」を中心にして、あまりテキストを使用しないで指導をした。それよりも学校の中を探索したり、学校で働く人にあいさつをしたりすることで、雰囲気になじませるように心がけた。

それと併せて、一緒に遊ぶことに心がけた。校庭の遊具で遊んだり、ボール遊びをしたりと遊び方を知らせることで、学級の友達と触れ合うきっかけをつかませたかったからである。

第Ⅱ期(平成7年1月～3月)

なかなか日本語を話そうとしない時期が続いた。学級の友達に英語を習っている子供が多いということもあるし、教師も英語を知っているということで日本語の必要性をあまり意識しなかったようである。

テキストを使った学習はその場では理解するものの、復習の段階となると「分からない」という状態が続いた。それでも、日本語を使うとほめてあげるようにして、日本語を使おうという意識を徐々に育てるようにした。

友達関係は仲の良い友達ができ、その友達を中心に、小グループでなわとびや鬼ごっこをするなどの遊びをすることが多くなった。

日本語に関しては、あいさつだけでなく生活に必要な数の練習や、学校内の施設利用等、身近なことを中心に指導した。

第Ⅲ期 (平成7年4月～現在)

2年生に進級した。担任の先生は持ち上がりでできる限り情報交換をするようにしている。

学校には大分慣れてきたので、日本語のレッスンをするように心がける。テキストをもとに1回で一つのこと(1ページ程度)だけを中心に指導するようにした。難しい事項については、3回程度繰り返して指導するようにした。

1年間かけて『にほんごをまなぼう』のテキストが終えられるように指導を続けている。1時間の中でテキストを使用したレッスンは15分程度である。それ以上だと集中力が続かないので、ゲームを取り入れて日本語の学習をしている。

今までに効果のあったゲームを挙げてみると、

・階段ジャンケンゲーム

ジャンケンをして勝つと階段を昇ることができるというゲーム

・ナビゲーターゲーム

教師が子供を肩車して、目隠しをする。「右」「左」「前」「後ろ」と子供が指示をして教師が、そのとおりに動くというゲーム

・英語、日本語アベックしりとりゲーム

英語と日本語のしりとりをしていくゲームで、なるべく文字数の多い方が勝ちというルール。

・ハンディ五目ならべ

紙にマス目を書いて、白と黒の丸を書いていく。勝つと並べる数が多くなるというゲーム。

・トランプ

数の学習に効果的。また、小人数の友達とのコミュニケーションを図ることができるので、機会をみては、他の子供たちにも参加してもらう。

現在、本人は少しずつ日本語を話そうとしている。最初のかたくなな姿勢はほとんど見られなくなっており、教師のすることや話すことをまねるようになってきている。ちなみにトランプの「神経衰弱」では教師もたじたじの状態である。

(2) 「外国人児童との触れ合い体験を生かす」事例紹介

小学校における「国際理解教育」とは、外国人児童の特性を教育の触れ合いの場に生かすということと考えられる。

今までは、外国人を学校に受け入れても、日本の学校にとけこませることを第一に考えていることが多かった。そのことは、言語の問題もあるし学校としても多様な教育をなかなかできなかったという事情がある。しかし、今後「個」に応じ、「個」を生かす教育を推進していくためには、外国人の特性を損なうことなく、むしろその特性を生かし、国際理解教育につなげていくことが肝要であると考えられる。

そこで、現在各学校で行われている「外国人児童との触れ合い体験を生かしている」という事例の中から、いくつかを次に紹介する。

・授業や特別活動の中で母国の紹介をする。

主に社会や学級活動の時間で行われている。

・外国の紹介の掲示物に母国の紹介文を書く。

国際理解の掲示コーナーに写真等といっしょに本人が書いた紹介文を掲示する。

・音楽の時間に母国の歌を紹介したり、日本でも親しまれている歌を母語で歌ったりする。

・母国でよく行われている遊びを紹介する。

・授業や特別活動の中で、外国人のものの見方、考え方を発表する。

・調理実習等で母国の料理の紹介をする。

・その他 資料参照

日常的ではないが、何かの機会に上記のようなことが行われることで、日本の子供たちにも異文化を受容する国際性が身に付いていく。また、外国人児童にとっても、自分が受容される場面があるということで、よりいっそう日本の学校に親しみをもつというプラス面が見られる。

VI 研究の結果と考察

外国人児童との触れ合いを授業に生かすためには、必要条件を満たしただけでは、即「生かした」ことにつながるとは言えない。そこで、これまでの授業実践の結果とその考察を行い、今後の指導の在り方を述べてみたい。

第1に、学校や教師の姿勢が問われることになると考えられる。学校や教師が、受け入れた外国人児童を外国人としていかに受容するのか、その方法によって、教育効果は大きく変わっていくと思われる。中には、生まれた時から日本にいるという外国人児童もいるが、小学校の段階で来日した外国人児童を考えた場合、外国人であることを認め、母国でどんなことを学び、どんな考えをもっているかを、教師ができる限り早くつかむことが重要であると思われる。教師がどこまで異文化について理解を深めようとするかが問われているわけである。

第2に、コミュニケーション能力の向上が挙げられる。英語を母語としている外国人児童であれば、教師側はある程度理解することができるが、今後増えると考えられるアジア各国からの児童を受け入れることを考えた場合、その児童の母語を教師がある程度分かる資料を用意する必要があると考えられる。その外国人児童の母語をある程度理解しているかどうかで、最初のコミュニケーションがよくなるかどうかが決まると言える。これは、その児童の母語を理解しようとする姿勢が教師や学級にあると、たとえ言葉が通じなくても気持ちは通じることになるので、コミュニケーション能力が高まり、外国人児童を生かすということにつながっていくと考えられる。

第3に、外国人児童の姿勢が問われることになるであろう。その外国人児童が、積極的に母国の

ことを紹介しようとするかしないかで、その学級がより豊かな国際理解の場となりうるかどうかが決まってくると考えられる。ただし、自分の国ばかりに目を向けている外国人児童だと、かえって日本人児童とコミュニケーションがとれずに孤立化してしまう恐れがあるので、その点の調整を教師が留意していかなければならないと考える。

第4に、授業効果の分析が必要となってくると考えられる。外国人児童を生かした授業を実施した場合、その授業を通して受け手側の日本人児童にどのようなインパクトを与え、そのことがその後にもどのような影響を与えていくかを、調査・分析していく必要があると考える。

最後に、今回の調査研究を通して言えることは、生まれた時からの在日外国人に関しては、日本人と同様の学校生活を送っているので、言葉の問題は少なく、特に外国人という意識を教師側がもつことは少ないということである。

現在増えつつある留学生や企業で働く外国人の子供たちは、言葉の面でのハンディがあるかわり母国での生活体験があり、そのことを学級や学校で生かすことが可能と考えられる。そういう外国人児童を受け持っている教師は、日々言葉の面で個別指導に当たりながら、「外国人児童との触れ合い体験を生かす」ということを念頭に入れて指導に当たっていると言える。今回、学級活動と社会科の授業を通して、「外国人児童との触れ合い体験を生かす」という事例を検証したが、この二つの事例だけを見ても、「外国人児童との触れ合い体験を生かす」という観点で、国際理解教育に当たれば、多様な価値観が生まれることが分かった。

今後、さらに国際理解教育の事例を増やし、教師相互で情報交換していくことが、国際化に応じた教育を推進する上で、大切であると考えられる。

Ⅶ 研究の反省と今後の課題

■ 1 研究の反省

(1) 実態調査において

調査は、現在外国人児童を担任している教師及び担任経験者、外国人児童の保護者等を対象としたことにより指導上の問題点や学校への要望などはとらえることができた。しかし、外国人児童に直接調査しなかったため、外国人児童が生活上や学習上「どのようなことで悩んでいるのか」「どのようなことが問題となっているのか」など明らかにすることができなかった。

(2) 授業研究において

学級において、日本人児童が外国人児童を素直に受け入れる体制や環境づくりを意図的に行ったので、外国人児童自身が自らの存在意義に気付くことができた。さらに日本人児童も異文化を受容し、自国理解を深めた。

今後、国際理解教育に携わる教師は、率先して自分自身が異文化について理解を深めようとする意識変革に努める必要があると考える。

■ 2 今後の課題

国際理解教育の推進に当たっては、次のことが課題となってくる。

- (1) 外国人児童の日本語指導を含めた適応指導を保護者との連携を図りながら、学校としてどのような指導体制でより充実させていくのか。
- (2) 教科・領域の中に位置付けられた国際理解教育をどのように具体的に実践していくのか。
- (3) 国際理解教育の学習指導で目指すべき児童の姿を各教科で具体的に想定し、それとのかかわりで教材の選定・開発の視点や支援の在り方を明らかにすること。

- (4) 学年の発達段階を踏まえて外国人児童や日本人児童が国際理解教育を通して、どのように変容したかについての評価はどうあればよいのか。

- (5) 児童が各教科・領域で学んだ学習内容を体系的に結び付けるためのクロスカリキュラムの作成。

今後、調査の結果や反省を踏まえながら、国際理解教育のいっそうの充実に向けて各学校及び各関係機関と協力し合い、さらに実践的な研究を推進していくことが必要である。

● 参考文献

- 月刊『小学校教育』 教育開発研究所 1988
- 仙台市立国見小学校研究紀要『国際理解教育の在り方をさぐる』 1991
- 文部省『にほんごをまなぼう』 ぎょうせい 1993
- 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会『地域に根ざした国際理解教育実践事例集』 第一法規 1993
- 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会『国際理解教育Q & A』 教育出版 1993

● 委嘱研究員

宮城学院女子大学教授	山形 孝夫
仙台市立片平丁小学校教諭	日下 歩
仙台市立高森東小学校教諭	相原 隆志
仙台市立向山小学校教諭	文屋 仁
仙台市立鶴谷小学校教諭	菅原 一栄
仙台市立国見小学校教諭	齋藤 希美
仙台市立南小泉小学校教諭	小原 純

● 担当

仙台市教育センター	
指導主事	今藤 紀雄

国際理解教育に関する調査 基礎資料

調査期間 平成7年 7月

回答数 (人)	担 任	担任経験者	合 計
	66	76	142

■ 教師を対象にしたアンケート

設問1 外国人児童を指導する上で問題がありますか（ありましたか）。

	担任	担任経験者	合計
(1) 大いにある	5	6	11
(2) ある	27	25	52
(3) 特にない	34	45	79

設問2 外国人児童を指導する上で問題となっていることは何ですか。

(1)学習言語の理解が不十分で指導が難しい。

	担任	担任経験者	合計
そう思う	22	24	46
そうは思わない	34	48	82

(2)生活習慣や文化の違いにどのように対応してよいか分からない。

	担任	担任経験者	合計
児童に関する具体的な事例記入	14	11	25
保護者に関する具体的な事例記入	10	10	20

設問3 外国人児童の適応指導として大切と思われることは何ですか。

	担任	担任経験者	合計
①日本語指導	33	42	75
②生活指導	16	21	37
③学習への個別指導	26	28	54
④学級への適応指導	36	36	72
⑤保護者との連携	41	47	88
⑥その他	6	8	14

設問4 外国人児童を学級に適応させるために必要なことは何ですか。

	担任	担任経験者	合計
①外国人児童の特性を把握する	42	50	92
②日本語の習得を図る	37	41	78
③友達を増やす	46	50	96
④活躍の場を与える	34	44	78
⑤互いの文化や生活の違いを理解させる	37	40	77
⑥定期的なカウンセリングを行う	15	10	25
⑦学校の受け入れ体制の整備を図る	27	33	60
⑧その他	6	3	9

設問5 日本人児童との相互理解を図るためには、学級の中でどんなことが必要だと思いますか。

	担任	担任経験者	合計
①学習の場を通して互いに考え方や文化の違いを理解し合う	34	41	75
②学習以外の場を通して互いに考え方や文化の違いを理解し合う	41	41	82
③遊びの場を通して互いに考え方や文化の違いを理解し合う	50	57	107
④その他	6	3	9

設問6 今までに国際理解教育を推進する上で、外国人児童をどのように生かすことができましたか。また、できると思いますか。(自由記述の回答を分類したのべ回答数)

設問7 これからの国際理解教育を推進する上で、外国人児童をどのように生かそうとお考えですか。(自由記述の回答を分類したのべ回答数)

	設問6	設問7	合計	
文化理解	91	43	134	言語 生活習慣 食生活 芸能・芸術 遊び など
相互理解	25	36	61	外国人児童の個性 偏見なく接する必要 など
人間理解	23	22	45	人種 他国理解 など
世界の現実理解	11	8	19	国際情勢 政治 など

文化理解の要素

	設問6	設問7	合計	
言語	27	7	34	あいさつ 中国語での漢字の発音 など
生活習慣	18	15	33	いろいろな生活習慣 民族衣装 など
食生活	10	5	15	外国の料理の勉強会 お弁当くらべ など
芸能・芸術	10	0	10	世界の歌 世界の絵画鑑賞 民族芸能 など
遊び	8	1	9	お互いの遊びの紹介 など
スポーツ	4	0	4	得意なサッカーやバスケットボール など
歴史	4	5	9	外国から見た日本の歴史 など
行事	1	2	3	外国の行事の様子 など
宗教	1	0	1	食べてはいけない物がある など
その他	8	8	16	絵本や写真 など

■ 外国人児童の保護者を対象にしたアンケート

問1 あなたは日本に来てから何年になりますか。

滞在期間	1年未満	1～2年未満	2～3年未満	3年以上	合計
人数	14	11	14	40	79

問2 あなたは子供の教育について学校にどんなことを期待していますか。

滞在期間	1年未満	1～2年未満	2～3年未満	3年以上	合計
友達と仲良く遊ぶ	10	10	12	30	62
子供の個性を伸ばす	6	7	10	34	57
授業が分かる	7	9	9	21	46
日本語の習得	10	9	9	17	45
成績の向上	3	4	10	23	40
担任の先生との信頼関係	7	6	7	20	40
生活習慣や文化の違いが分かる	9	7	2	15	33
個別指導	2	3	1	7	13
定期的なカウンセリング	1	3	1	6	11

抄 録

国 語 科

読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方

—— 計画的、継続的な読書活動への支援を通して ——

キー・ワード 国語科読書指導，読書生活の指導，読書活動への支援，
読書意欲，事例研究

この研究は，国語科及び読書生活における読書活動への支援を通して，読書を楽しむ児童を育てる学級での指導の在り方を探ろうとしたものである。

指導学級での児童の実態を踏まえ，授業実践と事例研究を行った。

その結果，児童の読書実態を共感的に受け止めること，読み聞かせなどを通して本との出会いの場を意図的・計画的に設けること，読書活動を通じた児童間の交流を図ることなどの手だてが有効であることが認められた。

仙台市教育センター教育研究紀要第3号 平成8年3月

社 会 科

子供たちが意欲を持ち主体的に取り組む社会科学習の在り方

—— 地域教材の活用と支援の工夫を通して ——

キー・ワード 社会科の学ぶ力，地域教材の活用，支援の工夫

この研究は，新学力観の考え方にに基づき，学習者の立場に立った社会科学習の在り方を，地域教材の活用と教師の支援の工夫を通して実践的に追究したものである。

地域教材の活用について，児童生徒・教師双方にアンケート調査を行うとともに，小学校と中学において授業実践を行った。

その結果，地域教材活用の有効性と教師の支援の在り方を探ることができた。

仙台市教育センター教育研究紀要第3号 平成8年3月

国 理 解 教 育	際
--------------	---

学級における相互理解を図るための国際理解教育

—— 外国人児童との触れ合い体験を通して ——

キー・ワード 国際理解教育，相互理解，適応指導，外国人児童，
触れ合い体験，異文化理解

この研究は，学級における外国人児童との触れ合い体験を通して，国際理解教育の指導の在り方を探ろうとしたものである。

外国人児童の適応指導の実態及び外国人児童との触れ合い体験を生かした国際理解教育の課題に関する調査を行い，それをもとに授業実践を行った。

その結果，外国人児童の個々の特性を的確に把握し，彼らの特性を受容する環境づくりと指導を行えば，相互理解を図ることができることが明らかになった。

仙台市教育センター教育研究紀要第3号 平成8年3月

教育研究紀要

『教育は いま』 第3号

発 行 日 平成8年3月31日

編集・発行 仙台市教育センター
所長 長 澤 靖 彦

所 在 地 〒983 仙台市宮城野区鶴ヶ谷北1-19-1
TEL (022) 251-7441~3
FAX (022) 251-7486

